

平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費

女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」成果 2006-1

研究者養成のための男女平等プランに関する調査(1)  
大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書

2007 年 3 月

**早稲田大学**

女性研究者支援総合研究所

## はじめに

早稲田大学では、平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業プログラムに「研究者養成のための男女平等プラン」が採択された。本プランは、機関としての女性研究者比率上昇の具体的達成目標をかかげた上で、男女共同参画推進室を設置し、継続的に若手研究者を育成・支援し、女性研究者が働きやすい環境を整備することを目的とした事業である。事業遂行にあたって女性研究者支援総合研究所を設立し、総合サポートセンターの開設、保育等サポートシステムの確立、教育・交流事業の実施、研究中断者のリカレント制度の確立、海外の大学との情報交換という具体的事業課題に着手した。

周知のとおり、早稲田大学は男女共学の私立総合大学である。その構成員である学部学生、大学院生、助手、教員、職員は、大規模でありかつ広い専門領域にわたっている。おのずと研究活動のあり方や志向性は多様であり、研究上のニーズは正反対の内容を示す場合すらある。残念ながらこれまで本学では、支援ニーズを総合的に把握するような情報を集積してこなかった。そこで、基礎的データを収集することが本事業推進にあたって喫緊の課題として認識された。具体的には、調査ワーキング・グループをもうけ、大学院生、助手、教員を対象に現状とニーズに関する調査を実施することとなった。その第一弾として、2006 年 12 月に本学大学院生全員を対象とした「研究者養成のための男女平等プランに関する調査(1)大学院生の現状と支援ニーズ調査」を実施した。年末年始という多忙な時期にもかかわらず、幸い多くの大学院生に回答いただき、集計作業をすすめ、本報告書として公表することとなった。

本学大学院生の研究生生活の現状や現在希望している進路、ならびに研究上の困難やニーズについては、本報告書 2 章から 4 章のとおりである。巻末のまとめにあるように、本学大学院生は、非常に高い研究意欲をもっているものの、日常的な研究生生活ではいくつかの困難や悩みを抱えている。とりわけ、今後の進路に関する悩みは深刻なものであった。その内容は、研究者としてのキャリアを開始する時期が、結婚や親なりといった個人のライフコース上でのライフイベント経験と共時することと関連している。研究者として生きることは、結婚し親になるという「あたりまえのこと」の経験を躊躇させる場合すらある。とりわけ女性には、その確率が高い。同時にそのことは、男性にとっても大きな負担を強いることはいうまでもない。本調査から、本学大学院生が家事や育児と研究との両立を支援する具体策を、男女とも強く大学にたいして求めていることが明らかとなった。

なお本調査では、調査回答者に対して具体的な支援策の進め方等についてのよりインテンシブな聴き取り調査への参加を募った。これまでに70名近い応募があり、2007年3月から聴き取り調査を開始した。その結果については、別途報告書としてとりまとめる予定である。

調査ワーキング・グループでは、2007年度前期には同様の全数調査を助手、教員に対して実施する予定である。とりわけ研究者としてのキャリア初期にあたる助手に対しては、今回の大学院生調査結果をふまえたうえで、より具体的な支援ニーズを把握するべく詳細な調査内容を予定している。これらの調査結果を基礎的データとし、本事業が早稲田大学の男女共同参画を推進し、優れた若手研究者とりわけ女性研究者の養成を促進する、真に有効なシステムを構築していくことを願っている。

なお、本調査は調査ワーキング・グループで実施したが、調査立案ならびに調査票作成・実施を荻野佳代子が、調査結果の分析ならびに報告書執筆を笹野悦子と小村由香が、全体のとりまとめを嶋崎尚子が担当した。

最後に、年末年始の多忙な時期にもかかわらず本調査へ回答いただいた大学院生の方々に心から感謝いたしますとともに、皆様の今後の研究生活がますます充実したものになるよう祈念いたします。

2007年3月14日

早稲田大学女性研究者支援総合研究所

調査ワーキング・グループ

嶋崎尚子（文学学院・教授）

荻野佳代子（本研究所・客員講師）

笹野悦子（文学学院・講師）

小村由香（文学研究科博士課程4年）

## 目次

「研究者養成のための男女平等プランに関する調査」結果の概要	1
1章 調査のねらいとデザイン	9
1. 調査のねらい	
2. 調査デザイン	
3. 回収状況	
4. 基本属性	
2章 進路	17
1. 修士課程への進学理由	
2. 修士課程終了後の進路希望	
3. 博士課程への進学理由	
4. 博士課程終了後の進路希望	
3章 満足と悩み：大学院生の実状	31
1. 研究生生活評価	
2. 大学院生活で困っていること	
3. 支援	
4章 男女共同参画	54
1. 女性教員比率に対する評価	
2. 女性研究者比率アップ支援	
3. 研究職への支援	
4. 男女共同参画にむけて	
まとめ	80
付録	
1. 調査票	82
2. 単純集計表	90
3. 早稲田大学学生、大学院生、教員数と女性の比率	100

## 凡 例

### 1. 自由回答

- 部分的な引用は「 」でくくり、文中に示した。また、全文を引用する場合は、イタリック体にして箇条書きで表示した。
- 属性は基本的には学年・性別を示したが、N が小さく個人が特定されるおそれのある場合は性のみ、または在籍課程のみを示した。
- 明らかに誤記と思われるものは訂正した。

### 2. 本書で用いている「文系」「理系」の区別は、自己申告に基づくもので必ずしも在籍研究科を反映しているとは限らない。

### 3. 表中の N は実数をあらわす。

## 「研究者養成のための男女平等プランに関する調査」結果の概要

本調査は、文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業にもとづき、若手研究者養成にむけての具体的支援を策定する際の基本情報として、本学大学院生の研究・学習生活、そのニーズなどを量的に把握することを目的としたものであり、下記の要領で実施した。

### 1章 調査概要

調査対象： 2006年12月1日現在、修士課程および博士課程在籍者のうち、専門職大学院を除く10研究科に所属する大学院生5,266名（修士課程3,781名・博士課程在籍者1,485名）

調査時期（画面開設期間）：2006年12月25日（月）～2007年1月14日（日）

調査方法：調査協力者が調査画面URLにアクセスし、調査票に回答するWeb調査

調査内容：大学院生活で困っていることに関する項目（大学院での生活と必要な支援、女性としての悩み・必要な支援） 進路意識に関する項目（大学院での生活と必要な支援、今後の進路） 必要な支援に関する項目（大学院での生活と必要な支援、女性としての悩み・必要な支援（女性のみ）、男女共同参画の現状と必要な支援） 基本的属性等

回収票数・回収率：772名から回答を得たが、欠票10票、有効回収数は762票、有効回収率は14.5%（修士課程11.9%・博士課程19.9%）

	在籍数	回収票数	回収率
修士・男性	2927	252	8.7%
修士・女性	854	199	23.3%
博士・男性	995	154	15.5%
博士・女性	490	141	28.8%

### 2章 進路

#### 1. 修士課程への進学理由

本調査では、修士課程への進学理由を、研究志向性、就職志向性、就職の先延ばし、性別への考慮の4側面からとらえ8項目を用意した。進学にあたってそれぞれの項目をどれほど考慮したかを、回想法によって5段階で評価してもらった。

修士課程への進学理由は性別・分野を問わずもっと研究がしたいという回答が全体の9割を超えて最も多かった。そしてこの研究志向がすなわち職業としての研究者を意味しているわけではなかった。

#### 2. 修士課程修了後の進路

現在考えている修士課程修了後の進路をたずねたところ、多い順に「公務員・企業を含む非研究職」（4割）「博士課程への進学」（3割）「公務員・企業を含む研究職」（2割）志望となっている。性別による顕著な差はあまりみられないが、専門別にみると、「非研究職」志望が理系では45%で文系とくらべて10ポイント以上高い。一方で、「博士課程への進学」では、文系が42%であるのに対し、理系では17%と文系の半分以下である。

博士課程に進学する理由を、研究上の理由（研究の継続・専門性の向上・大学院生活が向

いている)、職業上の理由(大学教員希望・研究職希望・修士卒では希望する職業に就けない)、性別に関係ない能力発揮の3側面から問うた。

博士課程への進学理由についてみると、ほぼ全員が専門性の向上、研究の継続に強い意思を持っていることがわかる。職業との関連でいえば女性よりも男性のほうが職業を意識しており、大学教員を目指すものは全体の約8割、研究職を目指すものは6割にのぼった。また、理系の約半数で希望する職業に就くために博士課程進学が必要だと感じられていた。

同様に研究上の理由、進路上の理由に分類できるが、加えて、経済的理由、そしてジェンダー上の理由をあげることができる。博士課程に進学しない理由について、全体としては進路上の理由、とりわけ職の保障がないことの回答率が8割近くにのぼった。そして全体の6割は「他に魅力的な就職先」を見出している。

### 3. 博士課程への進学理由

博士課程に在学者に問うた博士課程への進学理由を検討する。博士課程への進学理由として次の4側面、6項目の質問を用意した。「研究志向」「就職志向」「先延ばし志向」

性別に関係のない能力発揮の4つである。進学にあたってそれぞれの項目をどれほど考慮したかを、回想法によって5段階で評価してもらった。博士課程への進学理由の大半は「研究者志向」という回答が得られた。学年別に見ると学年が上がるほど志向性が高くなり、専門別では理系よりも文系のほうが高い志向性がみられた。

### 4. 博士課程修了後の進路

博士課程修了後に希望している進路は、「大学教員」が最も多く全体の3分の2、次いで「(大学以外の公務員・企業等での)研究職」が全体の4分の1を占め、「非研究職」は少数であった。博士課程進学後の進路変更は「なし」が文系・理系ともに9割以上で、希望進路は進学当初から変更がなかったことがうかがわれる。

「大学教員」「大学以外の研究職」いずれでも「研究環境」が最も重視されており、大学教員では半数弱が強い理由としてあげていた。それとならんで「研究テーマ選択の自由度」「後進の育成」の3つの研究関連の項目が大学教員希望のとても強い理由となっていた。研究職としての大学教員職の魅力は、地位や自由な時間よりも研究に関連するものであることがうかがえる。一方、大学以外の研究職でも研究関連の項目が志望理由として重視されてはいるが、「大学教員」のほうがより重要視されていることがわかる。

進路的側面から大学教員を希望しない理由は圧倒的に「ポストの少なさ」があがった。

## 3章 満足と悩み：大学院生の実状

### 1. 研究生活評価

大学院生が現在の研究生活をどのように認識しているのかについて「研究意欲」「将来の明確な目的」「研究・指導体制」「研究での能力発揮」「研究生活全般」の5項目について5段階で評価してもらった。全体で見ると研究に意欲的であることの評価が非常に高い一方で、それ以外の満足度がそれほど高くないという結果になった。各項目相互の相関関係を見てみると、研究生活全般の満足度は、他の4項目と強い正の相関関係をしめしている。また、意欲とは独立して「研究・指導体制に満足」「研究で能力発揮」が研究生活全般と正

の関連を示すことがわかる。

## 2. 大学院生活で困っていること

研究生における悩みを、研究、進路、経済、健康、人間関係、ジェンダー環境の6側面からとらえ、11項目を用いて5段階で評価してもらった。また、女子大学院生に対しては、女性であることに起因する固有の悩みについて7項目でたずねている。全体を概観すると、研究生の悩みで「とても悩んでいる」の割合が高く深刻なものは、高い順に「希望進路(就職先)」(35%)、「研究と結婚・育児を含めた将来のライフプラン」(30%)、「研究(論文)の進め方」(28%)、「経済的なこと」(25%)、「希望進路が明確にならないこと」(21%)となっている。これらは「やや悩んでいる」をあわせると悩んでいるものの割合が半数を超え、多くの大学院生にとって大きな課題になっている。

大学院生活の悩みと研究生の満足度の相関関係をみると、研究関連の諸々の悩みと個々の研究生の評価は負の相関関係があり、研究生全般にも関連がある。逆に進路の悩みは個々の生活評価とはそれほど関連をもたず、生活全般の満足に弱い負の相関関係がある。経済的な悩みは大学院生活においては大きな悩みであったが、これと研究生それ自体の評価、生活全般の満足度とは独立したものであることがうかがわれる。

ジェンダー環境に関する悩みについては、3割弱が指導教員の意識や態度が学生の性別によって異なると感じたことがあり、14%が大学院生活のなかで性別によって異なる扱いや不利益をうけたことがあると回答した。自由回答を整理すると、a)男性には厳しく、女性には優しい(甘い)ため、女性は本気で指導されていないと感じる、b)異性の師弟や同級生との関係の難しさを意識して円滑なコミュニケーションができない、という2点が挙げられる。女子大学院生に固有な悩みについては、悩んでいる割合はどの項目も半数以下であったが、なかでは「就職」(「とても悩んでいる」と「やや悩んでいる」をあわせて4割)と「体力」(半数弱)が高い割合を示した。

## 3. 相談する相手

「研究生で困ったり悩んだりしたときに頼りにする」は、最も頼りにするのが「研究室の仲間・先輩」であった。

## 4. 支援

学内相談室を利用した経験の有無を項目ごとに尋ねた。悩みの5分類(研究、進路、経済、健康、人間関係)に対応させて相談室利用経験を全体で見ると、どの項目でも利用率はきわめて低かった。

相談室があれば利用する希望の有無を項目ごとに尋ねた。全体で見ると「人間関係」以外の項目では半数以上が「利用したい」と回答し、最も多い「進路」に関する相談室利用の希望は7割を超えた。

「相談室を利用しない理由」の自由回答を整理すると以下の5項目にまとめられる。

研究生生活で発生してくるいろいろな問題は、相談室で相談することによって解決できる問題ではないと考える。

研究や就職の問題に特化すべき。

相談室の体制を知らないので、どのようなサポートがえられるのかわからない。  
プライバシーに関することの相談はしにくく、個人情報の流出も不安だから。

現在の相談室の対象が学部生に限定されていると感じるため。

大学による支援の有効性について同じく項目ごとに質問した。群を抜いて支援が望まれているのは「経済面（奨学金の充実等）の支援」で「とても有効」「やや有効」をあわせて94%にのぼった。「健康面（健康診断・相談窓口等）の支援」・「進路・就職相談窓口」がそれぞれ8割前後、「研究支援のためのスキルアップ講座（英語・パソコン等）」が75%でそれにと続いた。「進学・就職支援のための講座（諸分野で活躍するOB/OGの体験談等）」・「先輩から研究についての具体的な助言をもらえる相談制度」も7割、最も少ない「将来への不安等悩みに関するカウンセリング窓口」も6割は「有効」と回答し、大学による支援への期待の大きさをうかがわせた。

「その他に必要な支援」について自由回答を整理すると以下の5点になるだろう。

研究環境の整備（院生用の研究室・院生用のスペースの充実・図書館の活用・パソコン等の設備の充実）

研究者養成（指導体制・研究費獲得・若手研究者の研究機会の提供・教育者としてのティーチングスキル養成）

博士課程の就職問題・院生の専門性を生かしたアルバイトの紹介、斡旋

出産・育児と研究の両立支援

他研究科、他分野の研究者との交流、情報交換

## 4章 男女共同参画

### 1. 女性教員の比率への評価

現在、早稲田大学の女性教員（専任教員・助手）の比率は13.8%であり、理工系においては7.8%という割合となっている。こうした現状を提示したうえで、どのように評価するかをたずねたところ、「かなり問題だ」が18%、「やや問題だ」をあわせると44%、「どちらでもない」が30%、「全く問題ではない」は9%、「それほど問題ではない」をあわせると26%であった。

性別でみると、男性よりも女性が問題視する傾向が強い。女性では学年が高いほど「かなり問題」「やや問題」のポイントが高くなっているのに対し、男性では学年が低いほどポイントが低く、学年ごとの男女差をみると修士で28ポイント、博士1-3年で31ポイント、博士4-6年では46ポイントと大きな差異がみられた。

#### (1) 「かなり問題だ」「やや問題だ」と回答した理由（N=268）

**ジェンダー的な観点から問題：**女性が少なすぎるのは、性別を理由に何らかの差別構造や女性研究者になる障害があるという点で問題だとした回答が最も多く、122件あった。

**教育上の観点から問題：**「院生（学生）数と比して女性教員数が少なすぎる」、「女子学生特有の悩みやニーズに対応できない」、「後進の女性研究者に対するロールモデルの不在」といったような学生への教育、研究者養成という観点から問題だとする意見が73件あった。

**組織上の観点から問題：**「男性教員に偏ることで組織や制度にも偏りが生じる」、「女性が研究しやすい環境づくりには女性教員も必要である」、また「機会の平等、公正な雇用への疑問を感じる」という理由が48件であった。

**社会における大学の位置・役割という観点から問題**：大学は社会的にも男女共同参画を推進し、女性活用のロールモデルを示すべき存在である点で問題が 25 件あった。

### (2)「どちらともいえない」と回答した理由 (N=198)

「判断基準が不明確で、提示された数字や情報からは判断できない」が最も多く 84 件、「女性を増やせばよいという数の問題ではなく、質や能力重視であるべき」が 45、「学生数や研究者志望者数からみると妥当」が 43 件、「教員の採用に限らず、社会全体の問題だから」が 12 件、「性別によるライフスタイルの違いがある」が 11 件であった。

### (3)「それほど問題ではない」「まったく問題ではない」と回答した理由 (N=180)

「性別ではなく能力や質が重要」84 件、「女子学生や女性研究者を志望する人が少ない」34%、「問題だとは感じない、学生である自分からは教師の性別は関係ない」、最近では女性が評価され、女性研究者も増えているから、「性別による志向や役割の違いがある」、「与えられた情報からは判断できない」という理由も散見された。

このように現状については、女性研究者の不足により価値観の多様性や女子学生の悩みやニーズに対応できない、大学内の組織や研究環境に問題が生じることから問題視する立場と、女子学生や研究者を志望する女性が少ない、研究には性別よりも能力を重視すべきだとの立場から問題ではないとする立場に分かれた。しかしながら提供した数値や情報からは判断できない、性差別と研究との関係が明確ではないことからわからないとの回答も多かった。さらに問題視する・しない理由と重なりあう回答理由も目立った。学生に対し、現状を判断できる十分な情報、ジェンダーに関する知識を提供することが肝要であろう。

## 2. 女性研究者比率アップ支援への是非

次に、大学院の在籍者数をもとに算出した本事業の目標値(全体で 25%、理工系で 15%)を提示して<sup>1</sup>、それにむけての支援実施の賛否をたずねたところ、「賛成」44.4%、「反対」20%、「わからない」36%という結果であった。次に学年・性別ごとの特徴をみると表 4-2 で示すとおり、学年では修士と博士 4-6 年が博士 1-3 年よりもやや高い数値を示す傾向があった。また性別でみると、男性よりも女性が「賛成」だとする傾向が強く、修士女と博士 4-6 年女では 6 割を超え「反対」を大きく上回り、修士で 27 ポイント、博士 1-3 年で 39 ポイント、博士 4-6 年で 32 ポイントの大きな差がみられた。他方、「反対」の回答では、全ての学年で男性は 3 割近くにのぼっているのに対し、女性は修士博士 1-3 年で 1 割強、博士 4-6 年ではわずか 2%のみとなっている。

### (1)「賛成」の回答理由

「女性研究者の支援に役立つから」が 146 件と最も多く、「目標値を掲げたことで改革が進む」が 62 件、「大学の活性化、学内の環境整備が進む」いった理由が 56 件みられた。

<sup>1</sup> 調査票には数値目標の算出根拠を提示しなかった。

## (2)「わからない」の回答理由 (N=251)

「目標値の意義・根拠・妥当性がわからないから」、「数ではなく能力を重視すべき」、「女性重視の採用・女性研究者比率を上げる理由がわからない」といった理由が多く、さらに「具体的な支援内容がわからない」、「現状に問題はないのではないか」がつづき、「他に着手すべき問題がある」、「逆差別になるのではないか」といった理由もみられた。

## (3)「反対」の回答理由 (N=117)

「数値目標にこだわることで質が低下する。性別ではなく、質や能力重視すべき」が46件、「数値目標の設定自体に問題がある」が25件、研究環境の整備等、他に対処すべき問題があるが21件、逆差別になるからが20件で、「関心がない・問題はない」という理由も散見された。

注目すべきは、女性の研究者比率を上げることにに関して賛成していない者であっても、回答理由をみると積極的に反対しているとは言い切れないことである。重要なことは、目標値の意義や根拠、具体的な支援内容を明示することだろう。また女性の側からも、性別よりも能力や業績を重視すべきとの意見が多くみられ、性別を理由に採用されることよりも、研究の成果を正当に評価される仕組みも望まれているのだろう。

## 3. 研究職への支援の有効性と利用希望

本事業では、大学での研究継続や研究職をより魅力的なものにするための支援策として、具体的に「育児介護と両立のための相談窓口」、「学内保育所」、「病時病後保育」、「育児介護費用の補助」、「育児介護休暇」、「育児介護休暇後の復帰支援」、「セクシュアル・ハラスメントのない環境づくり」、「女性教員の積極的採用制度」の8つの支援策を検討している。項目ごとにその有効性ならびに将来を含め利用する希望があるかをたずねた。

「女性教員の積極的支援」を除くすべての支援項目に関しては全体的に過半数が「とても有効」と回答し、男女共に各支援への期待が大きいことがわかった。各支援項目に対する必要性についても、学年が高いほど利用希望が高くなり、性別では女性が男性よりも現在および今後必要が生じた際の利用を強く希望していた。しかしながら男性の利用意欲も決して低くはないことに大いに注目すべきであろう。

こうした回答傾向の要因のひとつ、ジェンダー規範に対する意識の違いがあげられる。男女とも、ジェンダー規範（性別役割分業）意識について肯定的な者の方が、否定的な者よりも利用意欲が低い傾向にあった。ただし、「今後利用したい」については、ジェンダー規範に肯定的な女性よりも、むしろ否定的な男性のほうが高い利用希望がみられ、ジェンダー規範に否定意的な意見を持つ場合、男女とも8割前後の利用希望があり、ジェンダー規範に肯定的な場合であっても女性で7割、男性も6割から7割強であり、男女共に利用希望が同様に高い点にも注目しておきたい。

つまり育児介護については、現状は女性が負担している傾向があるが、決して女性に限定されるべき問題ではなく、男性にとっても重要な問題になっていることが有効性や必要意欲の高さにあらわれているといえるだろう。

#### 4. 男女共同参画推進にむけて

##### (1) 男女共同参画推進室の設置

現在、北海道大学、名古屋大学等、全国の大学及び民間研究機関で「男女共同参画室」が設置され、女性研究者を支援する活動が行われているが、早稲田大学でもそのような組織や活動の必要性とその回答理由をたずねた。

全体では6割弱が「必要」と答え、3割が「わからない」と回答し、「必要ではない」は1割であった。学年が高いほど「必要」の回答が多く、性別では女性のほうが「必要」と回答した割合が大きく、学年ごとに男女差をみると、修士で19ポイント、博士1-3年で26ポイント、博士4-6年で21ポイントのものであった。他方、「必要ない」では男性の回答が目立ち、修士で11ポイント、博士1-3年で12ポイント、博士4-6年で17ポイントの男女差がみられた。

##### (1) 「必要」の回答理由 (N=319)

a) 「女性の負担が大きく不利な状況にあるから」が162件で過半数を占め、b) 「現状を打破するため改革を推進する必要があるから」が70件、c) 「性別によらない研究者支援の必要があるから」が49件、d) 「社会的に大学に要請されている」が38件であった。

##### (2) 「わからない」の回答理由 (N=150)

a) 「内容や効果がわからないため判断が付かない」が66件で最も多く、b) 「女性に限定する理由がわからない」が30件、c) 「女性が不利な状況にあるとは思えない」、d) 「女性に限定する理由がわからない」がともに26件で、その他に「もっと他に着手すべき問題があるのではないか」という意見もみられた。

##### (3) 「必要ではない」の回答理由 (N=45)

a) 「ニーズやメリットがあるのかわからない」が17件で最も多く、b) 「逆差別になる・男女両方への支援が必要だから」、c) 「性別よりも能力や業績を重視すればよい」がともに11件、d) 「現状に問題がない・関心がない」が6件であった。

ジェンダー規範(性別役割分業・3歳児神話・男性の稼得責任)意識との関連をみたところ、ジェンダー規範に肯定的な方がやや「必要ではない」と回答する傾向がみられた。

##### (2) 女性向け支援相談窓口の設置の必要性

最後に、男女共同参画推進および育児・介護支援のために女子学生・女性研究者を中心とした支援相談窓口を大学内に設置することについてたずねたところ、全体では約6割が「賛成」と回答した。男女別に見ると男性よりも女性のほうが「賛成」と回答する割合が大きく、修士では16ポイント、博士1-3年で12ポイントであったが、博士4-6年では逆に男性のほうが5ポイント高かった。

##### (1) 「賛成」とした回答理由 (N=286)

「女性の特有の悩みやニーズがある」が141件で最も多く、b) 「ニーズがあり、それによって救われる人がいる」が110件、c) 「大学の発展やよりよい制度づくりのためになる」が26件であった。その他、女性に限定しないことを条件として賛成とする者もいた。

**(2)「わからない」の回答理由 (N=124)**

a)「女性だけではなく男性にもニーズがある」が45件で最も多く、b)「ニーズや効果がよく分からないから判断しかねる」が34件、c)「具体的なことがよく分からないから判断しかねる」が33件、d)「現状に問題がない・関心がない」が12件であった。

**(3)「反対」の回答理由 (N=84)**

a)「女性だけではなく男女を対象に支援すべき」が54件で最も多く、b)「逆差別になる」が14件、c)「他にもやるべきことがある」が11件、d)「現状に問題はない・関心がない」という記述もあった。

以上の結果から、男女共同参画の推進や育児・介護支援については男女双方にとって重要な問題であるとの認識を持つ院生が非常に多いことがわかった。また現状をふくめ女性の研究者支援のニーズや具体的な施策に関する知識が全体的に不足しており、適切な判断材料の提供次第で大学院生の支持を得られるだろう。

## 1 章 調査概要と基本属性

### 1. 調査のねらい

本調査は、文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業にもとづき、若手研究者養成にむけての具体的支援を策定する際の基本情報として、本学大学院生の研究・学習生活、そのニーズなどを量的に把握することを目的としたものである。調査実施にあたっては、大学院生の研究生生活が、進路の悩み、さらに研究と結婚・出産・育児等のライフイベントとの両立の悩みなど、男女を問わず今後の人生設計をふくめて多くの悩みを抱えていると考え、その実態とニーズを明らかにする項目を用いた。

### 2. 調査デザイン

#### (1) 対象

2006年12月1日現在、修士課程および博士課程在籍者のうち、専門職大学院を除く10研究科に所属する大学院生5,266名（修士課程3,781名・博士課程在籍者1,485名）

#### (2) 調査手順・実施時期

- ・学生課、各研究科へ個人情報（メールアドレス）の目的外利用承諾伺い（2006年11月）
- ・調査票作成（2006年12月）
- ・調査依頼の配信（2006年12月25日）
- ・調査期間（画面開設期間） 2006年12月25日（月）～2007年1月14日（日）
- ・調査回答礼状・督促状の配信（2007年1月11日）
- ・調査回収締め切り（2007年1月14日）

#### (3) 調査方法

調査協力者が調査画面 URL にアクセスし、調査票に回答する Web 調査

#### (4) 調査実施

調査画面の作成、配信から回収・データ作成までの工程は中央調査社に委託して行った。委託にあたっては、「個人情報保護に関する覚書」を当研究所と中央調査社で交わし、個人情報の秘密保持を確認した。なお回収した調査票データは女性研究者支援総合研究所が厳重に管理しており、本報告書の検討を終えた段階で、速やかに廃棄する。

#### (5) 調査デザイン

図 1-1 のとおり、A：大学院生活で困っていることに関する項目、B：進路意識に関する項目、C：必要な支援に関する項目、そして基本属性に関する項目からなっている。さらに、大学院生活で困っていることに関する項目（A）では、大学院での生活と必要な支援、女性としての悩み・必要な支援（女性のみ）、進路意識に関する項目（B）では、大学院での生活と必要な支援、今後の進路、必要な支援に関する項目（C）では、大学院での生活と必要な支援、女性としての悩み・必要な支援（女性のみ）男女共同参画の現状と必要な支援からなっている。

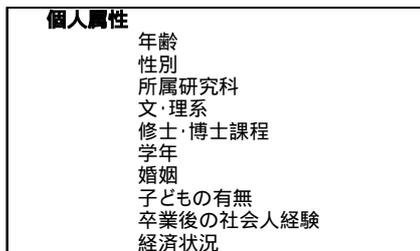
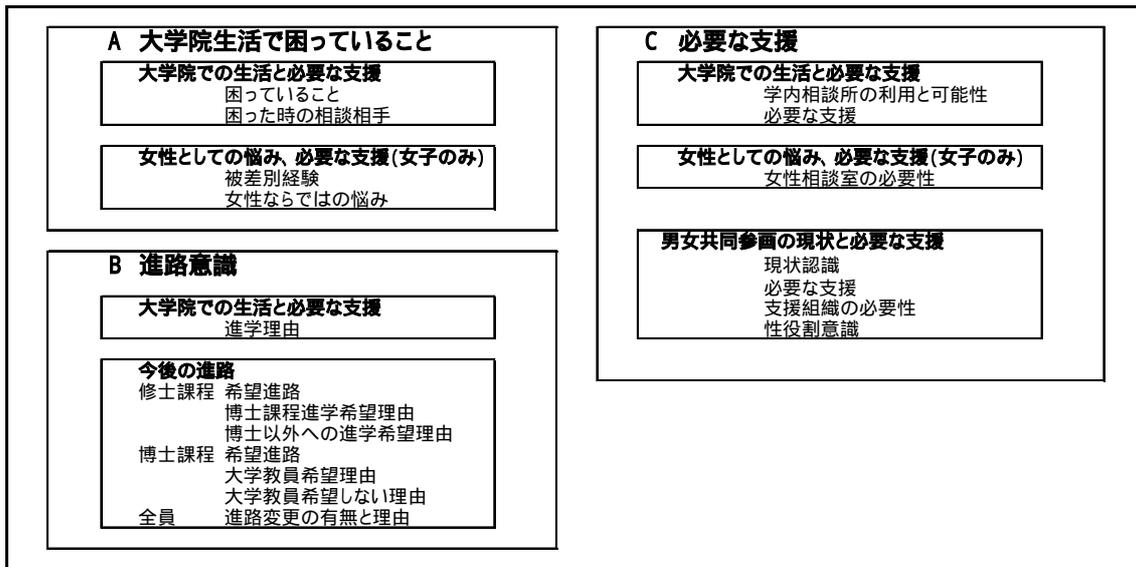


図 1-1 「研究者養成のための男女平等プランに関する調査」デザイン

### 3. 回収状況

772 名から回答を得たが、欠票 10 票、有効回収数は 762 票、有効回収率は 14.5% (修士課程 11.9%・博士課程 19.9%) であった。各研究科の回収率は、政治学・博士、法学・修士、博士、文学・修士、博士、教育学・博士、人間科学・博士、スポーツ科学・博士では回収率が 20% を超えている (表 1-1)。また表 1-2 に課程と性別による回収率を示した。

表 1-1 回収状況

研究科	修士課程	回収票数	回収率	博士課程	回収票数	回収率	全体	回収票数	回収率
政治学研究科	98	14	14.3%	81	18	22.2%	179	32	17.9%
経済学研究科	71	6	8.5%	56	11	19.6%	127	17	13.4%
法学研究科	129	33	25.6%	135	27	20.0%	264	60	22.7%
文学研究科	406	90	22.2%	412	92	22.3%	818	182	22.2%
商学研究科	207	38	18.4%	53	8	15.1%	260	46	17.7%
理工学研究科	2232	166	7.4%	382	62	16.2%	2614	228	8.7%
教育学研究科	201	31	15.4%	142	30	21.1%	343	61	17.8%
社会科学研究科	96	14	14.6%	90	17	18.9%	186	31	16.7%
人間科学研究科	218	43	19.7%	112	25	22.3%	330	68	20.6%
スポーツ科学研究科	123	16	13.0%	22	5	22.7%	145	21	14.5%
無回答								16	
合計	3781	451	11.9%	1485	295	19.9%	5266	762	14.5%

表 1-2

	在籍数	回収票数	回収率
修士・男性	2927	252	8.7%
修士・女性	854	199	23.3%
博士・男性	995	154	15.5%
博士・女性	490	141	28.8%

#### 4. 基本属性

本報告書では、大学院生の研究生生活ならびに研究環境が修士課程と博士課程とでは大きく異なること、専攻領域や性別によっても異なることを想定し、2種の下位グループ別に集計ならびに記述していく。2種グループとは、すなわち、学年（修士/博士 1-3年/博士 4-6年）と、専門（文系/理系）、性別（男/女）の組み合わせからなっている。なお専門は回答者自身の自己申告によるものであり、所属研究科ごとに区分しているわけではない。

調査結果の記述にはいる前に、回答大学院生の基本属性をみてみよう。本調査では基本属性として、性別、所属課程と学年、年齢、所属研究科、専門、資格・身分、婚姻関係、子どもの有無、子どもの人数と年齢、社会人経験、現在の経済状態の計 11 項目をたずねている。資格・身分については、「助手」「学術振興会特別研究員」「非常勤講師」「COE プログラム研究員」をあわせて 15%、「留学生」5%と 2 割ほどが何らかの身分・資格を有しているが、回答者の 8 割は「いずれにも該当しない」であった。

表 1-2 年齢

年齢	(%)				
	N	25歳未満	25～29歳	30～34歳	35歳以上
全体	753	34.1	38.4	13.9	13.5
修士男	252	58.7	29.4	4.8	7.1
修士女	199	50.8	29.6	6.0	13.6
博士 1-3 年男	112	2.7	77.7	11.6	8.0
博士 1-3 年女	100	5.0	43.0	30.0	22.0
博士 4-6 年男	42	0.0	28.6	42.9	28.6
博士 4-6 年女	48	0.0	29.2	41.7	29.2
修士文系	257	39.3	37.0	8.6	15.2
修士理系	194	76.3	19.6	1.0	3.1
博士 1-3 年文系	148	3.4	55.4	24.3	16.9
博士 1-3 年理系	62	4.8	74.2	11.3	9.7
博士 4-6 年文系	83	0.0	30.1	42.2	27.7
博士 4-6 年理系	7	0.0	14.3	42.9	42.9

年齢については、20代が全体の約 7 割を占め、残りの約 3 割が 30 代である（表 1-3）。既婚者の割合は 16.4%であり、学年が高いほど既婚率が高く、性別では女性がやや結婚が早いことがうかがえる（表 1-4）。そのうち子どもがいる人は約 1 割であった（表 1-5）。子どもがいると回答した人の 7 割はこどもの数が 1 人であり、2 割強が 2 人であったが、なかには 3 人以上の子どもをもつ人もいた。また子どもの年齢は 6 歳未満（就学前）が 4 割、6 割が小学生、中学生であった。

表 1-4 婚姻 ( % )

	N	未婚	有配偶	離死別
全体	756	82.3	16.5	1.2
修士男	254	91.3	8.3	0.4
修士女	200	85.0	14.5	0.5
博士 1-3 年男	112	84.8	14.3	0.9
博士 1-3 年女	100	66.0	30.0	4.0
博士 4-6 年男	42	73.8	23.8	2.4
博士 4-6 年女	48	58.3	39.6	2.1
修士文系	259	82.6	16.6	0.8
修士理系	194	96.4	3.6	0.0
博士 1-3 年文系	148	71.6	25.7	2.7
博士 1-3 年理系	62	85.5	12.9	1.6
博士 4-6 年文系	83	66.3	31.3	2.4
博士 4-6 年理系	7	57.1	42.9	0.0

表 1-5 子どもの有無 ( % )

	N	いない	いる
全体	754	89.9	10.1
修士男	254	90.9	9.1
修士女	199	89.4	10.6
博士 1-3 年男	112	92.0	8.0
博士 1-3 年女	99	88.9	11.1
博士 4-6 年男	42	90.5	9.5
博士 4-6 年女	48	83.3	16.7
修士文系	258	87.6	12.4
修士理系	194	93.8	6.2
博士 1-3 年文系	147	89.8	10.2
博士 1-3 年理系	62	91.9	8.1
博士 4-6 年文系	83	88.0	12.0
博士 4-6 年理系	7	71.4	28.6

学部卒業後あるいは修士課程修了後に勤務経験のある人は 3 割であった (表 1-6)。性別ではどの学年でも女性が多く、専門では文系が全体として多かった。回答数が少ないため参考程度ではあるが、理系 4-6 年では 86%が社会人の経験があった。

表 1-6 社会人経験 ( % )

	N	ない	ある
全体	750	70.0	30.0
修士男	251	81.7	18.3
修士女	200	70.5	29.5
博士 1-3 年男	112	74.1	25.9
博士 1-3 年女	98	51.0	49.0
博士 4-6 年男	42	54.8	45.2
博士 4-6 年女	47	48.9	51.1
修士文系	257	65.4	34.6
修士理系	193	91.7	8.3
博士 1-3 年文系	147	58.5	41.5
博士 1-3 年理系	61	73.8	26.2
博士 4-6 年文系	82	54.9	45.1
博士 4-6 年理系	7	14.3	85.7

現在の経済状態については（表 1-7）6 割が「学費・生活費の大半は家族の支援を受けている」と回答し、「生活費はほぼ家族、学費はほぼ自分（奨学金含）でまかなっている」が 28%となっており、「学費・生活費の大半を自分（奨学金含）でまかなっている」は 11.9%のみであった。学年が高いほど自分で負担しており、博士課程では半数以上が学費と生活費の大半を自分でまかなっている。

表 1-7 現在の経済状態 ( % )

	N	大半は 家族の支援	生活費は家族・ 学費は自分	大半を自分
全体	748	38.8	27.5	33.7
修士男	251	53.8	24.3	21.9
修士女	196	50.5	28.1	21.4
博士 1-3 年男	113	19.5	27.4	53.1
博士 1-3 年女	99	18.2	38.4	43.4
博士 4-6 年男	42	16.7	21.4	61.9
博士 4-6 年女	47	19.1	25.5	55.3
修士文系	254	44.1	24.4	31.5
修士理系	192	63.5	27.6	8.9
博士 1-3 年文系	148	18.9	33.8	47.3
博士 1-3 年理系	61	19.7	31.1	49.2
博士 4-6 年文系	82	18.3	25.6	56.1
博士 4-6 年理系	7	14.3	0.0	85.7

さらにジェンダー観をみるため、下記の 3 項目についての意見をたずねた。まず「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識については、女性がやや多いものの、全体的に「そう思わない」という回答傾向がみられた（図 1-2）。次に「子どもが 3 歳くらいまでは、母親は仕事をもたず育児に専念すべきだ」という 3 歳児神話については、男女差はあまりみられず、個人差によるところが大きいと思われる（図 1-3）。「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」という男性の稼得責任については、男性のほうが「そう思う」する傾向が強かった（図 1-4）。

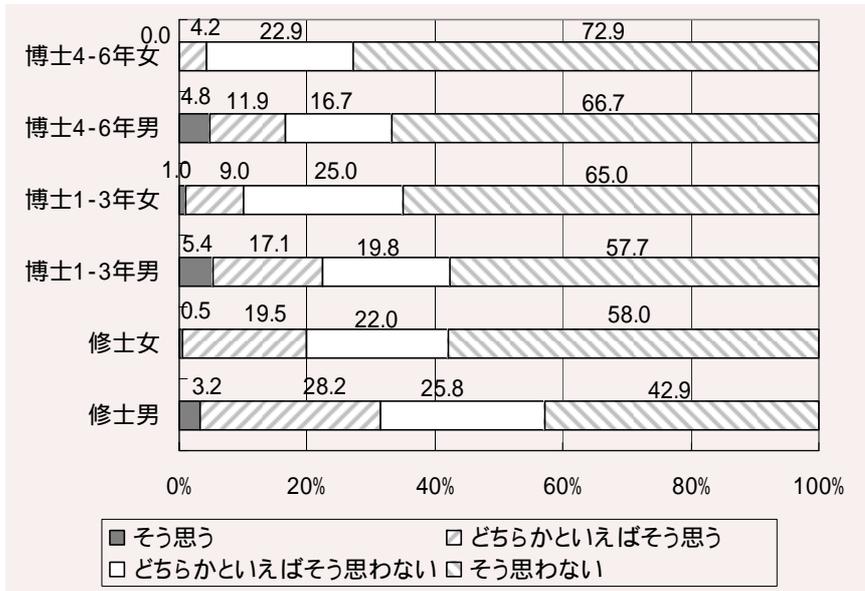


図 1-2 学年×性別 と性別役割分業意識

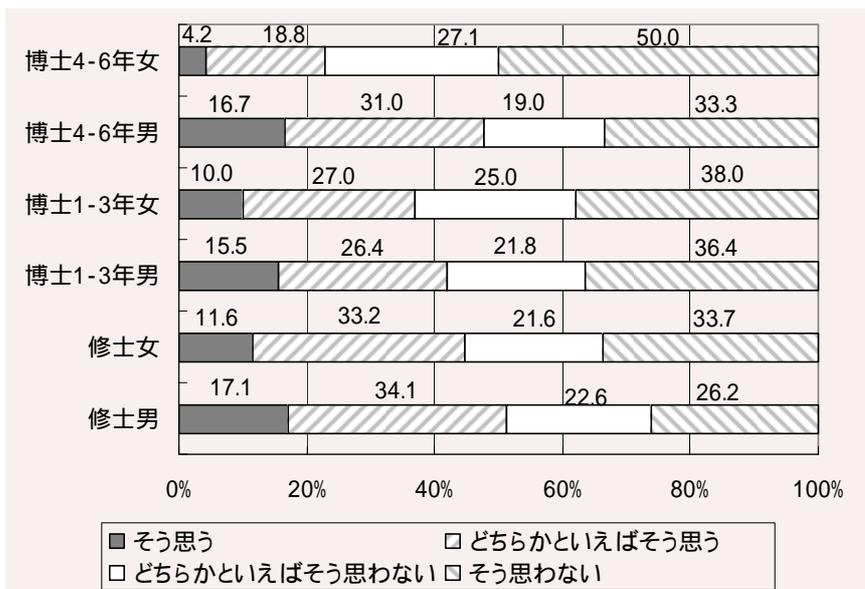


図 1-3 学年×性別 と 3 歳児神話意識

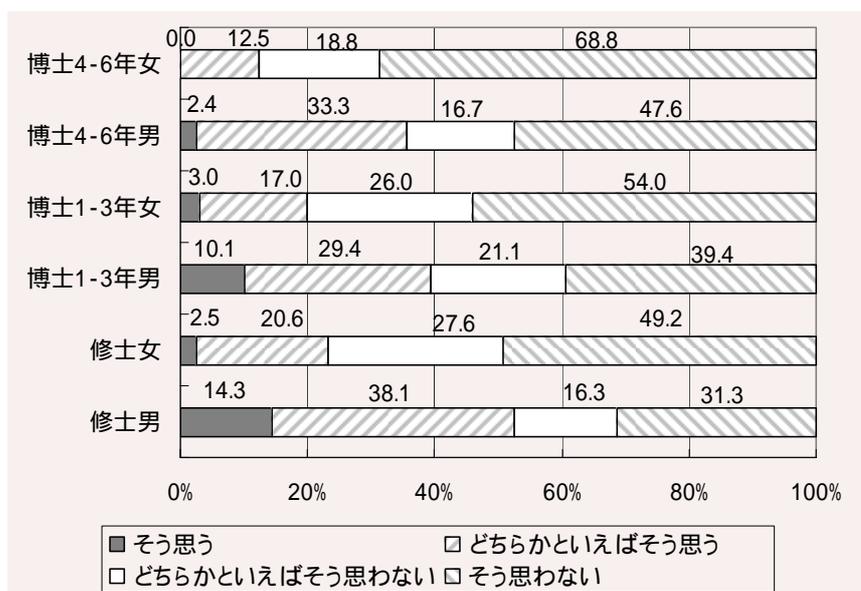


図 1-4 学年×性別 と男性稼得役割意識

最後に、ここ 1 ヶ月間の心身の状態 項目からなる尺度を用いてたずねた。これを「活気あり」「いらいら」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」の次元で得点化したところ、表 1-7 のような結果となった。得点が高いほど（「活気あり」「いらいら」「疲労感」「不安感」については最高 12 点、「抑うつ感」は最高 24 点）その特徴が顕著であることを示す。「いらいら」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」は、全体傾向としては、学年が高いほど平均得点が高い。さらに、旧労働省データでの結果と比較すると、大学院生グループでは、とりわけ「抑うつ感」の得点が高いことが注目される。

表 1-7 ストレス得点の平均点

学年 3 階級	活気あり	いらいら	疲労感	不安感	抑うつ感
合計	7.29	8.58	7.94	7.70	17.82
修士	7.31	8.44	7.71	7.46	17.45
博士 1 - 3 年	7.15	8.82	8.18	8.10	18.48
博士 4 - 6 年	7.51	8.76	8.53	8.03	18.18
修士男	7.24	8.45	7.88	7.69	17.54
修士女	7.40	8.42	7.49	7.16	17.34
博士 1-3 年男	7.08	8.48	8.12	7.70	18.62
博士 1-3 年女	7.23	9.18	8.25	8.54	18.32
博士 4-6 年男	7.79	8.78	8.60	7.59	17.86
博士 4-6 年女	7.26	8.74	8.47	8.43	18.47
修士文系	7.50	8.30	7.60	7.27	17.41
修士理系	7.06	8.63	7.86	7.69	17.51
博士 1-3 年文系	7.30	8.93	8.21	8.27	18.40
博士 1-3 年理系	6.82	8.53	8.12	7.65	18.64
博士 4-6 年文系	7.51	8.72	8.54	8.04	18.26
博士 4-6 年理系	7.43	9.29	8.43	8.00	17.29
労働省調査データ(男性)	6.70	6.30	6.30	6.00	10.00
労働省調査データ(女性)	6.60	6.50	6.40	5.50	10.10

注：労働省データのサンプルは、科学，工業，電気，製鉄，電力，精糖，生命保険等の企業および小規模事業場に勤務する労働者，男性 10089 名（平均年齢 38.4 ± 10.1 歳），女性 2185 名（同 35.3 ± 10.2 歳）

## 2章 進路

本章ではまず大学院生がどのような理由で入学し、自分の進路をどのようにとらえていくかを修士課程・博士課程の課程ごとに検討する。

### 1. 修士課程への進学理由

本調査では、修士課程への進学理由を、研究志向性、就職志向性、就職の先延ばし、性別への考慮の4側面からとらえ8項目を用意した。進学にあたってそれぞれの項目をどれほど考慮したかを、回想法によって5段階で評価してもらった。

表 2-1 修士課程進学理由 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
研究志向	専門領域をより深めたい	455	60	32.7	4	2.6	0.7
	もっと勉強したかった	454	34.8	40.5	9.7	8.6	6.4
	研究者になりたい	455	27.3	28.8	14.9	16.7	12.3
就職志向	就職に有利	451	12.4	24.2	15.5	17.3	30.6
	資格試験	451	3.1	6.9	7.8	19.1	63.2
先延ばし	まだ働きたくなかった	448	8.9	23	9.4	16.1	42.6
	希望する就職先がなかった	449	2.7	8.2	7.1	11.4	70.6
性別考慮	性別に関係なく能力発揮	449	3.1	10.9	23.4	20.3	42.3

#### (1) 研究志向

表 2-1 のように、進学理由として研究志向を回答した割合はたいへん高い。「専門領域をより深めたい」で「とてもあてはまる」は全体で6割、「ややあてはまる」をあわせると9割強に上る。これはどの分野、性別でも同じ傾向が見られた(表 2-2)。「専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから」は全体では「とてもあてはまる」が35%、「ややあてはまる」をあわせると75%があてはまると回答した。一方、「研究者になりたい」は「あてはまる」を選択した率が比較的低く、全体では「とてもあてはまる」が3割弱、「ややあてはまる」をあわせても57%であった。「とてもあてはまる」は男子が3割強に対して女子が2割強とやや少なかった。

修士課程進学理由を研究という観点から見ると、専門領域をもっと研究したいという理由はきわめて強いことが明らかになった。だが一方ではそれがすなわち研究者志向を意味しているわけではないことがわかる。

表 2-2 専門領域をより深めたい ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
全体	455	60.0	32.7	4.0	2.6	0.7
修士男	256	57.8	34.0	4.3	3.1	0.8
修士女	199	62.8	31.2	3.5	2.0	0.5
修士文系	257	68.1	27.6	3.1	1.2	0.0
修士理系	193	50.3	39.9	4.7	3.6	1.6

#### (2) 就職志向

進学理由として就職をあげた者は少数であった。「就職に有利」「資格試験」のいずれも、

全体では「全くあてはまらない」と回答したものが最も多かった。前者は全体の 3 割、が「全くあてはまらない」と回答し、男女差はなかった。分野別に見ると理系で「とてもあてはまる」という回答が 25%、「ややあてはまる」とあわせると 6 割強にのぼり、文系（2 割弱）と比較すると理系のほうできわめて就職志向が強かった（表 2-3）。「資格試験」についてはどのグループでも「全くあてはまらない」が 6 割前後で「あまりあてはまらない」をあわせると 8 割前後があてはまらないと回答した。

修士課程進学を就職との関連でみると、理系では就職に有利であるという理由で進学する割合が高いが、それ以外では就職の有利さとの関連はあまりみられなかった。

表 2-3 就職に有利 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
全体	451	12.4	24.2	15.5	17.3	30.6
修士男	251	13.9	24.3	17.1	14.7	29.9
修士女	200	10.5	24.0	13.5	20.5	31.5
修士文系	253	3.2	14.6	13.8	23.3	45.1
修士理系	193	24.9	36.8	17.1	9.8	11.4

### (3) 先延ばし志向

進学理由として先延ばし志向を回答したものはきわめて少数であった。「まだ働きたくなかった」を「とてもあてはまる」と回答したのは全体では 9%に過ぎず、逆に「全くあてはまらない」と回答したのは 43%、「あまりあてはまらない」とあわせると 6 割のものがあてはまないと回答した。しかし、分野別でみると、理系では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせた回答が 45%、性別でみると男性では 4 割、女性では 2 割強で男性のほうが先延ばし志向の割合が高かった。「希望する就職先がなかった」に該当する回答はさらに少なく、「とてもあてはまる」は全てのグループで 3%以下であった。逆に「全くあてはまらない」が 7 割前後に上った。

修士課程へ進学は就職の先延ばしにはあてはまらないが、女性よりは男性のほうが文系よりは理系のほうがやや先延ばし傾向が見て取れた。

### (4) 性別の考慮

最後に、「大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから」という進学理由が、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」は、全体で 14%であったが、男性では 4%、女性では 26%と、性別によって大きな差がみられた。

修士課程への進学理由は性別・分野を問わずもっと研究がしたいという回答が全体の 9 割を超えて最も多かった。そしてこの研究志向がすなわち職業としての研究者を意味しているわけではなかった。研究者になりたいに「とてもあてはまる」は全体では 3 割弱、男性 3 割強に対して女性は 2 割強と差が出た。研究志向の強さに比べると就職を考慮している割合は低かった。「就職に有利」に「全くあてはまらない」と回答したのが全体の 3 割で男女差はなかった。しかし理系では「とてもあてはまる」という回答が 25%、「ややあてはまる」とあわせると 6 割強にのぼり、理系で強い就職志向が見られた。一方で就職の先延

ばしのために修士課程に進学した割合はきわめて低かった。また、性別に関係のない能力発揮を求めて進学した割合は全体では低かったが、男女差が著しく、「あてはまる」は女性では26%で男性と22ポイントの差が出た。

## 2. 修士課程修了後の進路

現在考えている修士課程修了後の進路をたずねたところ、多い順に「公務員・企業を含む非研究職」(4割)、「博士課程への進学」(3割)、「公務員・企業を含む研究職」(2割)志望となっている。性別による顕著な差はあまりみられないが、専門別にみると、「非研究職」志望が理系では45%で文系とくらべて10ポイント以上高い。一方で、「博士課程への進学」では、文系が42%であるのに対し、理系では17%と文系の半分以下である(表2-4)。修士課程終了後、文系の半数弱が博士課程への進学を、理系の半数弱が非研究職に就職を志望している。

表2-4 修士課程終了後の希望進路 ( % )

	N	博士課程への 進学	研究職	非研究職	学校教員	その他
全体	455	31.2	20.4	37.1	4.2	7.0
男	256	30.1	23.0	39.1	3.9	3.9
女	199	32.7	17.1	34.7	4.5	11.1
文系	258	41.5	12.0	31.8	5.4	9.3
理系	194	17.0	31.4	44.8	2.6	4.1

この進路希望が修士課程入学時と異なるのは、全体で23%だが、男性は18%に対し女性は29%と女性が10ポイント以上高くなっている。専門別では理系よりも文系がやや高い数値を示している(表2-5)。

表2-5 修士課程終了後の進路変更 ( % )

	N	変更なし	変更あり
全体	454	77.5	22.5
修士男	256	82.4	17.6
修士女	198	71.2	28.8
修士文系	258	75.2	24.8
修士理系	193	80.3	19.7

変更の有無別に希望進路をみると、「変更なし」では「博士課程への進学」3割「研究職」2割をあわせて半数が研究志向であり、「非研究職」は3分の1である。「変更あり」では逆に「非研究職」が5割、「博士課程への進学」2割と「研究職」16%をあわせた3分の1強が研究志向である。(表2-6)

表2-6 進路変更の有無と希望進路 ( % )

	N	博士課程への 進学	研究職	非研究職	学校教員	その他
全体	454	31.3	20.3	37.2	4.2	7.0
変更なし	352	34.7	21.6	33.8	4.0	6.0
変更あり	102	19.6	15.7	49.0	4.9	10.8

進路変更をした理由を自由記述してもらった (N=93) が、以下のようにまとめることができるだろう。

「研究職 (公務員・企業を含む)」への変更理由では、研究を継続したいが経済的な理由によるものが多かった。「非研究職 (公務員・企業を含む)」では、「研究の適性が無いと判断した」、「大学での研究職のポストが少ない」、「進路が不安定なため経済的に自立できない」といった理由が目立った。「小・中・高・専門学校教員」への変更の場合は、経済的自立やライフプランの設計の理由によるものであった。「博士課程への進学」への変更は、「研究の面白さがわかり継続したい」、「研究をより深めたい」という理由が大半を占めた。

次に、現在、博士課程への進学を希望する理由、しない理由をそれぞれ問うた。

### (1) 博士課程への進学を希望する理由

博士課程に進学する理由を、a) 研究上の理由(研究の継続・専門性の向上・大学院生活に向いている)、b) 職業上の理由(大学教員希望・研究職希望・修士卒では希望する職業に就けない)、c) 性別に関係ない能力発揮の3側面から問うた。

表 2-7 博士課程進学を希望する理由

(%)

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
研究志向	研究の継続	141	72.3	23.4	3.5	0.7	0.0
	専門性の向上	140	71.4	27.9	0.7	0.0	0.0
	大学院生活に向いている	139	33.8	33.1	20.9	10.1	2.2
就職志向	大学教員希望	141	51.8	28.4	9.2	6.4	4.3
	研究職希望	141	27.7	30.5	21.3	11.3	9.2
	修士卒では希望する職業がない	142	14.1	11.3	18.3	19	37.3
性別考慮	性別に関係ない能力発揮	141	7.8	19.9	31.9	11.3	29.1

### 研究志向

表 2-7 のように、このグループはどの項目も「とてもあてはまる」の回答率が極めて高かった。

「研究の継続」は全体では 7 割が「とてもあてはまる」と回答し、「ややあてはまる」とあわせると 95% を超えた。男女別でみると男性のほうが「とてもあてはまる」の回答が 7 ポイントほど高く、男性のほうが強い動機付けをもっていた。「専門性の向上」に関して「とてもあてはまる」が約 7 割、「ややあてはまる」をあわせるとほぼ 100% が専門性の向上を目指していることがわかる。

### 就職志向

次に「職業」についても全体でみると「研究者」よりも「大学教員」に「とてもあてはまる」と回答したものが多かった。また、女性よりも男性のほうが、文系よりも理系のほうが職業を進学理由として意識している傾向が現れた。

「職業」グループのうち大学教員を希望するものは「とてもあてはまる」が全体では半数、「ややあてはまる」をあわせると 8 割に上った。性別でみると「とてもあてはまる」は男性の 6 割、女性の 4 割で、男性のほうが大学教員志望に強い動機付けをもっている。研究職希望

については、全体では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」がそれぞれ約 3 割で、大学教員ほど強い希望はなかった。性別でみると「とてもあてはまる」と回答したのは男性 37%、女性 17%と 20 ポイントもの差があり、ここでも男性のほうが進学理由に職業をより強く意識していることがわかる。「修士卒では希望する職がない」に関しては全体の 3 分の 1 は「全くあてはまらない」と回答している。性差はあまりないが、専門別に見ると、理系の 4 分の 1 は「とてもあてはまる」と回答しているのに対して文系は 1 割強に過ぎず、理系では博士課程への進学(研究)が希望する就職に必要であるという判断がなされていることがわかる。

### 性別の考慮

このグループは「どちらともいえない」3 割「全くあてはまらない」3 割に回答が分かれた。性別でみると男性は 4 割強が「全くあてはまらない」と回答し、「あてはまる」は 4%に過ぎなかったのに対し、女性は 26%が「あてはまる」で、女性のほうが能力発揮をジェンダーとの関連で意識していることが明らかである。

博士課程進学理由のうち「とてもあてはまる」の割合を進路変更の有無によって比較してみる。「希望する職がない」以外のどの項目でも「変更なし」の割合が高かった。とくに研究志向では「専門性の向上」(25 ポイント差)、職業志向では「大学教員」(23 ポイント差)「研究職」(20 ポイント差)で「変更なし」が高くなっている。「専門性の向上」、「大学教員」や「研究職」という博士課程への入学理由は修士課程入学当初から保たれているということであろう。(表 2-8)。

表 2-8 博士課程進学理由と進路変更の有無 ( % )

	N	研究継続	専門性 向上	大学院生活 に向く	大学教員 希望	研究職 希望	希望する 職がない	性別の 考慮
全体	141	72.3	71.4	33.8	51.8	27.7	14.1	7.8
変更なし	122	73.6	74.6	35.8	54.9	30.3	13.1	9.0
変更あり	19	65.0	50.0	21.1	31.6	10.5	20.0	0.0

博士課程への進学理由についてみると、ほぼ全員が専門性の向上、研究の継続に強い意思を持っていることがわかる。職業との関連でいえば女性よりも男性のほうが職業を意識しており、大学教員を目指すものは全体の約 8 割、研究職を目指すものは 6 割にのぼった。また、理系の約半数では希望する職業に就くために博士課程進学が必要だと感じられていた。また男性に比べて性別に関係のない能力発揮も意識されていた。

### (2)「博士課程への進学を希望しない」理由

(1) 同様に 研究上の理由、進路上の理由に分類できるが、加えて、 経済的理由、そして ジェンダー上の理由をあげることができる。

表 2-9 博士課程に進学しない理由

(%)

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究適性なし	307	28.3	30.6	22.8	9.1	9.1
職の保障がない	307	46.3	29.3	5.2	8.5	10.7
他に魅力的な就職先	307	29.6	32.9	15.6	9.8	12.1
他に魅力的な進路	306	14.1	21.2	18	12.4	34.3
経済的理由	307	26.7	34.2	6.8	11.7	20.5
性別に関係ない能力発揮できない	306	2.0	3.9	12.7	28.8	52.6

### 研究上の理由

表 2-9 のように、研究面での適性に関してみると、全体では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせて 6 割弱であった。「とてもあてはまる」と回答したのは男性の 25%。女性の 34% で 9 ポイントの差があった。

### 進路上の理由

進路上の理由のうち「職の保障がない」「ライフプランに支障がある」をみると、職の保障では「とてもあてはまる」と回答したのは全体の約半数、「ややあてはまる」をあわせると約 4 分の 3 は職の保障がないことを理由に博士課程に進学しないことを選んでいる。男女別に見ると男性は「とてもあてはまる」と回答したのは 55%、女性の 35% より 20 ポイントも多く、男性のほうが職業に重大な関心を寄せていることがうかがわれる。また、「ライフプランに支障」では「ややあてはまる」と「とてもあてはまる」をあわせると非進学者の 6 割以上が博士課程進学をライフプランの支障ととらえていることがわかる。「他に魅力的な就職先」と回答したのは「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせると全体では 6 割であったが、男性が約 7 割であるのに対して女性は 5 割強で 16 ポイントの差が出た。

博士課程に進学しないものの 4 分の 3 は職の保障がないことを理由に挙げている。だがその一方でほかに魅力的な就職先を見つけているものは 6 割であった。

### 経済的理由

経済的理由をみると、全体では約 6 割が「あてはまる」と回答しており、男女・専門による大差はなかった。

### 性別の考慮

「性別に関係ない能力発揮」については全体では約半数、男性は 6 割、女性は 4 割が「全くあてはまらない」と回答しており、博士課程への非進学とは関連が薄かった。

博士課程に進学しない理由について、全体としては進路上の理由、とりわけ職の保障がないことの回答率が 8 割近くにのぼった。そして全体の 6 割は「他に魅力的な就職先」を見出している。また、経済的な理由によるものも非進学者の 6 割にのぼった。職業的なことを考慮して博士課程進学をしないのは男性の回答率のほうが高く、自分の適性を考慮しているのは女性のほうが若干多かった。

### 3. 博士課程への進学理由

ここでは博士課程在学者に問うた博士課程への進学理由(Q4)を検討する。博士課程への進学理由として次の4側面、6項目の質問を用意した。進学にあたってそれぞれの項目をどれほど考慮したかを、回想法によって5段階で評価してもらった。

表 2-10 博士課程への進学理由 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
研究者になりたい	302	61.9	27.5	7.9	1.7	1.0
専門領域をより深めたい	298	78.9	19.5	1.7	0.0	0.0
就職に有利	294	3.7	7.5	16.7	27.2	44.9
希望する就職先がなかった	295	2.4	4.7	5.1	12.9	74.9
まだ働きたくなかった	297	2.4	7.1	10.8	13.8	66.0
性別に関係なく能力発揮	298	5.0	13.4	30.5	21.1	29.9

#### (1) 研究志向

表 2-10 のように、「研究者になりたい」・「専門領域を深めたい」について見てみると、前者では全体で「とてもあてはまる」が約 6 割、「ややあてはまる」とあわせると約 9 割が志向している。学年別では博士 1 - 3 年で 60%、4-6 年で 68% で学年があがるほど志向性が明確化する。専門別では、どちらの学年群でも文系のほうが理系より 12 - 14 ポイント高く、高学年の文系ほど研究者志向が強いといえる。「専門領域を深めたい」に関して全体では「とてもあてはまる」は 79%、「ややあてはまる」とあわせるとほぼ 100% が回答した。専門別にみると文系のほうが理系よりも 11 - 13 ポイント高く、同じ傾向が見て取れる(表 2-11)。

表 2-11 博士課程進学理由・研究者になりたい ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
全体	302	61.9	27.5	7.9	1.7	1.0
博士 1 - 3 年	211	59.2	30.8	8.1	0.9	0.9
博士 4 - 6 年	91	68.1	19.8	7.7	3.3	1.1
博士 1-3 年男	112	63.4	29.5	6.3	0.0	0.9
博士 1-3 年女	99	54.5	32.3	10.1	2.0	1.0
博士 4-6 年男	43	65.1	23.3	4.7	4.7	2.3
博士 4-6 年女	48	70.8	16.7	10.4	2.1	0.0
博士 1-3 年文系	147	63.9	25.9	7.5	1.4	1.4
博士 1-3 年理系	62	50.0	41.9	8.1	0.0	0.0
博士 4-6 年文系	83	68.7	20.5	8.4	2.4	0.0
博士 4-6 年理系	7	57.1	14.3	0.0	14.3	14.3

#### (2) 就職志向

次に「職業に有利」という理由についてみると、全体では 5 割弱が「全くあてはまらない」と回答し、「あまりあてはまらない」とあわせると 7 割強が「あてはまらない」と回答した。男女別に見ると「あてはまらない」という回答は、女性のほうが男性よりも 8 ポイントほど高かった。

### (3) 先延ばし志向

「希望する就職先がなかった」「まだ働きたくなかった」という先延ばし志向は、前者が全体では約 9 割、後者でも 8 割が「あてはまらない」と回答しており博士課程進学の原因とはなっていない。

### (4) 性別の考慮

「性別に関係ない能力発揮」については全体で見ると最も多い回答は「どちらともいえない」「全くあてはまらない」がそれぞれ 3 割と分かれた。男性では約 4 割が「全くあてはまらない」と回答しているのに対し、女性は 1 - 3 年で「とてもあてはまる」「ややあてはまる」あわせて 33.7%、4-6 年でも 23.4%と男女差が見られた。

博士課程への進学理由の大半は「研究者志向」という回答が得られた。学年別に見ると学年が上がるほど志向性が高くなり、専門別では理系よりも文系のほうが志向性が高かった。

## 4. 博士課程修了後の進路

表 2-12 のように、博士課程修了後に希望している進路は、「大学教員」が最も多く全体の 3 分の 2、次いで「(大学以外の公務員・企業等での)研究職」が全体の 4 分の 1 を占め、「非研究職」は少数であった。

研究職志向は強く、「大学教員」を含めて 9 割以上に上るが、性別による違いはあまりみられない。学年別にみると博士 4-6 年で大学教員志望が高く 4 分の 3 が希望し、1-3 年と 12 ポイントの差があるのに対して、博士 1-3 年では「研究職」志望 (26%) が 4-6 年よりも 9 ポイント高い。専門別にみると文系では「大学教員」が 75%、「研究職」が 15%であるのに対して、理系では「大学教員」36%、「研究職」51%と、理系では大学教員よりも大学以外の研究職を選択している。

表 2-12 専門別博士課程終了後の進路 (%)

	N	大学教員	研究職	非研究職	学校教員	その他
全体	300	66.0	23.3	2.7	2.0	6.0
博士 1 - 3 年	212	62.3	25.9	3.3	2.4	6.1
博士 4 - 6 年	91	74.7	16.5	2.2	1.1	5.5
文系	231	74.9	15.2	1.3	2.6	6.1
理系	69	36.2	50.7	7.2	0.0	5.8

博士課程進学後の進路変更は「なし」が文系・理系ともに 9 割以上で、希望進路は進学当初から変更がなかったことがうかがわれる (表 2-13)。

表 2-13 専門別進路変更の有無 (%)

	N	変更なし	変更あり
全体	299	92.6	7.4
文系	230	92.2	7.8
理系	69	94.2	5.8

### (1) 大学教員志望で重視する項目

大学教員を希望する理由は 研究関連（「研究環境が整っているから」「研究テーマ、選択の自由度が高いから」「後進の育成に関心があるから」）、社会的・経済的地位、時間的自由と家事育児との両立、性別に関係のない能力発揮の4側面から検討できる<sup>1</sup>。

表 2-14 大学教員希望の理由 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究環境	197	46.7	34.5	13.2	4.6	1.0
研究テーマ選択の自由度	198	43.9	35.9	13.1	6.1	1.0
後進の育成	196	29.6	36.7	19.9	8.2	5.6
社会的地位	198	6.1	27.8	29.8	24.7	11.6
経済的地位	197	7.1	31.0	32.5	17.8	11.7
家事育児との両立	197	17.8	29.4	22.8	15.2	14.7
性別に関係ない能力発揮	198	12.6	22.7	32.3	15.2	17.2

### 研究

表 2-14 のように、研究に関連する項目を理由としてあげた割合は高かった。「研究環境が整っている」「研究テーマの自由度」は「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせると8割があてはまると回答した。大学での研究者の道を選択する際に、「研究環境」や「研究テーマ選択の自由度」がその大きな誘因になっていることがわかる。専門別でみると「研究環境」について文系は85%が「あてはまる」としており、大学の研究環境に期待していることがうかがわれる（表 2-15）。

表 2-15 研究環境（大学教員希望の理由） ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	195	47.2	33.8	13.3	4.6	1.0
文系	171	49.1	34.5	9.9	5.3	1.2
理系	24	33.3	29.2	37.5	0.0	0.0

### 地位

「社会的に地位が高いから」「経済的待遇がよいから」について「とてもあてはまる」は、それぞれ全体ではわずか6%、7%と低く、「ややあてはまる」をあわせても3割台にとどまった（表 2-16）。

<sup>1</sup> (1)「大学教員志望」で理系学生はN=24 と小さいので参考程度である。

表 2-16 社会的地位 (大学教員希望の理由) ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	196	6.1	27.6	30.1	24.5	11.7
文系	172	7.0	25.6	29.1	26.2	12.2
理系	24	0.0	41.7	37.5	12.5	8.3
<b>経済的地位</b>						
全体	195	7.2	30.8	32.3	17.9	11.8
文系	171	8.2	32.7	29.2	18.1	11.7
理系	24	0.0	16.7	54.2	16.7	12.5

### 家庭との両立

「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせると半数弱が「時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから」としている。学年・性別にかかわらず 16-19%が「とてもあてはまる」としており、この項目を重視しているのは男女の区別がないことがわかった (表 2-17)。

表 2-17 学年別・性別と家事育児との両立 (大学教員希望の理由) ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	197	17.8	29.4	22.8	15.2	14.7
博士 1-3 年男	68	16.2	16.2	25.0	20.6	22.1
博士 1-3 年女	61	19.7	36.1	19.7	13.1	11.5
博士 4-6 年男	32	18.8	31.3	25.0	15.6	9.4
博士 4-6 年女	36	16.7	41.7	22.2	8.3	11.1

### 性別の考慮

「性別に関係なく能力が発揮できそうだから」について「とてもあてはまる」は、全体で 13%にとどまった。男女別でみると男性は「とてもあてはまる」ややあてはまるをあわせても 16%に過ぎないのに対して女性は 56%にのぼり、女性は性別による能力発揮が大学教員という進路選択に際して考慮されていることがわかる。

大学教員を志望する際に重視するのは研究関連項目に集中した。「研究環境」では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせると 85%が重視しており、「研究テーマ選択の自由」も、あわせると 80%が重視している。また、「後進の育成」も 64%が重視しており、研究関連項目以外の項目と大きな差が出た。

### (2) 研究職 (大学以外) 志望で重視する項目

研究職を希望する理由も、研究関連 (「研究環境が整っているから」「研究テーマ、選択の自由度が高いから」「後進の育成に関心があるから」)、社会的・経済的地位、家庭との両立、性別に関係のない能力発揮の 4 側面から検討できる。

表 2-18 研究職(大学以外)の希望理由 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究環境	70	40.0	34.3	17.1	8.6	
研究テーマ選択の自由度	69	23.2	40.6	21.7	8.7	5.8
後進の育成	70	11.4	15.7	41.4	14.3	17.1
社会的地位	70	2.9	4.3	42.9	28.6	21.4
経済的地位	70	5.7	24.3	32.9	17.1	20.0
家事育児との両立	70	5.7	28.6	25.7	28.6	11.4
性別に関係ない能力発揮	69	13.0	21.7	36.2	13	15.9

## 研究

表 2-18 のように「研究環境」「研究テーマの自由度」について「とてもあてはまる」「あてはまるをあわせた回答率がそれぞれ 7 割強・6 割強と高かった。「研究環境」に関しては「あてはまる」が文系より理系が 5 ポイント高いのに比べ「研究テーマの自由度」は文系のほうが 16 ポイント高かった(表 2-19)。

表 2-19 研究環境 (研究職(大学以外)の希望理由) ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	70	40.0	34.3	17.1	8.6	
文系	35	42.9	28.6	17.1	11.4	
理系	35	37.1	40.0	17.1	5.7	
研究テーマの自由度						
全体	69	23.2	40.6	21.7	8.7	5.8
文系	35	34.3	37.1	17.1	5.7	5.7
理系	34	11.8	44.1	26.5	11.8	5.9

## 地位

社会的地位についてみると、全体では「どちらともいえない」が 43%と最も多く、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせても全体で 7%と低率であった。大学以外で研究職につくことについて「社会的地位」が高いと感じている者はきわめて少ないといえる。他方、「経済的地位」については「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせると全体で 3 割と社会的地位と低かったが比較すると魅力を感じていることがわかった。専門別でみると、理系で「とてもあてはまる」「ややあてはまる」をあわせて 4 割が「あてはまる」と回答している。(表 2-20)。

表 2-20 社会的地位研究職(大学以外)の希望理由 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	70	2.9	4.3	42.9	28.6	21.4
文系	35	2.9	5.7	51.4	28.6	11.4
理系	35	2.9	2.9	34.3	28.6	31.4
経済的地位	N					
全体	70	5.7	24.3	32.9	17.1	20.0
文系	35	5.7	14.3	48.6	14.3	17.1
理系	35	5.7	34.3	17.1	20.0	22.9

## 家庭との両立

「時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから」については、「とてもあてはまる」は全体では 6%にとどまり、学年・性別・専門によらず低い数値になっており、大学以外の職場では「時間の自由度」の制約が強いと感じられているといえるだろう。

## 性別の考慮

「性別に関係なく能力が発揮できそうだから」については、全体では「どちらともいえない」という回答が 36%で最も多く、「とてもあてはまる」は全体で 13%であった。性別で見ると男性は 24%が「あてはまる」としたのに対して女性は 44%と半数弱が「あてはまる」と回答し、女性は大学以外の研究職の選択に際しても性別による能力発揮を考慮していることがわかる。

「その他」の理由としては自由回答 (q23t8) からみると、研究に専念するため大学以外の環境を重視する理由(「大学教員は大変であるので」「研究に割り当てられる時間が多いから」「学生への研究指導などが(大学と比べて)ない」「研究を続けたい、大学以外の世界における研究環境を知りたい、大学の閉じこもった環境がいやだ)、自分の研究を大学以外の場で還元しようとする理由(「学んだスキルをより磨きたいから・研究成果を少しでも出して現場に還元したいから」「研究したことを製品に反映できるから」)がみられた。

最後に「大学教員」・「大学教員以外の研究職」志望において重視される項目から、研究職としての大学教員の魅力を探ってみたい。表 2-21、表 2-22 のように志望理由の項目ごとに「とてもあてはまる」を「強」、それ以外を「弱」として集計し、「大学教員」「大学教員以外の専門職」ごとに重視する項目の違いを検討した。その結果、大学以外の研究職よりも大学教員志望のほうが強い志望理由をもっていることがわかった。「大学教員」「大学以外の研究職」いずれでも「研究環境」が最も重視されており、大学教員では半数弱が強い理由としてあげていた。大学教員ではそれとならんで「研究テーマ選択の自由度」も 4 割強が強い理由としてあげられている。「後進の育成」も 3 割が重視しており、これら三つの研究に関連する項目が大学教員希望のとても強い理由となっていた。研究職としての大学教員職の魅力は、地位や自由な時間よりも研究に関連するものであることがうかがえる。

一方、大学以外の研究職でも「研究環境」が重視されていて 4 割が強い理由としてあげている。「研究テーマ選択の自由度」は文系では 3 分の 1 ほどが重視しているものの、理系では 1 割強と魅力的な志望理由とはなりえていない。大学以外の研究職でも研究関連の項目が志望理由として重視されているが、「大学教員」のほうがより重要視されていることがわかる。

さらに、大学教員を希望する理由で「時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから」が「とてもあてはまる」とした者の割合は学年・性別を問わず 2 割弱、「ややあてはまる」をあわせると 5 割弱いるのに対し、大学以外の研究職では「とてもあてはまる」が 6%、「ややあてはまる」をあわせるでも 3 割弱であり、大学教員を志望しない理由では「とてもあてはまる」が 3%、「ややあてはまる」とあわせても 1 割程度にすぎず、大学教員の魅力として、研究環境以外にも家事育児との両立への期待が魅力のひとつとなっているといえるだろう。

表 2-21 大学教員と研究職（大学以外）志望において重視する項目 ( % )

	N	研究環境		研究テーマ 選択の自由度		後進の育成		社会的地位		経済的地位		家事育児 との両立		性別に関係 ない能力発揮	
		強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
大学教員	198	46.7	53.3	43.9	56.1	29.6	70.4	6.1	93.9	7.1	92.9	17.8	82.2	12.6	87.4
大学以外	70	40.0	60.0	23.2	76.8	11.4	88.6	2.9	97.1	5.7	94.3	5.7	94.3	13.0	87.0

表 2-22 専門別 大学教員と研究職（大学以外）志望において重視する項目 ( % )

	N	研究環境		研究テーマ 選択の自由度		後進の育成		社会的地位		経済的地位		家事育児 との両立		性別に関係 ない能力発揮	
		強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
文系・ 大学教員	172	49.1	50.9	45.9	54.1	28.8	71.2	7.0	93.0	8.2	91.8	18.1	81.9	13.4	86.6
理系・ 大学教員	24	33.3	66.7	33.3	66.7	33.3	66.7	0.0	100.0	0.0	100.0	16.7	83.3	8.3	91.7
文系・ 大学以外	35	42.9	57.1	34.3	65.7	14.3	85.7	2.9	97.1	5.7	94.3	8.6	91.4	22.9	77.1
理系・ 大学以外	35	37.1	62.9	11.8	88.2	8.6	91.4	2.9	97.1	5.7	94.3	2.9	97.1	2.9	97.1

### (3) 「大学教員」を希望しない理由

「大学教員」を希望しない理由は 進路的側面と 個人的側面に分類することができる。

表 2-23 「大学教員」を希望しない理由 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
ポストが少ない	99	49.5	29.3	8.1	5.1	8.1
他に魅力的な進路がある	101	15.8	27.7	34.7	9.9	11.9
教員に不向き	100	13.0	21.0	31.0	21.0	14.0
後進の育成に無関心	100	9.0	13.0	32.0	19.0	27.0
経済的理由	98	10.2	19.4	20.4	17.3	32.7
家事育児両立への期待なし	100	3.0	8.0	21.0	28.0	40.0
性別に関係ない能力発揮ができない	100	8.0	30.0	28.0	34.0	

#### 進路的側面

表 2-23 のように、大学教員を希望しない理由はポストの少なさであった。「大学のポストが少ないから」は半数が「とてもあてはまる」と回答し、「ややあてはまる」までを含めると 8 割にもものぼる。これはどの学年、性別、分野でも同じ傾向である。次に「ほかに魅力的な進路があるから」は「どちらともいえない」が最も多く全体で 35%、「とてもあてはまる」は 16%と少なかった。「あてはまる」を分野別にみると文系 49%、理系 35%と文系のほうが 14 ポイント高かった。「教員に向いていないから」、「後進の育成に関心がないから」についてはどちらも 3 分の 1 が「どちらともいえない」と回答している。進路的側面から大学教員を希望しない理由は圧倒的に「ポストの少なさ」があがった。

#### 個人的側面

「経済的な理由」「家事育児との両立」「性別に関係ない能力発揮」は大学教員を志望し

ない積極的な理由にはなっていなかった。「経済的な理由」は「全くあてはまらない」が3分の1で「あまりあてはまらない」をあわせると半数にのぼった。「家事育児との両立が期待できそうにないから」も7割近くが「あてはまらない」と答えた。「性別に関係なく能力を発揮できそうにないから」は「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」がそれぞれ3分の1の割合であった。性別で見ると男性は4分の3が「あてはまらない」であるのに対して女性は半数が「あてはまる」としており、著しい差異がみられた。女性にとって大学教員を進路として考える際に「性別に関係ない能力発揮」が考慮すべき重要なポイントであることがうかがわれる（表 2-24）。

表 2-24 性別に関係ない能力発揮 ( % )

	N	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	100	8.0	30.0	28.0	34.0
男性	50	0.0	26.0	22.0	52.0
女性	50	16.0	34.0	34.0	16.0

その他の理由として「大学教員を「希望しない」理由として「大学運営の事務作業に追われ、自分自身の研究・臨床活動や後進の育成に力が割けそうにないから」といった業務量の多さや忙しさをあげた記述もみられた。

### 3章 満足と悩み：大学院生の実状

#### 1. 研究生活評価

本調査では大学院生が現在の研究生活をどのように認識しているのかについて「研究意欲」「将来の明確な目的」「研究・指導体制」「研究での能力発揮」「研究生活全般」の5項目について5段階で評価してもらった。全体でみると研究に意欲的であることの評価が非常に高い一方で、それ以外の満足度がそれほど高くないという結果になった(表3-1)。

表 3-1 研究生活の評価 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
研究に意欲的	752	28.6	46.5	12.1	10.1	2.7
将来の目標が明確	749	15.4	31.9	25.1	20.8	6.8
研究・指導体制に満足	751	14.9	32.9	22.8	20.2	9.2
研究で能力発揮	751	7.5	27.6	41.0	19.4	4.5
研究生活全般の満足	749	9.2	36.6	30.0	18.3	5.9

はじめに、研究生活の評価を点数化して平均値を算出して比較してみたい。「とてもあてはまる」を+2、「ややあてはまる」を+1、「どちらともいえない」を0、「あまりあてはまらない」を-1、「全くあてはまらない」を-2として平均値を出した(表3-2)。全体としては平均値が高いのは「研究に意欲をもって取り組んでいる」で、群を抜いている。どの学年、性別、専門にも偏りなく評価が高く、とりわけ学年別では博士1-3年、また、博士1-3年男と博士1-3年理系では1.0を超えており、きわめて意欲的であることがみてとれる。以下、高い順に「将来の目標」、「研究・指導体制」、「能力発揮」である。「能力発揮」は、とくに修士女と博士1-3年女では平均値が0未満で評価が低かった。「生活全般の満足」も0.25とそれほど高きはなかった。

また、回答者のグループ別にみると博士1-3年、博士1-3年男でどの項目についても全体の平均値よりも高く、研究生活の評価が高いことがうかがわれる。他方、博士4-6年、なかでも4-6年女は評価が低かった。Nが小さいので参考程度だが、博士4-6年理系も「意欲」以外の評価が極めて低かった。

表 3-2 研究生活の評価 平均値

	N	研究に意欲的	将来の目標が 明確	研究・指導 体制に満足	研究で能力 発揮	研究生活全般の 満足
全体	752	0.883	0.282	0.241	0.140	0.250
修士	453	0.812	0.255	0.215	0.084	0.281
博士 1-3 年	209	1.043	0.344	0.416	0.263	0.255
博士 4-6 年	90	0.867	0.270	-0.033	0.135	0.079
修士男	253	0.846	0.285	0.254	0.186	0.375
修士女	200	0.770	0.217	0.165	-0.045	0.161
博士 1-3 年男	110	1.245	0.382	0.609	0.545	0.477
博士 1-3 年女	99	0.818	0.303	0.202	-0.051	0.010
博士 4-6 年男	42	0.929	0.524	0.071	0.286	0.190
博士 4-6 年女	48	0.813	0.043	-0.125	0.000	-0.021
修士文系	256	0.895	0.240	0.176	0.020	0.238
修士理系	193	0.720	0.269	0.281	0.176	0.354
博士 1-3 年文系	146	0.973	0.466	0.356	0.171	0.186
博士 1-3 年理系	61	1.230	0.049	0.557	0.492	0.426
博士 4-6 年文系	82	0.854	0.284	-0.024	0.123	0.086
博士 4-6 年理系	7	0.857	-0.143	-0.429	0.000	-0.286

次に各項目相互の相関関係をみてみる。表 3-3 のように生活評価の各項目は相互に関連があることがわかる。「将来の目標」はその中ではほかの項目との関連が弱く、生活評価の中では独立して考えてよいだろう。「研究意欲」「研究・指導体制に満足」「研究で能力発揮」は相互にかなり関連があるといえる。また、どの項目もそれぞれに評価が高いほど研究生活全般の満足度も高い。5 項目のうち、研究生活全般の満足度は、他の 4 項目と強い正の相関関係をしめしている。また、「研究意欲」も他の項目と強い相関を示す。そこで、研究意欲を統制したうえで、3 項目と生活全般の満足度との関連をみたところ、全体の係数は低下するものの、指導体制と.450、能力発揮.395、目標.319 と相関関係を示した。意欲とは独立して、これらの項目が研究生活全般と正の関連を示すことがわかる。

表 3-3 研究生活の評価の相関関係

	研究に意欲的	将来の目標が 明確	研究・指導 体制に満足	研究で能力 発揮	研究生活全般の 満足
研究に意欲的	1	0.338	<b>0.402</b>	<b>0.522</b>	<b>0.521</b>
将来の目標が明確		1	0.175	0.368	<b>0.432</b>
研究・指導体制に満足			1	<b>0.461</b>	<b>0.562</b>
研究で能力発揮				1	<b>0.559</b>
研究生活全般の満足					1

網掛けは統計的に有意な係数、太字はかなり相関関係がある係数

### (1) 研究意欲

上記をふまえたうえで、項目ごとの傾向を属性別にみていこう。はじめに「研究に意欲をもって取り組んでいる」についてみると、「とてもあてはまる」は全体の約 3 割、「ややあてはまる」をあわせると全体の 4 分の 3 が満足しており、この 5 つの項目の中で最も高く、多くの大学院生たちが研究生活に意欲的に取り組んでいることがわかる。なかでも「博士 1-3 年男」と「博士 1-3 年理系」はそれぞれあわせて 9 割が満足しており、研究意欲が極めて高いことがわかる。また、男女別でみると満足度は男性のほうが高く、「とてもあては

まる」と「あてはまる」をあわせて修士では3ポイント差、博士1-3年では21ポイント差、博士4-6年でも12ポイント差であった(表3-4)。

表3-4 研究に意欲的 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
全体	752	28.6	46.5	12.1	10.1	2.7
修士	453	26.0	47.9	10.6	12.1	3.3
博士1-3年	209	33.5	46.4	12.4	6.2	1.4
博士4-6年	90	30.0	40.0	18.9	8.9	2.2
修士男	253	28.1	47.0	9.5	12.3	3.2
修士女	200	23.5	49.0	12.0	12.0	3.5
博士1-3年男	110	39.1	50.9	6.4	2.7	0.9
博士1-3年女	99	27.3	41.4	19.2	10.1	2.0
博士4-6年男	42	28.6	47.6	14.3	7.1	2.4
博士4-6年女	48	31.3	33.3	22.9	10.4	2.1
修士文系	256	26.2	51.6	10.2	9.8	2.3
修士理系	193	25.9	43.5	11.4	15.0	4.1
博士1-3年文系	146	32.2	43.8	14.4	8.2	1.4
博士1-3年理系	61	37.7	52.5	6.6	1.6	1.6
博士4-6年文系	82	29.3	41.5	17.1	9.8	2.4
博士4-6年理系	7	28.6	28.6	42.9	0.0	0.0

しかし、「自分の将来について目標が明確になっている」、「研究・指導体制に満足している」、「研究において能力が発揮できている」、「研究生活全般において満足している」の項目についてみていくと、高い研究意欲とほうらはらに現状の研究生活において満足度が低いといわざるをえない。以下、各項目について詳細にみていく。

## (2) 将来の目標

まず、「自分の将来について目標が明確になっている」について「とてもあてはまる」は、全体で15%であり、「ややあてはまる」とあわせると半数弱しか将来の目標が明らかになっていなかった。学年別でみると博士1-3年が高く(51%)、修士と博士4-6年では低い(46%)という結果である。とくに博士4-6年女では満足度が低く、4-6年男と26ポイントの差があった(表3-5)。

表 3-5 将来の目標が明確 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	749	15.4	31.9	25.1	20.8	6.8
修士	451	14.0	31.9	25.9	22.0	6.2
博士 1 - 3 年	209	17.7	33.0	22.5	19.6	7.2
博士 4 - 6 年	89	16.9	29.2	27.0	18.0	9.0
修士男	253	14.2	33.6	25.7	19.4	7.1
修士女	198	13.6	29.8	26.3	25.3	5.1
博士 1-3 年男	110	20.0	30.0	22.7	22.7	4.5
博士 1-3 年女	99	15.2	36.4	22.2	16.2	10.1
博士 4-6 年男	42	16.7	42.9	21.4	14.3	4.8
博士 4-6 年女	47	17.0	17.0	31.9	21.3	12.8
修士文系	254	13.8	32.3	26.0	20.1	7.9
修士理系	193	14.0	31.6	25.9	24.4	4.1
博士 1-3 年文系	146	19.9	37.0	21.2	13.7	8.2
博士 1-3 年理系	61	11.5	24.6	26.2	32.8	4.9
博士 4-6 年文系	81	17.3	29.6	27.2	16.0	9.9
博士 4-6 年理系	7	0.0	28.6	28.6	42.9	0.0

### (3) 研究・指導体制の満足

次に、「研究・指導体制に満足している」という項目について「とてもあてはまる」は全体で 15%程度しかおらず「ややあはまる」をあわせても半数に満たず、学年別にみると博士 4-6 年で 3 分の 1 強しかない(表 3-6)。男女差をみると修士では 7 ポイント差だが博士 1-3 年では 16 ポイントと差が大きくなっている。また、「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」が全体で 3 割も存在することは問題視すべきであろう。

表 3-6 研究・指導体制に満足 ( % )

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	751	14.9	32.9	22.8	20.2	9.2
修士	452	14.4	32.7	23.0	19.7	10.2
博士 1 - 3 年	209	17.2	36.8	21.1	20.1	4.8
博士 4 - 6 年	90	12.2	24.4	25.6	23.3	14.4
修士男	252	15.5	34.9	20.2	18.3	11.1
修士女	200	13.0	30.0	26.5	21.5	9.0
博士 1-3 年男	110	20.9	40.9	19.1	16.4	2.7
博士 1-3 年女	99	13.1	32.3	23.2	24.2	7.1
博士 4-6 年男	42	16.7	21.4	26.2	23.8	11.9
博士 4-6 年女	48	8.3	27.1	25.0	22.9	16.7
修士文系	256	13.7	31.3	25.0	19.1	10.9
修士理系	192	15.6	34.9	20.3	20.3	8.9
博士 1-3 年文系	146	18.5	32.2	20.5	24.0	4.8
博士 1-3 年理系	61	14.8	47.5	21.3	11.5	4.9
博士 4-6 年文系	82	12.2	26.8	22.0	24.4	14.6
博士 4-6 年理系	7	0.0	0.0	71.4	14.3	14.3

### (4) 研究上の能力発揮

また、「研究において能力発揮ができています」は「あてはまる」が全体では最低であった。「とてもあてはまる」は、「博士 1-3 年男」の 16%を除くと、どのカテゴリーでも 1 割にも

満たない非常に低い数値を示した(表 3-7)。しかし、「全くあてはまらない」は5%と低く、4割が「どちらともいえない」であった。「能力発揮」でも満足度に男女差があり、それは全ての項目の中で最も大きかった。ここでも「研究・指導体制」同様、修士よりも博士 1-3年の男女差が大きいという傾向がみられた。修士では9ポイント差だが、博士 1-3年では23ポイント差に拡大し、4-6年でも12ポイントの差があった。博士 1-3年女で満足度が低いといえよう。

表 3-7 研究で能力発揮 ( % )

	N	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
全体	751	7.5	27.6	41.0	19.4	4.5
修士	453	6.8	25.4	43.5	17.9	6.4
博士 1 - 3 年	209	9.1	32.1	35.9	22.0	1.0
博士 4 - 6 年	89	6.7	28.1	40.4	21.3	3.4
修士男	253	9.1	26.9	43.1	15.4	5.5
修士女	200	4.0	23.5	44.0	21.0	7.5
博士 1-3 年男	110	15.5	36.4	35.5	12.7	0.0
博士 1-3 年女	99	2.0	27.3	36.4	32.3	2.0
博士 4-6 年男	42	7.1	33.3	45.2	9.5	4.8
博士 4-6 年女	47	6.4	23.4	36.2	31.9	2.1
修士文系	256	5.1	23.0	46.9	18.8	6.3
修士理系	193	9.3	28.0	39.9	16.6	6.2
博士 1-3 年文系	146	8.9	28.1	35.6	26.0	1.4
博士 1-3 年理系	61	9.8	41.0	37.7	11.5	0.0
博士 4-6 年文系	81	6.2	28.4	40.7	21.0	3.7
博士 4-6 年理系	7	0.0	28.6	42.9	28.6	0.0

### (5) 研究生活全般の満足

最後に「研究生活全般について満足している」についてみると、ここでも「とてもあてはまる」は全体で1割程度であり、「ややあてはまる」をあわせても半数弱であった。最も満足度の高い修士男、博士 1-3年男では半数を超えていた。(表 3-8)。ここでも満足度の男女差は修士よりも博士 1-3年が大きいという結果が出た。男女差は修士では11ポイント差だが博士 1-3年では16ポイント差と大きく、研究生活全般についても博士 1-3年女の満足度が低いという結果が得られた。

表 3-8 研究生生活全般の満足

(%)

	N	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
全体	749	9.2	36.6	30.0	18.3	5.9
修士	452	9.3	37.8	30.8	15.9	6.2
博士 1-3 年	208	8.7	38.0	27.9	21.2	4.3
博士 4-6 年	89	10.1	27.0	31.5	23.6	7.9
修士男	253	10.7	41.1	28.5	14.6	5.1
修士女	199	7.5	33.7	33.7	17.6	7.5
博士 1-3 年男	109	11.0	43.1	31.2	11.9	2.8
博士 1-3 年女	99	6.1	32.3	24.2	31.3	6.1
博士 4-6 年男	42	11.9	28.6	35.7	14.3	9.5
博士 4-6 年女	47	8.5	25.5	27.7	31.9	6.4
修士文系	256	8.2	36.7	31.6	17.6	5.9
修士理系	192	10.9	39.6	29.7	13.5	6.3
博士 1-3 年文系	145	9.7	33.8	26.9	24.8	4.8
博士 1-3 年理系	61	6.6	47.5	31.1	11.5	3.3
博士 4-6 年文系	81	9.9	28.4	30.9	22.2	8.6
博士 4-6 年理系	7	0.0	14.3	42.9	42.9	0.0

ここで検討した研究生生活の満足とストレス(Q34)の関連を見ておきたい。表 3-9 ように研究生生活への満足が高いほど「活気あり」も高くなる傾向がみとれる。逆に研究生生活への満足と「いらいら」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」といったストレスは負の相関の関係にあり、研究生生活への評価が低いほどストレスは強くなるという関連がみとれ、なかでも「生活全般への満足」が低いほど「抑うつ感」が強まることがわかる。

表 3-9 研究生生活の満足とストレスの相関係数

	活気あり	いらいら	疲労感	不安感	抑うつ感
研究に意欲的	0.26	-0.06	-0.08	-0.09	-0.25
研究・指導体制に満足	0.18	-0.18	-0.1	-0.16	-0.19
研究で能力発揮	0.21	-0.13	-0.13	-0.15	-0.25
将来の目標が明確	0.27	-0.05	-0.1	-0.13	-0.26
研究生生活全般の満足	0.38	-0.23	-0.24	-0.24	-0.33

(注) 網掛けは統計的に有意な係数

以上のように、研究には高い意欲をもって取り組みながら、それに比べると現在の研究生生活に対する満足度は低いという結果が出た。どの項目でも女性の満足度のほうが低い傾向があり、とくに「指導体制」「能力発揮」そして「研究生生活全般」で「博士 1-3 年女」では満足度が下がるという結果が出た。また、研究生生活への満足度が高ければ生活に活気があり、ストレスも少なくなるという結果も得られた。各項目は相互に関連しており、それぞれが研究生生活の質や満足度に影響を与えている。この結果は現在の大学院生が日々の研究を行っていきなかにさまざまな悩みや困難を抱えていることを示唆しているだろう。次項では、彼らがどのような悩みや困難を抱え、それが研究生生活の満足度や継続にどのような影響を与えているのかという点についてみていく。

## 2. 大学院生活で困っていること

本調査では、研究生生活における悩みを、研究、進路、経済、健康、人間関係、ジェンダー環境の6側面からとらえ、11項目を用いて5段階で評価してもらった。また、女子大学院生に対しては、女性であることに起因する固有の悩みについて7項目でたずねている。全体を概観すると、研究生生活の悩みで「とても悩んでいる」の割合が高く深刻なものは、高い順に「希望進路(就職先)」(35%)、「研究と結婚・育児を含めた将来のライフプラン」(30%)、「研究(論文)の進め方」(28%)、「経済的なこと」(25%)、「希望進路が明確にならないこと」(21%)となっている。これらは「やや悩んでいる」をあわせると悩んでいるものの割合が半数を超え、多くの大学院生にとって大きな課題になっている。逆に人間関係での悩みは「まったく悩んでいない」「やや悩んでいない」に偏っており、それほど大きな悩みにはなっていないことがわかる。また、女性のみにも問うた悩みはそれほど深刻ではないといえる(表3-10)。

その他に悩んでいることを自由記述してもらったところ、「研究室内の業務の量が著しく、研究を進められない」、「年齢による障害があること。言い換えると、大学以外での経験が評価されない(例:助手の年齢制限)」、「助手の業務が忙しく調査に使える時間が少ない」といった回答もみられた。

表3-10 研究生生活における悩み (%)

		N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
研究	研究の進め方	753	27.8	39.2	13.5	13.4	6.1
	自分の適性	749	17.2	32.2	21.8	18.4	10.4
	研究室内の人間関係	752	7.4	16.0	12.9	29.0	34.7
	指導教員との関係	753	6.8	15.1	12.9	27.5	37.7
進路	進路(就職先)	756	34.8	29.9	10.3	12.0	13.0
	将来のライフプラン	754	30.4	33.0	11.5	13.0	12.1
	希望進路	752	20.7	29.5	13.3	16.1	20.3
経済面	経済的なこと	761	24.6	39.7	12.0	16.6	7.2
健康面	健康面	755	6.5	31.0	15.1	31.9	15.5
人間関係	研究室以外の人間関係	753	4.6	10.2	17.4	36	31.7
	家族の理解	751	2.4	8.5	8.4	28.1	52.6
ジェンダー			ある	ない			
	指導教員の意識が態度が性別により異なる	757	26.9	73.1			
	大学院生活での被差別経験	758	13.7	86.3			
	学内で女性が扱いにくいと感じる施設の有無	754	26.5	73.5			
			とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
女性のみ	女性が就職に不利	347	11.5	27.7	26.8	21.3	12.7
	同性の相談相手がいない	345	9.9	21.2	13.9	27.2	27.8
	体力的にきつい	347	8.9	37.8	15.6	26.5	11.2
	拘束時間が長い	345	5.8	15.7	15.7	37.4	25.5
	研究室の雰囲気	346	4.3	9.8	12.7	25.1	48.0
	家族や周囲の理解	344	2.6	9.9	11.0	31.4	45.1

## (1) 研究

### 研究の進め方

先述したように、「研究（論文）の進め方」について「とても悩んでいる」は全体で約 3 割だが、「やや悩んでいる」までをあわせると 6 割以上にものぼる。表 3-11 ように中でも修士女性・修士文系で「とても悩んでいる」の割合が高くなっている。性別でみると女性のほうが悩んでいる傾向があり、どの学年でも「とても悩んでいる」「やや悩んでいる」をあわせると 8 割前後にのぼり、それぞれ男性よりも 20 ポイント近く高くなっている。また、博士理系は N が小さいので参考ではあるが、「悩んでいる」が 100% にのぼった。

表 3-11 研究生生活における悩み・研究の進め方 ( % )

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
全体	753	27.8	39.2	13.5	13.4	6.1
修士	455	30.8	35.8	13.0	14.7	5.7
博士 1 - 3 年	208	22.6	48.6	11.5	12.5	4.8
博士 4 - 6 年	90	24.4	34.4	21.1	8.9	11.1
修士男	256	26.6	31.6	13.7	19.9	8.2
修士女	199	36.2	41.2	12.1	8.0	2.5
博士 1-3 年男	110	18.2	42.7	16.4	16.4	6.4
博士 1-3 年女	98	27.6	55.1	6.1	8.2	3.1
博士 4-6 年男	43	18.6	30.2	23.3	14.0	14.0
博士 4-6 年女	47	29.8	38.3	19.1	4.3	8.5
修士文系	257	34.2	36.6	12.1	12.1	5.1
修士理系	194	26.3	35.1	13.9	18.0	6.7
博士 1-3 年文系	145	20.0	51.0	9.0	14.5	5.5
博士 1-3 年理系	61	27.9	42.6	18.0	8.2	3.3
博士 4-6 年文系	82	23.2	32.9	23.2	9.8	11.0
博士 4-6 年理系	7	42.9	57.1	0.0	0.0	0.0

### 適性

適性に関する悩みは「とても悩んでいる」は 2 割弱とそれほど多くはない。学年が低いほうが悩んでいる割合は高く、「悩んでいない」割合は博士 4-6 年が高い。男女別でみると女性のほうが悩んでいる割合が高く、修士男女で 15 ポイント差、博士でも 10 ポイントの差があった（表 3-12）。

表 3-12 研究生生活における悩み・自分の適性 ( % )

	N	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
全体	749	17.2	32.2	21.8	18.4	10.4
修士	452	19.0	33.2	20.8	18.4	8.6
博士 1 - 3 年	209	15.3	30.6	23.0	18.2	12.9
博士 4 - 6 年	88	12.5	30.7	23.9	19.3	13.6
修士男	254	17.3	28.3	21.3	21.7	11.4
修士女	198	21.2	39.4	20.2	14.1	5.1
博士 1-3 年男	110	12.7	28.2	25.5	17.3	16.4
博士 1-3 年女	99	18.2	33.3	20.2	19.2	9.1
博士 4-6 年男	42	9.5	28.6	31.0	14.3	16.7
博士 4-6 年女	46	15.2	32.6	17.4	23.9	10.9
修士文系	254	20.9	35.4	20.5	15.0	8.3
修士理系	194	16.5	30.4	21.6	22.2	9.3
博士 1-3 年文系	146	14.4	28.8	26.7	16.4	13.7
博士 1-3 年理系	61	18.0	32.8	14.8	23.0	11.5
博士 4-6 年文系	80	13.8	28.8	23.8	20.0	13.8
博士 4-6 年理系	7	0.0	57.1	28.6	14.3	0.0

### 研究上の人間関係

一方で指導教員や研究室内での人間関係に悩んでいるという回答率は低く、指導教員との人間関係については4割近くは「まったく悩んでいない」で、「あまり悩んでいない」をあわせると3分の2は悩みを感じていないと答えた。しかしながら、「修士女」、「修士文系」においては、「指導教員との関係」、「研究室内の人間関係」で「とても悩んでいる」が1割と高くなっている(表 3-13)。(6)の「ジェンダー環境」で紹介するように、教職員、研究室内外の先輩や仲間からの発言に傷ついたり、悩んだりした経験をもつ者が少なからず存在することは留意しておかねばならないだろう。

表 3-13 研究生生活における悩み・指導教員との関係 ( % )

	N	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
全体	753	6.8	15.1	12.9	27.5	37.7
修士	454	7.7	15.0	11.9	29.3	36.1
博士 1 - 3 年	209	5.3	13.9	16.3	23.4	41.1
博士 4 - 6 年	90	5.6	18.9	10.0	27.8	37.8
修士男	255	6.3	12.9	12.2	29.0	39.6
修士女	199	9.5	17.6	11.6	29.6	31.7
博士 1-3 年男	110	3.6	13.6	12.7	25.5	44.5
博士 1-3 年女	99	7.1	14.1	20.2	21.2	37.4
博士 4-6 年男	43	2.3	18.6	11.6	27.9	39.5
博士 4-6 年女	47	8.5	19.1	8.5	27.7	36.2
修士文系	256	9.8	12.9	11.3	26.6	39.5
修士理系	194	4.6	18.0	12.9	32.0	32.5
博士 1-3 年文系	146	4.8	14.4	15.8	24.7	40.4
博士 1-3 年理系	61	6.6	13.1	16.4	19.7	44.3
博士 4-6 年文系	82	6.1	17.1	9.8	28.0	39.0
博士 4-6 年理系	7	0.0	42.9	14.3	28.6	14.3

本調査では「その他の悩み」の具体的記述を依頼した。そのなかから「(1) 研究」に該当するものを以下に引用する。

- 大学院の授業が形骸化している点が不満。研究科全体で院生を育てようとする雰囲気全くない。したがって、教育が研究室内の徒弟制度のような者になってしまっているように思う。指導教員が指導してくれないことに悩んでいる。(修士男)
- 研究をするための環境の悪さ。特に実験室(院生の部屋)の狭さ。(修士女)

## (2) 進路

進路については「経済」と並んで最も多くの大学院生が悩んでいるという結果が得られた。「進路」に関する悩みは、「希望進路(就職)につけるか」、「研究と結婚・育児を含めた将来のライフプラン」に分けられるが、職業キャリアと家族キャリアをどう両立させていくのか、またそれぞれのキャリアについて将来が不透明、不安定なことがその悩みの根本にあるだろう。以下、もう少し詳細にみていく。

### 進路(就職先)

「希望進路(就職)につけるか」について、「とても悩んでいる」は全体では3分の1強、「やや悩んでいる」をあわせると3分の2に及んでいる。学年が上のほうが悩んでいる割合は高く、「博士4-6年」では約5割が「とても悩んでいる」と回答し、「やや悩んでいる」をあわせると8割に達する。性別では「出口」を控えた修士・博士4-6年で男性よりも女性のほうが悩んでおり11-14ポイント高い。博士4-6年女では85%以上が悩みを抱えている。専門では文系のほうが理系よりも悩んでいる割合が高く、修士では20ポイントの差があった(表3-14)。

表3-14 研究生における悩み・進路(就職先) (%)

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
全体	756	34.8	29.9	10.3	12.0	13.0
修士	455	29.9	29.0	9.0	15.4	16.7
博士1-3年	210	38.6	31.9	14.8	8.6	6.2
博士4-6年	91	50.5	29.7	6.6	3.3	9.9
修士男	255	28.2	24.7	11.0	16.1	20.0
修士女	200	32.0	34.5	6.5	14.5	12.5
博士1-3年男	110	43.6	32.7	12.7	3.6	7.3
博士1-3年女	100	33.0	31.0	17.0	14.0	5.0
博士4-6年男	43	48.8	25.6	9.3	2.3	14.0
博士4-6年女	48	52.1	33.3	4.2	4.2	6.3
修士文系	257	38.1	29.2	7.0	12.1	13.6
修士理系	194	19.1	28.4	11.3	20.1	21.1
博士1-3年文系	147	42.2	29.3	16.3	8.8	3.4
博士1-3年理系	61	31.1	37.7	11.5	6.6	13.1
博士4-6年文系	83	51.8	30.1	6.0	3.6	8.4
博士4-6年理系	7	42.9	28.6	0.0	0.0	28.6

- 早稲田学内での就職助手や非常勤講師、そして専任職へというコース)が極めて厳しくなったことで、将来がいつそう不透明になり、不安である。(博士4-6年男)

## ライフプラン

「研究と結婚・育児を含めた将来のライフプラン」は進路（就職先）に次いで悩んでいる院生が多い項目であった。全体では約3割が「とても悩んでいる」と回答し、「やや悩んでいる」とあわせると6割以上が何らかの悩みを抱えている。学年が高いほうが悩みが深刻で、博士4-6年では約4分の3が悩んでいると回答した。また性別では女性のほうがより強く悩んでいる様子がうかがえ、とくに修士・博士4-6年では女性のほうが「悩んでいる」が16ポイント高かった。（表3-15）

表3-15 研究生活における悩み・将来のライフプラン ( % )

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
全体	754	30.4	33.0	11.5	13.0	12.1
修士	455	24.4	33.2	12.7	16.0	13.6
博士1-3年	209	39.7	32.1	9.6	9.1	9.6
博士4-6年	90	38.9	34.4	10.0	6.7	10.0
修士男	255	21.2	29.4	14.5	20.0	14.9
修士女	200	28.5	38.0	10.5	11.0	12.0
博士1-3年男	110	35.5	32.7	10.9	10.0	10.9
博士1-3年女	99	44.4	31.3	8.1	8.1	8.1
博士4-6年男	43	27.9	37.2	14.0	4.7	16.3
博士4-6年女	47	48.9	31.9	6.4	8.5	4.3
修士文系	257	28.8	32.3	12.1	14.4	12.5
修士理系	194	19.1	34.5	13.4	18.0	14.9
博士1-3年文系	146	40.4	30.1	11.6	9.6	8.2
博士1-3年理系	61	37.7	36.1	4.9	8.2	13.1
博士4-6年文系	82	37.8	35.4	9.8	7.3	9.8
博士4-6年理系	7	57.1	28.6	0.0	0.0	14.3

- 一人前の研究者になるための修行期間と出産適齢期が重なること（結婚はいつでもできるのですが）（博士1-3年女）

### (3) 経済

経済的なことで「とても悩んでいる」「やや悩んでいる」のは全体の3分の2にのぼり、進路の問題と並んで深刻な問題であることをうかがわせた。どの学年でも悩んでいる者の割合は高かったが、修士の6割に対して博士4-6年では7割と学年が高いほうが悩みが深刻であった。性別で見ると修士では女性が8ポイント高いが博士では2-3ポイント男性が高い程度であり差はなかった。分野別で見ても2-7ポイントの差で大差はなく、性や専門に関わらず共通して経済的な悩みが大きいことがうかがわれる（表3-16）

表 3-16 研究生活における悩み・経済的なこと ( % )

	N	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
全体	761	24.6	39.7	12.0	16.6	7.2
修士	458	22.5	37.3	14.2	18.3	7.6
博士 1 - 3 年	212	26.4	44.8	6.6	16.0	6.1
博士 4 - 6 年	91	30.8	39.6	13.2	8.8	7.7
修士男	257	23.3	33.1	15.6	21.4	6.6
修士女	201	21.4	42.8	12.4	14.4	9.0
博士 1-3 年男	112	28.6	43.8	5.4	13.4	8.9
博士 1-3 年女	100	24.0	46.0	8.0	19.0	3.0
博士 4-6 年男	43	27.9	44.2	11.6	7.0	9.3
博士 4-6 年女	48	33.3	35.4	14.6	10.4	6.3
修士文系	259	27.0	35.5	13.5	15.8	8.1
修士理系	194	16.5	39.2	15.5	22.2	6.7
博士 1-3 年文系	148	29.1	43.9	6.1	17.6	3.4
博士 1-3 年理系	62	21.0	48.4	6.5	11.3	12.9
博士 4-6 年文系	83	28.9	41.0	13.3	9.6	7.2
博士 4-6 年理系	7	57.1	14.3	14.3	0.0	14.3

#### (4) 健康

「健康のこと」について「とても悩んでいる」割合は 1 割に満たないものの、「やや悩んでいる」までも含めると約 3 分の 1 に上り、それほど深刻ではないが、気にしている事柄だといえるだろう。性別で見ると、どの学年でも男性よりも女性のほうが 1-7 ポイントとやや高くなっており、4 割が何らかの悩みを抱えている。N が小さいので参考程度だが、「博士 4-6 年理系」では「とても悩んでいる」が 33% と他に比べ突出して高く、「悩んでいない」は 0% となっている (表 3-17)。

表 3-17 研究生活における悩み・健康面 ( % )

	N	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
全体	755	6.5	31.0	15.1	31.9	15.5
修士	455	6.4	30.8	13.4	32.1	17.4
博士 1 - 3 年	210	5.2	31.4	17.6	34.8	11.0
博士 4 - 6 年	90	10.0	31.1	17.8	24.4	16.7
修士男	255	6.3	29.0	15.3	32.9	16.5
修士女	200	6.5	33.0	11.0	31.0	18.5
博士 1-3 年男	111	7.2	26.1	18.0	36.9	11.7
博士 1-3 年女	99	3.0	37.4	17.2	32.3	10.1
博士 4-6 年男	42	14.3	26.2	14.3	26.2	19.0
博士 4-6 年女	48	6.3	35.4	20.8	22.9	14.6
修士文系	256	6.6	28.9	12.1	31.6	20.7
修士理系	194	6.2	33.5	14.4	33.0	12.9
博士 1-3 年文系	146	4.8	30.1	17.8	37.7	9.6
博士 1-3 年理系	62	6.5	33.9	17.7	27.4	14.5
博士 4-6 年文系	83	8.4	32.5	15.7	25.3	18.1
博士 4-6 年理系	6	33.3	16.7	50.0	0.0	0.0

#### (5) 人間関係

「指導教員・研究室以外の人間関係」、「家族の理解」といった人間関係に関する項目に

についてはどれも他項目と比べて悩んでいる割合が低く、比較的、良好な人間関係を築いていることがうかがえる。

## (6) 悩みと生活の評価

ここで大学院生活の悩み(Q5)と研究生活の満足度(Q6)の相関関係をみておきたい。表 3-18 のように、研究関連の諸々の悩みと個々の研究生活の評価は負の相関関係があり、研究生活全般にも関連があることがわかる。細かくみていくと生活評価に最も関連があるのは「研究の進め方」である。特に「研究生活全般の満足」にはかなり強い関連があり相関係数は-0.42 である。また、「研究における自分の適性」も「研究・指導体制」以外のすべての評価項目と関連がある。「適性」も「研究生活全般の満足」にはかなり強い負の関連がある。「指導教員との関係」の悩みも「将来の目標が明確」以外のすべての項目の満足度と関連がある。とりわけ「研究指導体制」の満足度とはかなり強い関連がある。「研究室内の人間関係」の悩みも「研究指導体制」と「研究生活全般の満足」にやや関連がある。つまり、研究上の悩みが大きいほど研究生活の評価は低くなる傾向があるといえる。

これとは逆に進路の悩みは個々の生活評価とはそれほど関連を持たず、生活全般の満足に弱い負の相関関係があることがわかる。「将来のライフプラン」は研究生活の評価とはほとんど関連を持たないが、「希望進路」の悩みは「能力発揮」「将来の目標」「研究生活全般」に関連があり、「進路(就職先)」の悩みも「将来の目標」と「研究生活全般」の満足度と関連を持っている。一方、「経済」「健康」「人間関係」の悩みは個々の生活評価とは関連がないといえる。とりわけ、経済的な悩みは大学院生活においては大きな悩みであったが、これと研究生活それ自体の評価、生活全般の満足度とは独立したものであることがうかがわれる。

表 3-18 悩みと研究生活の満足度の相関係数

		研究に 意欲的	研究・指導 体制に満足	研究で 能力発揮	将来の 目標が明確	研究生活 全般の満足
研究	研究の進め方	-0.2769	-0.3065	-0.3691	-0.2361	<b>-0.4167</b>
	自分の適性	-0.3104	-0.1878	-0.3917	-0.3480	<b>-0.4337</b>
	研究室内の人間関係	-0.1736	-0.2143	-0.1435	-0.1059	-0.3142
	指導教員との関係	-0.2519	<b>-0.4857</b>	-0.2525	-0.163	-0.3917
進路	進路(就職先)	-0.0407	-0.1119	-0.1778	-0.2003	-0.2493
	希望進路	-0.1444	-0.1504	-0.2083	-0.3682	-0.2909
	将来のライフプラン	0.0271	-0.0696	-0.062	-0.1333	-0.1328
経済	経済的なこと	0.0648	-0.0783	-0.0435	-0.0618	-0.0991
健康	健康面	-0.0661	-0.109	-0.1506	-0.1116	-0.2146
人間関係	研究室以外の人間関係	-0.1246	-0.0953	-0.1108	-0.1129	-0.2137
	家族の理解	-0.0685	-0.0855	-0.0743	-0.1122	-0.2002

網掛けは統計的に有意な係数

## (6) ジェンダー環境

### 研究生活でのジェンダー環境

「指導教員の意識・態度が男子学生と女子学生とで(性別によって)異なると感じた時」(Q12)は、「ある」が全体で27%であった(表 3-19)。「ある」は学年が高いほど高くなり、博士 4-6 年と修士とでは 14 ポイントの差があった。また、性別でみると「ある」は修士で

は男性が若干高いが、学年が高いほど女性が高く、博士 4-6 年では男女で 16 ポイントの差があった。

表 3-19 指導教員の意識や態度が性別により異なる (%)

	N	ある	ない
全体	757	26.9	73.1
修士	454	24.9	75.1
博士 1 - 3 年	212	26.4	73.6
博士 4 - 6 年	91	38.5	61.5
修士男	255	25.5	74.5
修士女	199	24.1	75.9
博士 1-3 年男	112	25.0	75.0
博士 1-3 年女	100	28.0	72.0
博士 4-6 年男	43	30.2	69.8
博士 4-6 年女	48	45.8	54.2
修士文系	257	19.8	80.2
修士理系	193	31.1	68.9
博士 1-3 年文系	148	27.7	72.3
博士 1-3 年理系	61	23.0	77.0
博士 4-6 年文系	83	38.6	61.4
博士 4-6 年理系	7	42.9	57.1

「ある」とした者に具体的な場面をあげてもらったところ、次のような回答がみられた。

- ゼミにおいて、女子学生の研究発表に対する男性教員の評価があまり(厳しい指導をしない)ように思った。(博士女)
- 男性教員の場合、男子学生とは食事などをするが、女子学生とは1対1になることを避けるので男子学生より教員と接する機会が少ないと感じる。(博士女)
- 女性は若くて可愛ければいいのだという個人的な感情を表に出すことがある。指導教授が男性な以上、多少は仕方ないことだとは思いますが、男子学生への態度と明らかに違う。同じことをしても男子学生の評価が高い。(博士女)
- 以下のような発言。「結婚した者は就職したと見なす」、「研究者になりたいのか、それとも研究者の妻になりたいのか」。私の場合、「それは性差別ですよ」といなせるようなフランクな関係を築いてはいるので、それが抑圧というほどにまでは感じないが、「そういうものなのか」と驚き、悲しかった。(博士女)
- 指導教員が異性だと腹を割って話せる度合いがやはり違う。特に自分はお酒が呑めないので、学会後の懇親会などの酒の席ではそれをかなり感じる。(博士女)
- 合宿や忘年会などの行事でお茶汲みや食事の準備、片付けなどを女子学生にまかせていると思われる。(修士女)
- 相談ごとがあるときに、研究室のドアを開けておかなければならない時。(修士女)
- 懇親会(お酒の入った席)の時、教員から「女の子は結婚してしまえばいい」と言われ、女性の研究者は例え研究が良くても認められにくいのではないかと感じました。(修士女)
- 女子には博士課程への進学を全く勧めない。(博士男)
- ハラスメントに敏感な教員は、女子学生とのコミュニケーションが「ぎこちない」。鈍感な教員は、「挑発的な」態度。(博士男)

- 学生に接するとき女性に対しては優しくし、男性学生に対しては厳しい。(博士男)
- 女子には徹夜実験をさせない点。(修士男)
- ゼミ等での教授の発言。男性には怒るところを、女性には妥協する。(修士男)

次に、「指導教員の意識・態度以外の面で、大学院生活において、性別によって、周囲の異性と違う扱いや不利益をうけたと感じた時」(Q13)は、全体で14%が「ある」と回答した。男女別にみると女性で学年が高いほど「ある」が高くなっており、修士では男性と9ポイント差であるのに対して博士1-3年では10ポイント、博士4-6年では28ポイントも差があった(表3-20)。

表3-20 大学院生活での性的差別体験 ( % )

	N	ある	ない
全体	758	13.7	86.3
修士	457	12.5	87.5
博士1-3年	210	11.9	88.1
博士4-6年	91	24.2	75.8
修士男	256	8.6	91.4
修士女	201	17.4	82.6
博士1-3年男	111	7.2	92.8
博士1-3年女	99	17.2	82.8
博士4-6年男	43	9.3	90.7
博士4-6年女	48	37.5	62.5
修士文系	259	11.2	88.8
修士理系	194	13.4	86.6
博士1-3年文系	148	13.5	86.5
博士1-3年理系	60	6.7	93.3
博士4-6年文系	83	24.1	75.9
博士4-6年理系	7	28.6	71.4

「ある」とした者に具体的な場面をあげてもらったところ、とくに女性からは侮蔑的な態度や発言、学会等での性別役割分業、女子学生の軽視といった場面が挙げられた。以下のコメントは象徴的である。男子学生からは、男性だからという理由で体力仕事や徹夜での実験を要求されるなど負担が女性より大きいこと、女性優遇への不満が挙げられた。

- 結婚後、学内のある教授から、「結婚すると、(養ってもらえるから)(卒業後)就職が無くても大丈夫だね」という発言があった。私はたしかに女性で、配偶者もいるが、大学院には趣味や教養のために進学したのではない。男性なら就職が必要で、女性、それも、結婚した女性は就職する必要がない、と断ずるその発言に、深く傷ついた。同時に、「教授からそんな発言が当然のようにある、ということは、今後就職を真剣に目指す上で、女性であり、かつ既婚であることが不利に働くのでは」という危惧を抱き、強いストレスを感じている。(博士女)
- 女は就職に困ったら結婚すりゃいいだろうというような言動が、教員のみならず学生の間にも見られることがある。(博士女)
- 女性より男性に早く就職させようという印象を受ける。(博士女)
- ドクターに上がってから結婚し、学内紀要論文等の旧姓使用を申し出ましたが、認められませんでした。その後認められたようですが、すでに私は変更して当たり前実績を積み重ねた後で、大変に理

不尽な思いをしました。はっきり申し上げて、本学は男女平等の理念が乏しいと感じます。(博士女)

- グラビアアイドルの写真をPCの背景にしているのを見たとき、正直に言えば不快。(修士女)
- 学会で受賞できなかつたとき、『女なのに賞が取れないってことは、研究能力が相当低いか、または女として相当魅力ないんだろうなあ』と、同期・先輩(男)に冗談で言われたときは、非常に不快に感じた。(修士女)
- 力仕事を無条件でやれといわれたとき、体力のいる仕事を無条件で任されたとき。(博士男)
- 発表等の準備期間が少ないとき、男性なら無理をできるだろうと割り当てられる。(修士男)
- 先輩からの仕事の負担度合い。男：女=9:1、休日などでも呼び出す。(修士男)
- 女性の数が少ないため、周囲の接し方は、男の場合よりソフト。但し勉強面でもその傾向が見られるのは、本人のためになるか、分からないと思う。(修士男)

### 学内環境(設備)

次に「学内の環境(設備等)で女性にとって使いづらい(だろう)と感じる」(Q14)は、27%が「ある」と回答した。自由回答から具体例を整理すると、a)トイレの整備(118件)、b)女性向け施設(宿泊・休憩施設、シャワールーム等)(8件)、c)育児を考慮した設備(8件)、d)防犯・安全な環境(11件)等であった。トイレの質と量の充実を求めるものが圧倒的に多く、また、118件中55件は男性による回答であった。当事者のみならず男性からみても明らかな問題であることがわかる。

### 女子大学院生に固有な悩み

本調査では、女性の大学院生に「研究をする上での悩み」について質問した。悩みは次の3つに分類することができる。「研究」(「体力的にきつい時がある」「困ったときに気軽に相談できる同性が身近にいない」「研究や実験などの拘束時間が長い」「研究室の雰囲気は男性中心でなじめないことがある」)、「進路」(「女性の方が就職において不利に感じることもある」)、「人間関係」(「研究生活について家族や周囲の理解が少ない」)。悩んでいる割合はどの項目も半数以下であったが、なかでは「就職」(「とても悩んでいる」と「やや悩んでいる」をあわせて4割)と「体力」(半数弱)が高い割合を示した(表3-21)。

表3-21 研究上困っていること(女子のみ) (%)

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
体力的にきつい	347	8.9	37.8	15.6	26.5	11.2
同性の相談相手がない	345	9.9	21.2	13.9	27.2	27.8
全体の拘束時間が長い	345	5.8	15.7	15.7	37.4	25.5
研究室の雰囲気	346	4.3	9.8	12.7	25.1	48.0
女性が就職に不利	347	11.5	27.7	26.8	21.3	12.7
家族や周囲の理解	344	2.6	9.9	11.0	31.4	45.1

#### a) 研究

研究面での悩みでは「体力的にきついことがある」が最も高く、半数弱が悩みを抱えている。学年、専門別の差もほとんどなく、共通する悩みといえるだろう(表3-22)。「困ったときに気軽に相談できる同性が身近にいない」は、全体では半数以上が「悩んでいない」

と回答したが、理系では「悩んでいる」割合が半数を超え、修士・博士ともに文系と26-28ポイントの差があった(表3-23)。「博士4-6年理系」では3分の1が「とても悩んでいる」とし、「やや悩んでいる」をあわせると3分の2にものぼる。これは非常に深刻な問題であろう。「研究や実験などの拘束時間が長い」は過半数が「悩んでいない」とした。「研究室の雰囲気男性中心でなじめないことがある」も4分の3は「悩んでいない」としたが、「悩んでいる」割合は理系のほうが16-18ポイント高かった。

表3-22 体力的にきつい ( % )

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
全体	347	8.9	37.8	15.6	26.5	11.2
修士	199	9.5	36.2	17.6	26.1	10.6
博士1-3年	100	8.0	39.0	11.0	31.0	11.0
博士4-6年	48	8.3	41.7	16.7	18.8	14.6
修士文系	144	9.7	36.1	17.4	26.4	10.4
修士理系	55	9.1	36.4	18.2	25.5	10.9
博士文系	128	7.8	39.1	11.7	28.1	13.3
博士理系	18	11.1	38.9	22.2	22.2	5.6

表3-23 同性の相談相手がいない ( % )

	N	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
全体	345	9.9	21.2	13.9	27.2	27.8
修士	198	9.1	20.7	12.6	27.3	30.3
博士1-3年	100	13.0	17.0	14.0	27.0	29.0
博士4-6年	47	6.4	31.9	19.1	27.7	14.9
修士文系	144	4.2	18.1	13.9	29.9	34.0
修士理系	54	22.2	27.8	9.3	20.4	20.4
博士文系	127	8.7	20.5	16.5	28.3	26.0
博士理系	18	22.2	33.3	5.6	22.2	16.7

研究面では女子大学院生全体に共通して半数弱が体力的な悩みを抱えている。また、とりわけ理系では過半数に身近に悩みを相談する同性がいないという悩みがあった。

#### b) 進路

表3-24のように「女性の方が就職において不利に感じることもある」という悩みも全体の中では多く、4割が「悩んでいる」と回答した。修士では理系のほうが悩んでおり(8ポイント差)、博士では逆に文系のほうが悩んでいた(7ポイント差)。

表 3-24 女性が就職に不利 ( % )

	N	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
全体	347	11.5	27.7	26.8	21.3	12.7
修士	199	11.6	28.1	25.1	22.6	12.6
博士 1 - 3 年	100	11.0	20.0	32.0	23.0	14.0
博士 4 - 6 年	48	12.5	41.7	22.9	12.5	10.4
修士文系	144	11.1	26.4	25.0	22.9	14.6
修士理系	55	12.7	32.7	25.5	21.8	7.3
博士文系	128	13.3	26.6	26.6	21.1	12.5
博士理系	18	0.0	33.3	44.4	5.6	16.7

c) 人間関係

「家族や周囲の理解が少ない」ことで悩んでいる人は、学年・専門を問わず、その割合は低かった。「その他」は数としては少数であったが、内容として最も多かったのは、「セクシュアル・ハラスメント」、「女性の研究者仲間が少ないこと」、「研究と家庭・育児との両立」等に関する事柄であった。

3. 相談する相手

表 3-25 のように、「研究生活で困ったり悩んだりしたときに頼りにする」は、最も頼りにするのが「研究室の仲間・先輩」で、「非常に頼りにしている」「やや頼りにしている」をあわせると 7 割強に達した。次に高かったのは「指導教員」で 3 分の 2 であった。次いで「研究室以外で同領域を研究する仲間・先輩・教員」で 4 割強だった。「研究室の仲間・先輩」を頼りにするのは学年が低いほうが高く、修士と博士 4-6 年では 16 ポイントの差があった。性別でみるとどの学年でも男性のほうが研究室の仲間や先輩を頼りにしている割合が高かった (表 3-26)。

表 3-25 困ったときの相談相手 ( % )

	N	非常に頼りに している	やや頼りに している	どちらとも いえない	あまり頼りに していない	全く頼りに していない	該当する者は いない
研究室の仲間・先輩	753	29.1	42.4	10.9	9.4	5.7	2.5
指導教員	741	28.3	36.8	13.1	15.0	5.9	0.8
研究室以外の仲間・先輩	748	22.6	36.0	14.4	11.4	7.2	8.4
同領域以外の友人	752	17.2	34.2	20.1	16.2	8.6	3.7
家族 (親・兄弟)	755	15.5	23.6	13.6	24.4	20.0	2.9
家族 (配偶者)	744	8.6	7.3	7.5	6.6	6.5	63.6

表 3-26 困ったときの相談相手 研究室の仲間・先輩 ( % )

	N	非常に頼りに している	やや頼りに している	どちらとも いえない	あまり頼りに していない	全く頼りに していない	該当する者は いない
全体	753	29.1	42.4	10.9	9.4	5.7	2.5
修士	455	34.7	40.7	9.5	7.5	5.7	2.0
博士 1 - 3 年	209	20.6	47.4	10.5	12.9	5.3	3.3
博士 4 - 6 年	89	20.2	39.3	19.1	11.2	6.7	3.4
修士男	256	34.4	43.4	9.4	6.3	5.5	1.2
修士女	199	35.2	37.2	9.5	9.0	6.0	3.0
博士 1-3 年男	110	19.1	51.8	9.1	12.7	3.6	3.6
博士 1-3 年女	99	22.2	42.4	12.1	13.1	7.1	3.0
博士 4-6 年男	42	19.0	47.6	16.7	2.4	9.5	4.8
博士 4-6 年女	47	21.3	31.9	21.3	19.1	4.3	2.1
修士文系	258	30.6	40.3	10.9	9.3	6.6	2.3
修士理系	193	40.9	40.4	7.8	5.2	4.7	1.0
博士 1-3 年文系	146	22.6	47.9	9.6	11.0	5.5	3.4
博士 1-3 年理系	61	16.4	45.9	13.1	18.0	3.3	3.3
博士 4-6 年文系	81	22.2	39.5	14.8	12.3	7.4	3.7
博士 4-6 年理系	7	0.0	42.9	57.1	0.0	0.0	0.0

#### 4. 支援

ここでは相談室の利用経験 ( Q8 )、今後の相談室利用の希望 ( Q9 ) および大学による支援の有効性 ( Q11 ) について検討する。

##### (1) 相談室の利用経験

学内相談室を利用した経験の有無を項目ごとに尋ねた。「3-2 大学院生活で困っていること」で検討した悩みの 5 分類 ( 研究、進路、経済、健康、人間関係 ) に対応させて相談室利用経験を全体でみると、どの項目でも利用率はきわめて低かった ( 表 3-27 )。

表 3-27 学内相談室の利用経験 ( % )

	N	利用なし	利用・満足	利用・不満
研究の悩み全体	751	97.7	0.7	1.6
進路	742	91.4	4.6	4.0
ライフプラン	751	98.1	0.4	1.5
経済面	753	98.3	0.5	1.2
健康面	751	89.3	8.1	2.5
人間関係	747	95.4	2.1	2.4

そのなかでは進路と健康に関する相談室の利用が 1 割あった。進路の悩みで学内相談室を利用したのは全体の約 1 割で満足・不満が相半ばした。学年別・男女別にみて利用の割合が高かったのは修士女性で、約 2 割が利用しており、満足したものが 11%、不満だったものが 8%と、やや満足したものが多かった。健康面の悩みで学内相談室を利用したのは全体の約 1 割で満足 8%が不満 3% を上回った。学年別・男女別にみて利用の割合が高かったのは修士女性で、約 2 割が利用しており、満足したものが 14%、不満だったものが 6%と、満足度は高かった。博士 1 - 3 年女性は 7 人に 1 人が利用しており満足と答えたものが大半であった。4 - 6 年女性は約 1 割が利用しており利用者全員が満足したと回答した。

##### (2) 今後の相談室利用希望

相談室があれば利用する希望の有無を項目ごとに尋ねた。全体で見ると「人間関係」以外の項目では半数以上が「利用したい」と回答し、最も多い「進路」に関する相談室利用の希望は7割を超えた(表3-28)。

表3-28 今後の相談室利用希望 ( % )

	N	利用したい	利用したくない
進路	745	71.4	28.6
健康	741	64.5	35.5
経済	745	61.5	38.5
ライフプラン	742	58.4	41.6
研究	732	52.2	47.8
人間関係	739	47.5	52.5

- 進路の悩み

進路上の悩みで相談室を利用したいと答えたのは全体では7割を超えた。学年が低いほうが「利用したい」割合が高く、修士と博士4-6年では8ポイントの差があった。どの学年でも女性のニーズが男性よりも6-8ポイント高かった。

- 健康面での悩み

健康面の悩みで相談室を利用したいと回答したのは全体では3分の2であった。修士・博士1-3年では女性のほうが「利用したい」が高く、男性より13-10ポイント高かった。中でも博士1-3年女は4人に3人が利用を希望していた。

- 経済面での悩み

経済的な悩みで相談室を利用したいと回答したのは全体の6割であった。修士・博士1-3年では女性のほうが「利用したい」が高く7割が利用を希望しており、男性より8-11ポイント高かった。

- ライフプラン

ライフプランに関する相談室利用希望は全体で6割弱であった。すべての項目の中で最も男女差が大きく、修士女(70%)では20ポイント、博士1-3年女(70%)では17ポイント、博士4-6年女(56%)では10ポイント女性のほうが高く、女子の大学院生にライフプランに関する相談室のニーズが高いことがうかがえる。

- 研究上の悩み

研究上の悩みで相談室を利用したい希望者は全体の約半数であった。全体で見ると学年が低いほうがニーズが高く、修士(57%)と博士4-6年(33%)では24ポイントの差があった。学年ごとに男女を比較すると学年が高いほうが男性のニーズが低く、博士4-6年男(22%)では女性より21ポイント低かった。

- 人間関係の悩み

人間関係の悩みで相談室を利用したいと回答したのは全体では半数以下であった。とりわけ博士4-6年では3分の2が「利用したくない」と回答した。また、学年をつうじて性別で見ると、どの項目でも10ポイント前後女性のほうが「利用したい」が高く、とりわけ「ライフプラン」は18ポイントの差があった(表3-29)。

表3-29 性別と今後の相談室利用 ( % )

		N	利用したい	利用したくない
進路	男性	403	67.0	33.0
	女性	342	76.6	23.4
健康	男性	401	60.1	39.9
	女性	340	69.7	30.3
経済	男性	404	58.2	41.8
	女性	341	65.4	34.6
ライフプラン	男性	401	50.1	49.9
	女性	341	68.0	32.0
研究	男性	398	48.0	52.0
	女性	334	57.2	42.8
人間関係	男性	401	42.9	57.1
	女性	338	53.0	47.0

相談室の利用希望回答からみると、最も必要とされているのは進路に関する相談室で、全体の7割以上が利用したいと答えていた。続いて健康面での相談室、経済面での相談室が利用希望6割台であった。逆に人間関係の悩みの相談室は利用希望が低く全体の半数以下であった。また、どの悩みも男性と比べて女性のほうがニーズが高く、博士4-6年でニーズが低いことがわかった。

選択肢で挙げられた項目以外で今後悩みを生じた場合に相談したい内容としては、「教授によるセクハラ」「出産に関すること」などが挙げられた。

また、「相談室を利用しない理由」の自由回答を整理すると以下の5項目にまとめられる。

- a) 研究生活で発生してくるいろいろな問題は、相談室で相談することによって解決できる問題ではないと考える。
- b) 研究や就職の問題に特化すべき。
- c) 相談室の体制を知らないの、どのようなサポートがえられるのかわからない。
- d) プライバシーに関することの相談はしにくく、個人情報の流出も不安だから。
- e) 現在の相談室の対象が学部生に限定されていると感じるため。

そのほかに、「大学が何でも面倒をみようとする傾向（特に心理面）に関しては個人的に疑問を感じています」という声もみられた。悩みの相談窓口として大学の守備範囲を考慮する必要があるだろう。

### (3) 大学による支援の有効性

大学による支援の有効性について同じく項目ごとに質問した。表3-30のように「経済面（奨学金の充実等）の支援」が群を抜いて支援が望まれていて、「とても有効」「やや有効」をあわせて94%にのぼった。「健康面（健康診断・相談窓口等）の支援」「進路・就職相談窓口」がそれぞれ8割前後、「研究支援のためのスキルアップ講座（英語・パソコン等）」が75%でそれにと続いた。「進学・就職支援のための講座（諸分野で活躍するOB/OGの体験談等）」「先輩から研究についての具体的な助言をもらえる相談制度」も7割、最も少ない「将来への不安等悩みに関するカウンセリング窓口」も6割は「有効」と回答し、大学による支援への期待の大きさをうかがわせた。

表3-30 大学による支援の有効性

(%)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
経済面	759	80.2	14.1	3.2	1.3	1.2
進路・就職	754	53.6	25.3	14.3	4.2	2.5
健康面	755	50.1	33.1	12.2	3.4	1.2
スキルアップ講座	756	42.5	32.7	13.8	7.7	3.4
進学・就職支援講座	753	39.0	28.2	19.0	8.8	5.0
先輩による助言	756	36.8	30.7	19.2	9.1	4.2
カウンセリング	754	28.5	31.0	24.7	11.3	4.5

- 経済面での支援

経済面での支援について「とても有効」は全体では 8 割を超え、「やや有効」とあわせると 94%に達した。どの学年でも高い割合で有効視する回答が多かったが、とりわけ博士課程 1 - 3 年ではほぼ 9 割が「とても有効」と回答した。自由回答では「研究費獲得のためのセミナー。学生の間にもらえる研究費の充実化」(博士 1-3 年女)、「研究補助金」(博士 1-3 年女)など、研究資金の支援も訴えられた。

- 進路・就職の支援

進路・就職については全体では「とても有効」が半数を超え、「やや有効」とあわせると約 8 割に上った。どの学年でも「有効」は女性が 7-2 ポイントとやや高かった。

- 健康面での支援

健康面での支援を「とても有効」と回答したのは全体では半数、「やや有効」とあわせると 8 割以上が有効だと回答した。

- スキルアップ講座

スキルアップ講座については全体では「とても有効」が 43%、「やや有効」とあわせると 4 人に 3 人は有効だと回答した。性別でみると「修士女」と「博士 1-3 年女」は「とても有効」が半数を超え、「やや有効」とあわせると 8 割前後に上り、同学年の男性よりも 15-13 ポイント高かった。

- 進学就職支援講座

進学就職支援講座については全体では 4 割が「とても有効」と答え、「やや有効」とあわせると 3 人に 2 人は有効だと回答した。学年別にみると修士では約 7 割、博士 1 - 3 年では 6 割台、博士 4 - 6 年では 5 割と学年が低いほうが「有効」が高かった。とりわけ博士 4 - 6 年では「まったく有効でない」と「あまり有効でない」をあわせると 4 人に 1 人は有効でないという意見であった。

- 先輩による助言

先輩による助言については全体では「とても有効」と答えたのが 3 分の 1 強、「やや有効」とあわせて 3 分の 2 が有効だと回答した。学年別にみると修士課程では 7 割を超えていたのに対して博士 1-3 年では 6 割台、博士 4-6 年では 5 割台と学年が低いほうが有効視していた。

- カウンセリング

将来への不安等悩みのカウンセリングについては、全体では「とても有効」は 3 割未満で「やや有効」とあわせても 6 割弱であった。

大学による支援の有効性からみると、最も期待が寄せられているのは経済面での支援で、回答者の95%は有効だと回答し、とりわけ80%は「とても有効」と回答していた。次に高かったのは進路・就職面、健康面での支援でそれぞれ8割が有効だと回答した。「スキルアップ講座」は修士と博士1-3年の女性に期待が大きく、それぞれ8割が「有効」と回答し、男性よりも15-13ポイント高かった。「進学就職支援講座」や「先輩による助言」は学年が低いグループでの期待が高かった。

「その他に必要な支援」について自由回答を整理すると以下の5点になるだろう。

- a) 研究環境の整備( 院生用の研究室・院生用のスペースの充実・図書館の活用・パソコン等の設備の充実)
  - 院生用の研究施設を充実させること( 文研にはラウンジがひとつあるだけで、個々人には小さなロッカーしかない。学費や他大学の状況を考えると不満が残る) 専修ごとに院生が集える研究室が必要。現況「専修室」は教員の会議・学部生のゼミ室の役割しかもっていない。( 博士4-6年男)
- b) 研究者養成( 指導体制・研究費獲得・若手研究者の研究機会の提供・教育者としてのティーチングスキル養成)
- c) 博士課程の就職問題・院生の専門性を生かしたアルバイトの紹介、斡旋
- d) 出産・育児と研究の両立支援
  - 出産・育児を理由とする休学について、休学可能な年数を延ばしてほしい。せめて通算4年くらいには延ばしてもらえないと、大変困る。特に、出産に伴う休学の場合、学費( 現在年額20万程度) を5万程度に下げて頂けると、出産が可能だが、現状では諦めざるを得ない。( 博士1-3年女)
- e) 他研究科、他分野の研究者との交流、情報交換

## 4章 男女共同参画

本章では、男女共同参画の実現に向け、大学院生の現状認識と必要な体制および支援について次の6項目の調査結果から検討する。

早稲田大学における女性教員の比率に関する意見

目標値を定めた女性研究者比率アップの支援

大学での研究職への支援

必要としている支援

男女共同参画推進室設置

女性向け支援相談窓口の設置

### 1. 女性教員比率に対する評価

現在、早稲田大学の女性教員（専任教員・助手）の比率は13.8%であり、理工系においては7.8%という割合となっている。こうした現状を提示したうえで、どのように評価するかをたずねたところ、「かなり問題だ」が18%、「やや問題だ」をあわせると44%、「どちらでもない」が30%、「全く問題ではない」は9%、「それほど問題ではない」をあわせると26%であった（表4-1）。

性別でみると、男性よりも女性が問題視する傾向が強い。女性では学年が高いほど「かなり問題」「やや問題」のポイントが高くなっており、博士1-3年では3人に1人、博士4-6年では半数が問題視している。しかし男性では学年が低いほどポイントが低く、学年ごとの男女差をみると修士で28ポイント、博士1-3年で31ポイント、博士4-6年では46ポイントと大きな差異がみられた。

表4-1 早稲田大学の女性教員比率について

(%)

	N	かなり問題だ	やや問題だ	どちらともいえない	それほど問題ではない	全く問題ではない
全体	757	18.2	25.8	30.3	16.6	9.1
修士	455	14.5	27.3	30.3	18.7	9.2
博士1-3年	213	19.2	26.3	27.2	16.4	10.8
博士4-6年	89	34.8	16.9	37.1	6.7	4.5
修士男	255	8.6	20.8	36.9	20.8	12.9
修士女	200	22.0	35.5	22.0	16.0	4.5
博士1-3年男	113	8.0	23.0	29.2	21.2	18.6
博士1-3年女	100	32.0	30.0	25.0	11.0	2.0
博士4-6年男	41	17.1	9.8	51.2	12.2	9.8
博士4-6年女	48	50.0	22.9	25.0	2.1	0.0

評価の理由を自由回答でたずねたところ、次のような結果であった。理由の分類とともに実際の記述内容を紹介する。

#### (1) 「かなり問題だ」「やや問題だ」と回答した理由（図4-1：N=268）

**ジェンダー的な観点から問題：**女性が少なすぎるのは、性別を理由に何らかの差別構造や女性研究者になる障害があるという点で問題だとした回答が最も多く、122件あった。

- 本来、男性、女性で学問を学ぶ上での差異はないはずで、低い割合であることは問題であると考えられる。(修士男)
- 残って研究をしている人は、家族の協力があつたり、たまたま研究を続けることができる人であり、またただ結婚する機会がなかっただけかもしれない。研究を続けたくても続けることができなかった女性がどれだけいるか知らないのでもなんとも言えないところがある。女性にとって研究を続けにくい制度ならば改善しないといけないと思う。(修士男)
- 女性教員の数が増えない限り、後進の女性研究者の数も増えないであろうから。大学・大学院の閉鎖性・自足性は女性研究者の少なさにも原因があると考えられるから。(博士男)
- 優秀な女性研究者はたくさんいるが、彼らが活躍の場を十分に与えられていないと感じる。また、女性を増やすことによって、男性教員が持っていない新しい見地を指導できると考えており、彼らを接する機会が与えられていない学生に不利益が生じると考えられるから。(修士女)

**教育上の観点から問題：**「院生（学生）数と比して女性教員数が少なすぎる」、「女子学生特有の悩みやニーズに対応できない」、「後進の女性研究者に対するロールモデルの不在」といったような学生への教育、研究者養成という観点から問題だとする意見が 73 件あった。

- 大学教員はモデルロールとしての役割も果たす。学部時代に男性教員のみならず女性教員の下で教育を受けることの意義は、性別に関わりなく学生にとって大きい。(博士・女)
- 女性の悩みは女性にわかってほしいと思う。女性のライフコースのモデルとなるような教員がいてくれたらと思う。研究一辺倒の教員は別にいい。むしろ、研究も一流で、女性としても幸せをつかんでいる（結婚・出産もしている）という方を積極的に採用していただきたい。身近に素敵な先輩や尊敬する教員がいないと、ああ、結局研究しても研究に一生を捧げるしかないのかと悲観してしまう。(修士女)
- 活躍する女性がいれば研究者としての将来にもっと希望もてる。しかし、現状は上の人みんな男ばかりで、女性というだけで蔑視され、女性特有の悩みも誰も理解してくれない。相談できないことも多い。(修士女)
- 女性教員をもっと多く採用することによって、女性からの視点で授業ができたり、女子生徒が増えたりするなどして、よりアカデミックな講義体制が取れるのでは。(博士女)
- 女性が少ないのは価値観の多様化を阻む。(修士男)
- 特に女子学生にとって、指導教官と美味しく行かなかったときの逃げ道が塞がれる恐れがあるのではないのでしょうか。逆に、男子学生として自分はそのようなときに「飲みに行く」類の逃げ道があるのがありがたいので。(博士男)

**組織上の観点から問題：**「男性教員に偏ることで組織や制度にも偏りが生じる」、「女性が研究しやすい環境づくりには女性教員も必要である」、また「機会の平等、公正な雇用への疑問を感じる」という理由が 48 件であった。

- 女性のためのサービスが学内政策に反映されない。(博士男)
- 大学院に女性が残っている割合がこれだけ高いのに（特に文系）1 割前後しか大学院に研究職として残れないのは性差別があると思えない。(博士女)

- 女性が研究しやすい環境をつくるためには、女性の教員が必要であると考えから。そうでなければ、知らず知らずのうちに男性中心な環境になってしまって、女性の意見が男性の意見と同じくらい尊重されないかもしれないから。(修士女)
- 国際的に見て、早稲田大学の女性教員の割合は低いと思う。ジェンダー関連の講座の数は少ないし、ジェンダー・スタディーズの研究者の数も少ない。こういう大学に、優秀な女性研究者が集まるのか疑問だし、長期的に見てこの趨勢は望ましくないと思う。(修士男)

**社会における大学の位置・役割という観点から問題：**大学は社会的にも男女共同参画を推進し、女性活用のロールモデルを示すべき存在である点で問題が 25 件あった。

- たとえ非営利組織であっても大学は、一般企業などにおける女性活用のロールモデル的存在として、率先して女性教員比率を高める使命があるのでは。(博士女)
- 早稲田以外でも、女性の教員は少ないと聞いています。トップにも(大学を運営する人)にも、女性は必要だと思います。そうでなくても、早稲田は、男性社会的傾向が高く、女性視点の変革も必要だと思います。(博士女)
- 実際の成績では女性の方が優秀な人が多いはず。希望者が男性に比べて少ないとしても、大学という多様な考え方が必要な教育現場としては、女性研究者を3割ぐらいいは確保しないと、大学としての進展が望めないと思う。(博士男)
- 産官学の中で、課題を見つけそれに対して政策につながる理論を考えるなり行動を移すことが、社会に対してアカデミックな場所が持つ一つの責務であると思います。(修士男)

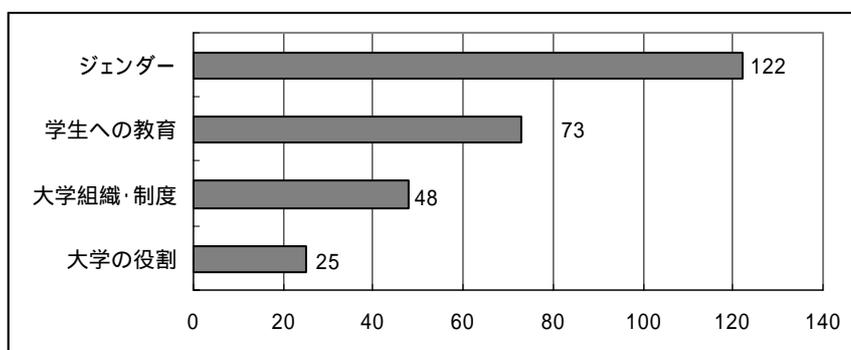


図 4-1 「問題」だとする回答理由 (N=268)

**(2)「どちらともいえない」と回答した理由 (図 4-2 : N=198)**

「判断基準が不明確で、提示された数字や情報からは判断できない」が最も多く 84 件、「女性を増やせばよいという数の問題ではなく、質や能力重視であるべき」が 45、「学生数や研究者志望者数からみると妥当」が 43 件、「教員の採用に限らず、社会全体の問題だから」が 12 件、「性別によるライフスタイルの違いがある」が 11 件であった。

- 女性が研究しやすい環境をつくるためには、女性の教員が必要であると考えから。そうでなければ、知らず知らずのうちに男性中心な環境になってしまって、女性の意見が男性の意見と同じくらい尊重されないかもしれないから。(修士女)

- 優秀な、実力のある女性研究者や、男性と同レベルの女性研究者なのに、採用の際に性別を理由に断られているなら大問題です。しかし、実際に有能な女性研究者が少ないのであれば、割合が少なくても問題ないと思います。単に、女性の数が増えればいい、ということではないと思っています。(修士女)
- 今日に至るまで、研究者として多分に可能性を持つ女性研究者が、出産・子育てなどを理由に研究を中断せざるをえなかった学術機関における環境の不備の改善に努めてこなかったという点から考えれば、当然発生しうる状況であると判断される。(博士女)
- 女性の中にどれだけ志望している人がいるかわからないから。女性のライフプランを考えたときにどれだけの方が研究者を魅力的に感じるかわからないから。(修士男)
- 男女とも能力に応じてその職に就くべきであり、女性が差別されると同様に、能力に問題があるのに女性の割合を増やすためにだけ女性が優遇されるのも、問題である、と考える。(修士女)
- 女性登用は時代の流れですが、逆に度が過ぎると、男性研究者の逆差別にもつながりかねないと思います。登用の基準(論文等々)を透明化、明確化して優秀な女性教員の登用が自然に増えるという形が望ましいと思います。(博士男)

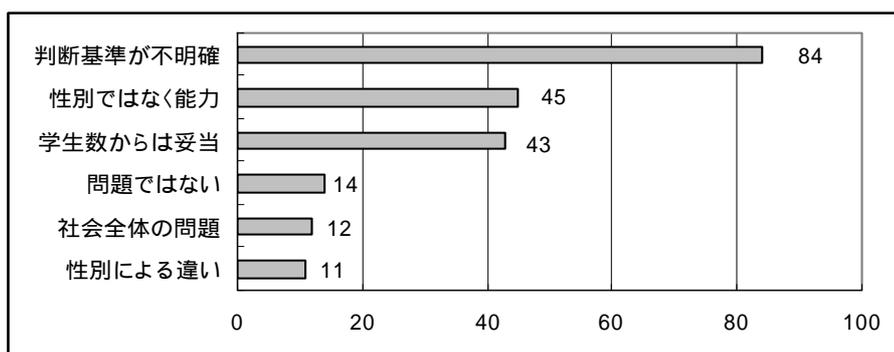


図 4-2 「どちらともいえない」の回答理由 (N=198)

**(3)「それほど問題ではない」、「まったく問題ではない」と回答した理由(図 4-3 : N=180 )**

「性別ではなく能力や質が重要」84 件、「女子学生や女性研究者を志望する人が少ない」34 件、「問題だとは感じない、学生である自分からは教師の性別は関係ない」、最近では女性が評価され、女性研究者も増えているから、「性別による志向や役割の違いがある」、「与えられた情報からは判断できない」という理由も散見された。

- 理工系の場合、学部時点から女性の割合が低く、教員の女性比率が低いのも学部時の男女比を反映しているに過ぎないから。むしろ問題なのは、早稲田大学の教員人事が完全公募制ではなく、不透明なプロセスで決まっている点だと思う。(修士男)
- 研究者になるための資質が問題であって、女性教員をそれほど多くする必要はない。研究水準が高くもないのに、女性だからということで就職しては本末転倒であろう。(博士男)
- 能力がある人が教員になるべき。能力の有無には性別は関係しないから。(修士女)
- 女性の比率を出すこと自体、ある目標値まで女性の数を増やさなければならないという意識が先行しているので違和感を覚える。(博士女)

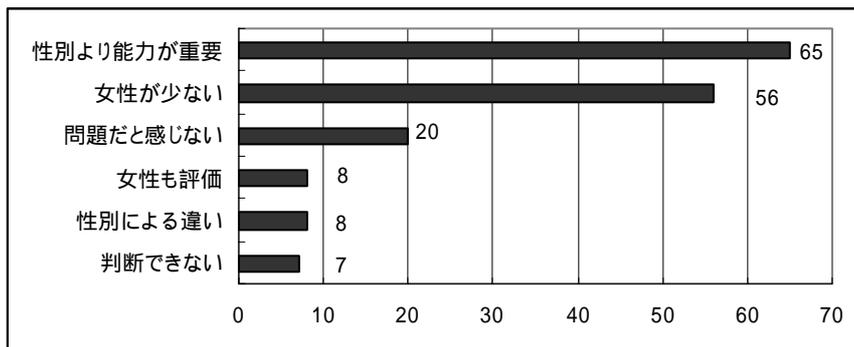


図 4-3 「問題ではない」の回答理由 (N=180 )

このように現状については、女性研究者の不足により価値観の多様性や女子学生の悩みやニーズに対応できない、大学内の組織や研究環境に問題が生じることから問題視する立場と、女子学生や研究者を志望する女性が少ない、研究には性別よりも能力を重視すべきだとの立場から問題ではないとする立場に分かれた。しかしながら提供した数値や情報からは判断できない、性差別と研究との関係が明確ではないことからわからないとの回答も多かった。さらに問題視する・しない理由と重なりあう回答理由も目立った。学生に対し、現状を判断できる十分な情報、ジェンダーに関する知識を提供することが肝要であろう。

## 2. 女性研究者比率アップ支援の是非

次に、大学院の在籍者数をもとに算出した本事業の目標値（全体で 25%、理工系で 15%）を提示して<sup>1</sup>、それにむけての支援実施の賛否をたずねたところ、「賛成」44.4%、「反対」20%、「わからない」36%という結果であった。次に学年・性別ごとの特徴をみると表 4-2 で示すとおり、学年では修士と博士 4-6 年が博士 1-3 年よりもやや高い数値を示す傾向があった。また性別でみると、男性よりも女性が「賛成」だとする傾向が強く、修士女と博士 4-6 年女では 6 割を超え「反対」を大きく上回り、修士で 27 ポイント、博士 1-3 年で 39 ポイント、博士 4-6 年で 32 ポイントの大きな差がみられた。他方、「反対」の回答では、全ての学年で男性は 3 割近くにのぼっているのに対し、女性は修士博士 1-3 年で 1 割強、博士 4-6 年ではわずか 2%のみとなっている。

表 4-2 女性研究者比率を上げる支援について ( % )

	N	賛成	反対	わからない
全体	752	44.4	19.7	35.9
修士	452	46.2	19.9	33.8
博士 1 - 3 年	210	39.0	21.4	39.5
博士 4 - 6 年	90	47.8	14.4	37.8
修士男	254	34.3	27.2	38.6
修士女	198	61.6	10.6	27.8
博士 1-3 年男	111	20.7	29.7	49.5
博士 1-3 年女	99	59.6	12.1	28.3
博士 4-6 年男	42	31.0	28.6	40.5
博士 4-6 年女	48	62.5	2.1	35.4

<sup>1</sup> 調査票には数値目標の算出根拠を提示しなかった。

上記の回答理由をたずねたところ、以下のような結果であった。

### (1) 「賛成」の回答理由

「女性研究者の支援に役立つから」が 146 件と最も多く、「目標値を掲げたことで改革が進む」が 62 件、「大学の活性化、学内の環境整備が進む」いった理由が 56 件みられた(図 4-4)。

- 女性教員が増えると、女性からの視点で授業ができたり、女子生徒が増えたりするなどして、よりアカデミックな講義体制が取れると思うから。(博士女)
- 有能な研究者が増えることは男女問わず非常に好ましいと思うため。(修士男)
- 今まで、出産・子育てなどの理由で研究を断念していた層に含まれていた可能性ある研究者の、研究を持続しようとする意欲の促進につながるから。(博士女)
- 女性がプライベートを犠牲にしないで研究生活を目指すことができるのはよい。(修士男)
- 女性研究者が増えれば、それを目標として理系大学に入ってくる女性の数も増えるだろうから。また、女性に対する支援対策も本格的になってくるだろうから。(修士男)
- 適切な支援があれば研究職を目指す女性が増えると思うし、女性研究者の割合が増え、ロールモデルがいることで将来のビジョンを描きやすくなるから。(博士女)
- 少なくとも女性に不利となる環境・制度に対する改善は行っても良い。(修士男)
- 女性で優秀な研究者がいなければ仕方がないが、もしいるのであれば、制度作りから始めないといつまでたっても女性の研究者は増えないから。(修士女)
- 教員の自主性に任されていたのでは個々の意識が変わらず、状況が改善されないと思われる。(博士女)
- できれば全体で3割を目標にしてもらいたい。3割いれば意見の出しやすさ、通りやすさが変わる。また、女性研究者が増えれば女子学生の職業選択にも幅が広がると思う。(博士女)
- 対象が女性であれ男性であれ、魅力ある働き先として企業努力するのは良いことだと考えます。(修士男)
- 主として慣習的な理由から、まだまだ女性の研究職への道は狭いのが現状です。テコ入れのためのアフーマティブ・アクションは妥当であり、また本学が私大の雄として率先して取り組めば、他の大学や研究環境に与える影響は大きいと考えます。(博士女)

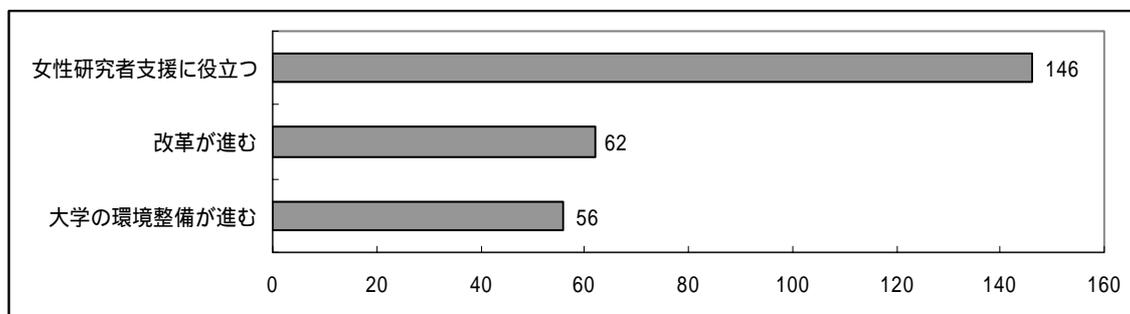


図 4-4 「賛成」の回答理由 (N=264)

## (2)「わからない」の回答理由 (N=251)

「目標値の意義・根拠・妥当性がわからないから」、「数ではなく能力を重視すべき」、「女性重視の採用・女性研究者比率を上げる理由がわからない」といった理由が多く、さらに「具体的な支援内容がわからない」、「現状に問題はないのではないか」がつづき、「他に着手すべき問題がある」、「逆差別になるのではないかと」といった理由もみられた。

- 女性の研究者を支援するのは結構だが、比率を目安にする根拠がわからない。(修士男)
- 研究者になりたい女性がいればその人が研究をすればよい。その人を支援すれば良いのであって、女性の比率を増やすことを目的とする支援に意味があるか分からない。(修士男)
- 目標値の根拠、そしてそもそも目標値を設定することの根拠がよく分からない。(博士男)
- 志している人の中で、その目標をかなえている人の割合が問題だと思う。単純な%比較・%設定は無意味なジェンダー論を展開する人々を刺激するだけなので、問題設定を考えて欲しい。全ての女性が割合が同じなら平等だと単純に考えているわけではない。(博士女)
- 意欲のある女性研究者を支援すること自体はよいことだと思うが、あえて目標値を置いてまで女性研究者の数を増やす理由がいまいち自分の中ではっきりしていないから。(修士男)
- 女性を増やす意味がよく分からない。優秀なら男性でも女性でも構わない。(修士女)
- 女性の研究者が増えることは結果であって、目標ではないと思う。女性も満足出来る環境ができた後も女性研究者を増やそうとするのだろうか。(修士男)
- この目標値に達するために大学側がどのようなことを行なうかが明確に判らないから。(修士女)

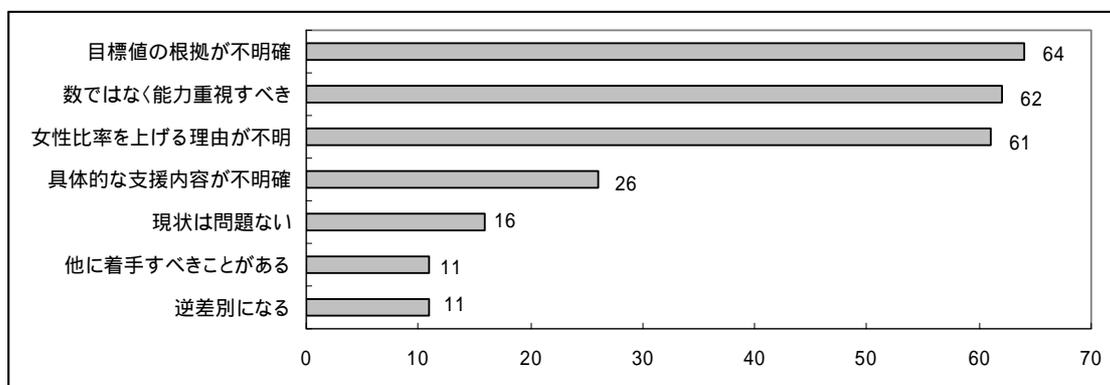


図 4-5 「わからない」の回答理由 (N=251)

## (3)「反対」の回答理由 (N=117)

「数値目標にこだわることで質が低下する。性別ではなく、質や能力重視すべき」が 46 件、「数値目標の設定自体に問題がある」が 25 件、研究環境の整備等、他に対処すべき問題があるが 21 件、逆差別になるからが 20 件で、「関心がない・問題はない」という理由も散見された。

- 女性を増やすことで生じるメリットが説明されていない。さらに女性を優遇することは男性差別になる可能性も否定できない。(修士男)
- 能力のない女性が「女性である」というだけで登用される恐れがある。アメリカにおけるアフーマ

ティブ・アクションと似たような状況になることが懸念される。(修士男)

- ただ女性の数を増やせばいいというわけではないと考えます。本当に有能な人だけを採用するのでなければ、教員全体の質の低下を招きかねないと考えます。(博士女)
- 数合わせのためだけに女性を採るのは意味がない。「女性だから」という理由で採用されても嬉しくない。(博士女)
- 目標値にすることが目的化すれば研究、教育活動が衰退する。また、なぜ「平等」なのに目標値が50%でないのか、その点も疑問。(博士男)
- やや反対。性別の比率に意味があるか分からない。質の悪い女性研究者を増やすことにならないか不安。底上げではなく、しっかりと研究者を目指す女性を確実に支援すべき。(博士女)
- 研究者は実績によって評価されるべきだと思うから。(修士女)
- 能力に応じて採用すべきで、男女比ありきの採用には疑問を感じる。(修士男)
- 女性研究職を増やすために目標値を設定する努力をするのなら、女性にとって理工系が、その人生が魅力的になるような環境を魅せるのが先決。(博士男)

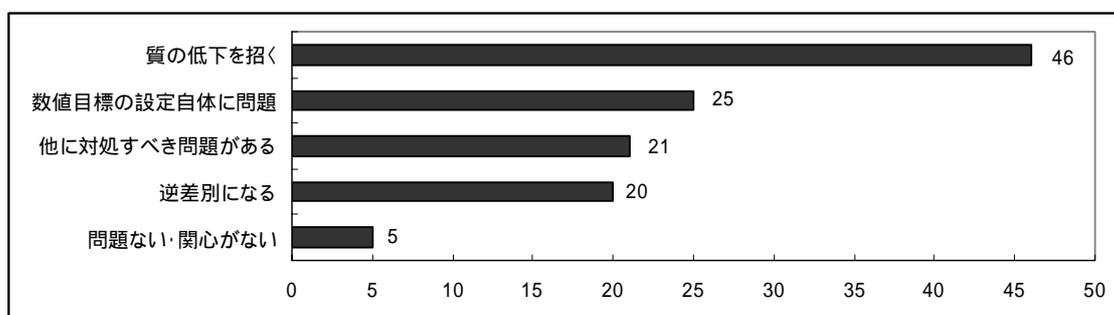


図 4-6 「反対」の回答理由 (N=117)

またどの回答においても、「目標値が低すぎる」という意見がみられた。

- 目標が低い。また割合での目標は、非常にまずいと思う。絶対数にするべき。割合での比率の増加は、男性の雇用が減ってしまう。女性の雇用を増やすのみだけではダメで、全体の雇用を上げ、その中で女性の割合を増やすべき。(博士男)
- 比率を増やすのは賛成だが、目標値が低すぎる。30%は超えるべき。(博士女)
- もっと高くすべきである。バルセロナ建築大学は女性が70%である。(修士男)

上記でみたように、学年が高いほど現状の女性教員比率に対して問題視していることがわかる。また女性研究者比率を上げるための支援については、女性が賛成とする割合が大きかった。しかし自由回答をみるかぎり、女性研究者比率を上げる支援に賛成していない場合でも、現状に何らかの問題があり、何らかの手だてが必要であると認識している者は多いことがわかる。重要なことは、目標値の意義や根拠、具体的な支援内容を明示することだろう。また女性の側からも、性別よりも能力や業績を重視すべきとの意見が多くみられ、性別を理由に採用されることよりも、研究の成果を正當に評価される仕組みが望まれているといえるだろう。

### 3. 研究職への支援

本事業では、大学での研究継続や研究職をより魅力的なものにするための支援策として、具体的に「育児介護と両立のための相談窓口」、「学内保育所」、「病時病後保育」、「育児介護費用の補助」、「育児介護休暇」、「育児介護休暇後の復帰支援」、「セクシュアル・ハラスメントのない環境づくり」、「女性教員の積極的採用制度」の8つの支援策を検討している。項目ごとにその有効性ならびに将来を含めた利用希望をたずねた（表4-3、表4-4）。

表4-3 研究職支援の有効性 (%)

	N	とても有効	やや有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
育児介護と両立のための相談窓口	750	52.0	32.8	10.5	3.3	1.3
学内保育所	748	59.1	27.5	10.0	2.3	1.1
病時病後保育	748	57.1	29.9	10.6	1.3	1.1
育児介護費用の補助	740	60.8	26.2	9.2	2.6	1.2
育児介護休暇	741	65.7	25.4	6.7	1.5	0.7
育児介護休暇後の復帰支援	749	69.7	22.6	5.7	1.2	0.8
セクハラのない環境	750	54.8	28.3	13.3	1.7	1.9
女性教員の積極的採用	747	29.6	21.6	29.9	9.2	9.8

表4-4 研究職支援の利用意欲 (%)

	N	必要・利用したい	必要・利用したくない	今後利用したい	今後利用したくない
育児介護と両立のための相談窓口	748	7.1	1.1	77.0	14.8
学内保育所	743	6.7	1.5	78.2	13.6
病時病後保育	743	7.0	0.8	80.2	12.0
育児介護費用の補助	742	8.0	0.7	83.4	8.0
育児介護休暇	740	7.0	0.9	83.1	8.9
育児介護休暇後の復帰支援	741	6.9	0.8	83.8	8.5
セクハラのない環境	745	7.9	2.6	72.5	17.0
女性教員の積極的採用	726	9.9	1.9	50.3	37.9

以下、各項目についてみていこう。

#### (1)「育児介護と両立のための相談窓口」

全体のほぼ半数が「とても有効」と回答し、「やや有効」までをあわせると8割を超えた（表4-5）。女性が男性よりもやや有効視する傾向があり、学年ごとに男女を比較すると、修士で14ポイント、博士1-3年で8ポイント、博士4-6年で6ポイントの差があった。

この支援の必要性については表4-5のとおり、学年が高くなるにつれて利用意欲も強くなる傾向がみられた。また性別でみると男女差がさらに大きく、「今必要だ・利用したい」では博士4-6年女が20%であるのに対し男性はわずか2%しかない。逆に「今は必要ないが、今後必要になったときも利用したくはない」では、博士1-3年男22%、博士4-6年男29%であるのに対し、博士1-3年女11%、博士4-6年女7%とそれぞれ11ポイント、22ポイントもの差がみられた（表4-6）。

表 4-5 育児介護と両立のための相談窓口の有効性 (％)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも もいえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	750	52.0	32.8	10.5	3.3	1.3
修士	452	51.5	34.7	10.4	2.7	0.7
博士 1 - 3 年	209	52.2	27.8	13.4	3.8	2.9
博士 4 - 6 年	89	53.9	34.8	4.5	5.6	1.1
修士男	255	45.9	34.5	15.7	3.5	0.4
修士女	197	58.9	35.0	3.6	1.5	1.0
博士 1-3 年男	109	47.7	28.4	14.7	4.6	4.6
博士 1-3 年女	100	57.0	27.0	12.0	3.0	1.0
博士 4-6 年男	42	47.6	38.1	7.1	4.8	2.4
博士 4-6 年女	47	59.6	31.9	2.1	6.4	0.0

表 4-6 育児介護と両立のための相談窓口の利用希望 (％)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	748	7.1	1.1	77.0	14.8
修士	451	5.5	0.4	80.5	13.5
博士 1 - 3 年	209	8.6	1.9	72.7	16.7
博士 4 - 6 年	88	11.4	2.3	69.3	17.0
修士男	251	4.4	0.0	76.9	18.7
修士女	200	7.0	1.0	85.0	7.0
博士 1-3 年男	109	8.3	1.8	67.9	22.0
博士 1-3 年女	100	9.0	2.0	78.0	11.0
博士 4-6 年男	42	2.4	0.0	69.0	28.6
博士 4-6 年女	46	19.6	4.3	69.6	6.5

## (2) 学内保育所

「学内保育所」については全体の 6 割が「とても有効」だと回答し、「やや有効」までをあわせると 87%であった。学年が高くなるにつれ有効視する傾向がみられ、男女差も接近していくが、女性が男性よりもやや有効視する傾向があり、学年ごとに男女を比較すると、修士、博士 1-3 年が同様に 13 ポイント、博士 4-6 年で 8 ポイントの差があった(表 4-7)。

この支援の必要性についても学年が高くなるにつれて、また女性のほうが男性よりも強い利用意欲がみられた。注目すべきは、博士 4-6 年女で、「今必要・利用したい」が 17%であるのに対し、「今も・将来的にも利用したくない」は 4%にすぎない。他方、「今は必要ないが、今後必要になったときも利用したくない」では、修士男が 20%、博士 1-3 年男 17%、博士 4-6 年男 21%であるのに対し、女性では 1 割以下にとどまっており、修士で 13 ポイント、博士 1-3 年で 7 ポイント、博士 4-6 年で 17 ポイントの差がみられた(表 4-8)。

表 4-7 学内保育所の有効性 (%)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	748	59.1	27.5	10.0	2.3	1.1
修士	451	57.0	29.7	10.4	2.4	0.4
博士 1 - 3 年	208	59.6	24.5	10.6	2.9	2.4
博士 4 - 6 年	89	68.5	23.6	6.7	0.0	1.1
修士男	255	47.5	33.7	14.9	3.5	0.4
修士女	196	69.4	24.5	4.6	1.0	0.5
博士 1-3 年男	108	51.9	25.9	13.9	4.6	3.7
博士 1-3 年女	100	68.0	23.0	7.0	1.0	1.0
博士 4-6 年男	42	64.3	23.8	9.5	0.0	2.4
博士 4-6 年女	47	72.3	23.4	4.3	0.0	0.0

表 4-8 学内保育所の利用希望 (%)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	743	6.7	1.5	78.2	13.6
修士	447	5.6	1.3	79.2	13.9
博士 1 - 3 年	208	7.7	1.4	77.4	13.5
博士 4 - 6 年	88	10.2	2.3	75.0	12.5
修士男	250	4.4	0.8	75.2	19.6
修士女	197	7.1	2.0	84.3	6.6
博士 1-3 年男	108	7.4	0.9	75.0	16.7
博士 1-3 年女	100	8.0	2.0	80.0	10.0
博士 4-6 年男	42	2.4	0.0	76.2	21.4
博士 4-6 年女	46	17.4	4.3	73.9	4.3

### (3) 病時病後保育

「病時病後保育」については全体の 57%が「とても有効」だと回答し、「やや有効」までをあわせると 87%であった(表 4-9)。女性が男性よりも有効視する傾向がみられたが、全体としての数値は最も低い修士男でも 81%で、修士女博士 1-3 年博士 4-6 年の男女では 9 割を超えており、この支援がとても有効だとみなされていることがわかる。

ところが支援の必要性をみると(表 4-10)、博士 4-6 年女の 25%が「今必要だ・利用したい」であるのに対し博士 4-6 年男は 0%である。逆に、「今は必要ないが、今後必要になったときも利用したくはない」では、修士 17%、博士 1-3 年男 15%、博士 4-6 年男 21%であるのに対し女性は全学年で 1 割未満にすぎず、男女別では修士で 11 ポイント、博士 1-3 年で 9 ポイント、博士 4-6 年では 17 ポイントもの差がみられた。「今は必要ないが、今後必要になったときに利用したい」の回答は全体的に高いが、特に修士女博士 1-3 年女で利用意欲は高く 8 割を超えている。

表 4-9 病時病後保育の有効性 (％)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも もいえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	748	57.1	29.9	10.6	1.3	1.1
修士	451	53.4	31.5	12.9	1.8	0.4
博士 1 - 3 年	209	61.2	28.2	7.2	1.0	2.4
博士 4 - 6 年	88	65.9	26.1	6.8	0.0	1.1
修士男	254	43.3	37.8	16.9	1.6	0.4
修士女	197	66.5	23.4	7.6	2.0	0.5
博士 1-3 年男	109	51.4	32.1	11.0	0.9	4.6
博士 1-3 年女	100	72.0	24.0	3.0	1.0	0.0
博士 4-6 年男	42	61.9	31.0	4.8	0.0	2.4
博士 4-6 年女	46	69.6	21.7	8.7	0.0	0.0

表 4-10 病時病後保育の利用希望 (％)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	743	7.0	0.8	80.2	12.0
修士	447	5.8	0.7	81.7	11.9
博士 1 - 3 年	208	7.2	1.4	79.3	12.0
博士 4 - 6 年	88	12.5	0.0	75.0	12.5
修士男	249	4.8	0.4	78.3	16.5
修士女	198	7.1	1.0	85.9	6.1
博士 1-3 年男	108	7.4	0.9	76.9	14.8
博士 1-3 年女	100	7.0	2.0	82.0	9.0
博士 4-6 年男	42	0.0	0.0	78.6	21.4
博士 4-6 年女	46	23.9	0.0	71.7	4.3

#### (4) 育児介護費用の補助

「育児介護費用の補助」については全体の 6 割が「とても有効」だと回答し、「やや有効」までをあわせるとすべての学年・性別で 9 割を超えた（表 4-11）。学年が高いほうが、そして男性よりは女性のほうが有効視する傾向がみられたが、学年ごとに男女を比較すると、修士で 11 ポイント、博士 1-3 年で 6 ポイント女性が高かったのに対し、博士 4-6 年では逆に男性のほうが 4 ポイント高かった。

この支援の必要性についても学年が高くなるにつれて、また女性の方が男性よりも利用意欲も強い傾向がみられた。とくに博士 4-6 年女の 2 割が「今必要だ・利用したい」であったのに対し、博士 4-6 年男はわずか 2% にすぎなかった。対照的に博士 4-6 年男の 2 割が「今も・将来的にも利用したくない」であったのに対し、博士 4-6 年女では 2% しかなかった。修士博士 1-3 年では現在と今後の利用意欲において男女ではそれほど大きな差がみられなかった（表 4-12）。

表 4-11 育児介護費用補助の有効性 (％)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	740	60.8	26.2	9.2	2.6	1.2
修士	447	57.0	28.9	10.1	3.4	0.7
博士 1 - 3 年	206	65.5	23.3	8.3	1.5	1.5
博士 4 - 6 年	87	69.0	19.5	6.9	1.1	3.4
修士男	253	49.8	31.2	13.4	4.7	0.8
修士女	194	66.5	25.8	5.7	1.5	0.5
博士 1-3 年男	108	63.0	23.1	10.2	0.9	2.8
博士 1-3 年女	98	68.4	23.5	6.1	2.0	0.0
博士 4-6 年男	42	64.3	26.2	4.8	0.0	4.8
博士 4-6 年女	45	73.3	13.3	8.9	2.2	2.2

表 4-12 育児介護費用補助の利用希望 (％)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	742	8.0	0.7	83.4	8.0
修士	449	6.2	0.9	84.9	8.0
博士 1 - 3 年	207	10.1	0.5	82.6	6.8
博士 4 - 6 年	86	11.6	0.0	77.9	10.5
修士男	250	5.2	0.8	82.4	11.6
修士女	199	7.5	1.0	87.9	3.5
博士 1-3 年男	108	9.3	0.0	81.5	9.3
博士 1-3 年女	99	11.1	1.0	83.8	4.0
博士 4-6 年男	42	2.4	0.0	78.6	19.0
博士 4-6 年女	44	20.5	0.0	77.3	2.3

### (5) 育児介護休暇

「育児介護休暇」については全体の 66%が「とても有効」と回答し、「やや有効」までをあわせると 9 割を超えた（表 4-13）。ここでも学年が高いほうが、男性よりは女性のほうが有効視する傾向がみられた。学年ごとに男女を比較すると、修士で 11 ポイント、博士 1-3 年が 10 ポイントであったのに対し博士 4-6 年ではわずか 1 ポイントしか差がみられなかった。

この支援の必要性についても学年が高くなるにつれて、また女性の方が男性よりも利用意欲も強い傾向がみられた（表 4-14）。ここでも博士 4-6 年女の 2 割、博士 1-3 年女の 1 割が「今必要だ・利用したい」であったのに対し、博士 4-6 年男で 2%、博士 1-3 年男で 9% にすぎなかった。逆に博士 4-6 年男の 2 割、博士 1-3 年男の 1 割弱が「今も・将来的にも利用したくない」であったのに対し、博士 1-3 年女、博士 4-6 年女では 0%であった。ここからも育児介護を実際に担う（あるいは担うと想定しているの）は女性であることが予想される。

表 4-13 育児介護休暇の有効性 (％)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	741	65.7	25.4	6.7	1.5	0.7
修士	446	63.9	26.9	7.2	1.6	0.4
博士 1 - 3 年	206	66.0	24.8	6.3	1.9	1.0
博士 4 - 6 年	89	74.2	19.1	5.6	0.0	1.1
修士男	252	55.6	30.6	11.1	2.4	0.4
修士女	194	74.7	22.2	2.1	0.5	0.5
博士 1-3 年男	107	57.9	28.0	9.3	2.8	1.9
博士 1-3 年女	99	74.7	21.2	3.0	1.0	0.0
博士 4-6 年男	42	69.0	23.8	4.8	0.0	2.4
博士 4-6 年女	47	78.7	14.9	6.4	0.0	0.0

表 4-14 育児介護休暇の利用希望 (％)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	740	7.0	0.9	83.1	8.9
修士	448	6.0	0.7	84.8	8.5
博士 1 - 3 年	206	7.8	1.9	81.1	9.2
博士 4 - 6 年	86	10.5	0.0	79.1	10.5
修士男	250	5.2	0.4	82.0	12.4
修士女	198	7.1	1.0	88.4	3.5
博士 1-3 年男	107	6.5	2.8	76.6	14.0
博士 1-3 年女	99	9.1	1.0	85.9	4.0
博士 4-6 年男	41	2.4	0.0	80.5	17.1
博士 4-6 年女	45	17.8	0.0	77.8	4.4

### (6) 育児介護休暇後の復帰支援

「育児介護休暇後の復帰支援」については、全体の7割が「とても有効」だと回答し、「やや有効」までをあわせるとすべての学年・性別で9割を超えた(表4-15)。性別では女性が有効視する傾向が強く、学年が高くなるにつれ有効視するポイントも大きくなる。学年ごとに男女を比較すると、修士で14ポイント、博士1-3年で8ポイントの差があるが、博士4-6年ではわずか1%しか差がみられなかった。

この支援の必要性については、学年が高くなるにつれて利用意欲も強くなる傾向がみられた。また性別でみると男女差がさらに大きく、「今必要だ・利用したい」では博士4-6年女が20%であるのに対し男性はわずか2%しかない。逆に「今は必要ないが、今後必要になったときも利用したくはない」では、博士1-3年男22%、博士4-6年男29%であるのに対し、博士1-3年女11%、博士4-6年女7%とそれぞれ11ポイント、22ポイントもの差がみられた(表4-16)。

また修士女の89%、博士1-3年女の86%が「今は必要ないが、今後必要になった時ぜひ利用したい」と回答したが、これは育児介護休暇後の復帰に対する不安が大きいことを示していると思われる。

表 4-15 育児介護休暇後の復帰支援の有効性 (%)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	749	69.7	22.6	5.7	1.2	0.8
修士	451	68.5	23.5	6.4	1.3	0.2
博士 1 - 3 年	209	69.9	21.5	5.3	1.4	1.9
博士 4 - 6 年	89	75.3	20.2	3.4	0.0	1.1
修士男	255	61.2	26.7	10.2	2.0	0.0
修士女	196	78.1	19.4	1.5	0.5	0.5
博士 1-3 年男	109	62.4	23.9	9.2	1.8	2.8
博士 1-3 年女	100	78.0	19.0	1.0	1.0	1.0
博士 4-6 年男	42	69.0	26.2	2.4	0.0	2.4
博士 4-6 年女	47	80.9	14.9	4.3	0.0	0.0

表 4-16 育児介護休暇後の復帰支援の利用希望 (%)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	741	6.9	0.8	83.8	8.5
修士	449	5.8	0.7	85.3	8.2
博士 1 - 3 年	204	7.4	1.5	82.8	8.3
博士 4 - 6 年	88	11.4	0.0	78.4	10.2
修士男	250	4.8	0.4	82.4	12.4
修士女	199	7.0	1.0	88.9	3.0
博士 1-3 年男	104	5.8	1.9	79.8	12.5
博士 1-3 年女	100	9.0	1.0	86.0	4.0
博士 4-6 年男	43	2.3	0.0	79.1	18.6
博士 4-6 年女	45	20.0	0.0	77.8	2.2

### (7) セクシュアル・ハラスメントのない環境づくり

「セクシュアル・ハラスメントのない環境づくり」については全体の 55%が「とても有効」だと回答し、「やや有効」までをあわせると 8 割を超えた（表 4-17）。修士で 5 ポイント、博士 1-3 年で 8 ポイント、博士 4-6 年で 1 ポイントと、学年・性別でそれほど顕著な差はみられなかった。

しかしながら支援の必要性をみてみると、修士の 24%、博士 1-3 年男の 28%博士 4-6 年男 21%が「今は必要ないが、今後必要になったときも利用したくない」と回答しており、この支援への期待が小さい（あるいは抵抗感がある）ことがわかる。他方、「今必要だ・利用したい」では女性のほうがやや利用意欲が高い傾向がみられたがものの、学年ごとに男女差をみると修士で 6 ポイント、博士 1-3 年で 2 ポイント、博士 4-6 年では 4 ポイントの小差にとどまった（表 4-18）。

表 4-17 セクハラのない環境の有効性 (％)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	750	54.8	28.3	13.3	1.7	1.9
修士	453	54.1	28.9	13.9	2.2	0.9
博士 1 - 3 年	209	55.5	26.3	13.9	1.0	3.3
博士 4 - 6 年	88	56.8	29.5	9.1	1.1	3.4
修士男	255	53.3	27.5	16.1	2.7	0.4
修士女	198	55.1	30.8	11.1	1.5	1.5
博士 1-3 年男	109	53.2	24.8	14.7	0.9	6.4
博士 1-3 年女	100	58.0	28.0	13.0	1.0	0.0
博士 4-6 年男	42	59.5	26.2	7.1	0.0	7.1
博士 4-6 年女	46	54.3	32.6	10.9	2.2	0.0

表 4-18 セクハラのない環境の利用希望 (％)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
全体	745	7.9	2.6	72.5	17.0
修士	450	7.3	3.3	71.8	17.6
博士 1 - 3 年	207	7.7	1.4	72.5	18.4
博士 4 - 6 年	88	11.4	1.1	76.1	11.4
修士男	251	4.8	3.2	68.1	23.9
修士女	199	10.6	3.5	76.4	9.5
博士 1-3 年男	108	6.5	1.9	63.9	27.8
博士 1-3 年女	99	9.1	1.0	81.8	8.1
博士 4-6 年男	43	9.3	2.3	67.4	20.9
博士 4-6 年女	45	13.3	0.0	84.4	2.2

### (8) 女性教員の積極的採用制度

「女性教員の積極的採用制度」については「とても有効」だと回答したのは全体の 3 割で、「やや有効」までをあわせても 5 割にとどまり、他項目と比較すると相対的に数値が低く、男女による回答傾向の差異が顕著であった(表 4-19)。性別・学年で見ると、男性はどの学年でも「どちらともいえない」という回答が 4 割で最も多く、博士 1-3 年男で 2 番目に多い回答が「まったく有効でない」の 22% だった。一方、女性は修士で 4 割、博士 1-3 年が 5 割、博士 4-6 年でも 55% と高い数値を示した。学年ごとの男女差をみると、修士で 8 ポイント、博士 1-3 年で 20 ポイント、博士 4-6 年で 12 ポイントと顕著な差がみられた。しかし修士女で 2 割、博士 1-3 年の 14%、博士 4-6 年の 26% が「どちらともいえない」と回答しており、手放しで期待しているわけではない様子もうかがえる。

支援の必要性でも、女性で学年が高いほうが現在および将来の利用意欲が強く、博士 4-6 年女で 44%、博士 1-3 年女の 2 割が「今必要・利用したい」と回答し、修士女の 68%、博士 1-3 年女の 62%、博士 4-6 年女の 44% が「今後、ぜひ利用したい」と回答している。対照的に、修士男では将来的な利用意欲がほぼ同じだが、博士 1-3 年男の 7 割、博士 4-6 年の 67% が「今後利用したくない」とし、「今後利用したい」の 26%、23% を大きく上回った(表 4-20)。

表4-19 女性教員の積極的採用の有効性

(%)

	N	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり 有効でない	全く 有効でない
全体	747	29.6	21.6	29.9	9.2	9.8
修士	451	28.2	23.1	30.4	9.1	9.3
博士1-3年	207	29.5	19.3	28.5	10.1	12.6
博士4-6年	89	37.1	19.1	30.3	7.9	5.6
修士男	253	18.2	20.2	37.5	11.5	12.6
修士女	198	40.9	26.8	21.2	6.1	5.1
博士1-3年男	107	10.3	14.0	42.1	11.2	22.4
博士1-3年女	100	50.0	25.0	14.0	9.0	2.0
博士4-6年男	42	16.7	21.4	35.7	14.3	11.9
博士4-6年女	47	55.3	17.0	25.5	2.1	0.0

表4-20 女性教員の積極的採用の利用希望

(%)

	N	必要・利用 したい	必要・利用 したくない	今後利用 したい	今後利用し たくない
博士1-3年	202	11.9	2.0	43.6	42.6
博士4-6年	85	25.9	2.4	34.1	37.6
修士男	241	3.3	1.7	47.3	47.7
修士女	198	9.1	2.0	67.7	21.2
博士1-3年男	102	3.9	1.0	25.5	69.6
博士1-3年女	100	20.0	3.0	62.0	15.0
博士4-6年男	39	5.1	5.1	23.1	66.7
博士4-6年女	46	43.5	0.0	43.5	13.0

## 小括

上述したように、「女性教員の積極的支援」を除くすべての支援項目に関しては全体的に過半数が「とても有効」と回答し、男女共に各支援への期待が大きいことがわかった。各支援項目に対する必要性についても、学年が高いほど利用希望が高くなり、性別では女性が男性よりも現在および今後必要が生じた際の利用を強く希望していた。しかしながら男性の利用意欲も決して低くはないことに大いに注目すべきであろう。

こうした回答傾向の要因のひとつ、ジェンダー規範に対する意識の違いがあげられるだろう。表4-21から表4-26に示したように、男女とも、ジェンダー規範（性別役割分業）意識について肯定的な者の方が、否定的な者よりも利用意欲が低い傾向にあった。ただし、「今後利用したい」については、ジェンダー規範に肯定的な女性よりも、むしろ否定的な男性のほうが高い利用希望がみられ、ジェンダー規範に否定意的な意見を持つ場合、男女とも8割前後の利用希望があり、ジェンダー規範に肯定的な場合であっても女性で7割、男性も6割から7割強であり、男女共に利用希望が同様に高い点にも注目しておきたい。

つまり育児介護については、現状は女性が負担している傾向があるが、決して女性に限定されるべき問題ではなく、男性にとっても重要な問題になっていることが有効性や必要意欲の高さにあらわれているといえるだろう。

表 4-21 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・育児介護と両立のための相談窓口 (%)

	N	必要・利用したい	必要・ 利用したくない	今後利用したい	今後も 利用したくない
全体	746	7.1	1.1	76.9	14.9
男・肯定	108	4.6	0.0	63.0	32.4
男・否定	292	5.5	0.7	77.4	16.4
女・肯定	52	11.5	3.8	71.2	13.5
女・否定	294	8.8	1.4	82.7	7.1

表 4-22 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・学内保育所 (%)

	N	必要・利用したい	必要・利用したく ない	今後利用したい	今後も利用した くない
全体	742	6.7	1.3	78.3	13.6
男・肯定	108	5.6	0.9	61.1	32.4
男・否定	291	4.8	0.3	80.8	14.1
女・肯定	52	15.4	3.8	71.2	9.6
女・否定	291	7.6	2.1	83.5	6.9

表 4-23 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・病時病後保育 (%)

	N	必要・利用したい	必要・利用したく ない	今後利用したい	今後も利用した くない
全体	741	7.0	0.8	80.2	12.0
男・肯定	108	5.6	0.9	64.8	28.7
男・否定	289	4.8	0.3	82.7	12.1
女・肯定	52	15.4	3.8	71.2	9.6
女・否定	292	8.2	0.7	84.9	6.2

表 4-24 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・育児介護費用の補助 (%)

	N	必要・利用したい	必要・利用したく ない	今後利用したい	今後も利用した くない
全体	740	8.0	0.7	83.4	8.0
男・肯定	107	6.5	0.9	73.8	18.7
男・否定	291	5.8	0.3	84.5	9.3
女・肯定	52	15.4	3.8	76.9	3.8
女・否定	290	9.3	0.3	86.9	3.4

表 4-25 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・育児介護休暇 (%)

	N	必要・利用したい	必要・利用したく ない	今後利用したい	今後も利用した くない
全体	738	7.0	0.9	83.1	8.9
男・肯定	106	5.7	0.9	72.6	20.8
男・否定	290	5.2	1.0	83.1	10.7
女・肯定	52	15.4	3.8	75.0	5.8
女・否定	290	7.9	0.3	88.3	3.4

表 4-26 性別×性別役割分業 と 今、必要な支援・育児介護休暇後の復帰支援 (％)

	N	必要・利用したい	必要・利用したくない	今後利用したい	今後も利用したくない
全体	739	6.9	0.8	83.8	8.5
男・肯定	107	5.6	0.9	71.0	22.4
男・否定	288	4.5	0.7	85.1	9.7
女・肯定	52	15.4	3.8	76.9	3.8
女・否定	292	8.2	0.3	88.4	3.1

#### 4. 男女共同参画推進にむけて

##### (1) 男女共同参画推進室設置の是非

現在、北海道大学、名古屋大学等、全国の大学及び民間研究機関で「男女共同参画室」が設置され、女性研究者を支援する活動が行われているが、早稲田大学でもそのような組織や活動の必要性とその回答理由をたずねた。

全体では6割弱が「必要」と答え、3割が「わからない」と回答し、「必要ではない」は1割であった(表4-27)。学年が高いほど「必要」の回答が多く、性別では女性のほうが「必要」と回答した割合が大きく、学年ごとに男女差をみると、修士で19ポイント、博士1-3年で26ポイント、博士4-6年で21ポイントなのであった。他方、「必要ない」では男性の回答が目立ち、修士で11ポイント、博士1-3年で12ポイント、博士4-6年で17ポイントの男女差がみられた。

表 4-27 男女共同参画推進室の設置 (％)

	N	必要	必要ではない	わからない
全体	743	56.7	10.5	32.8
修士	446	54.7	9.9	35.4
博士1-3年	207	58.9	11.1	30.0
博士4-6年	90	61.1	12.2	26.7
修士男	247	46.2	14.6	39.3
修士女	199	65.3	4.0	30.7
博士1-3年男	107	46.7	16.8	36.4
博士1-3年女	100	72.0	5.0	23.0
博士4-6年男	42	50.0	21.4	28.6
博士4-6年女	48	70.8	4.2	25.0
修士文系	257	59.9	7.8	32.3
修士理系	189	47.6	12.7	39.7
博士1-3年文系	147	63.3	8.8	27.9
博士1-3年理系	58	48.3	17.2	34.5
博士4-6年文系	83	63.9	10.8	25.3
博士4-6年理系	7	28.6	28.6	42.9

##### 「必要」の回答理由 (N=319)

a) 「女性の負担が大きく不利な状況にあるから」が162件で過半数を占め、b) 「現状を打破するため改革を推進する必要があるから」が70件、c) 「性別によらない研究者支援の必要があるから」が49件、d) 「社会的に大学に要請されている」が38件であった(図4-7)。

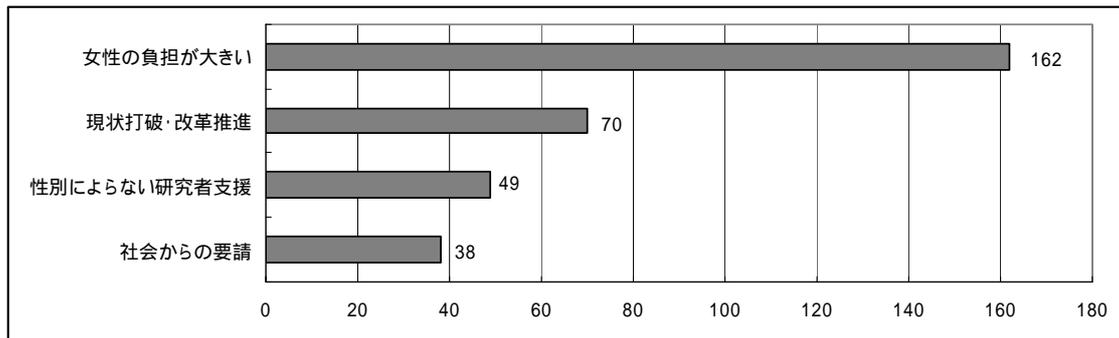


図 4-7 「必要」の回答理由 (N=319)

- 初めて女性を受け入れた私立大学として、早稲田大学が女性研究者の支援を積極的に行うのは良いことだと思うため。(博士男)
- まず組織をつくることは必要不可欠。ただし、形骸化しないよう、積極的に意見を取り入れ、前向きに進めていく気概が必要。(修士男)
- なにか新しいことを行おうとするときにはリーダーとなる部署が必要だと思う。(博士女)
- 具体的に計画を進める人間がいないと、進まないと思うから。(博士女)
- 自然な流れにまかせて是正されるとは思わない。積極的な関与が必要。(博士女)
- 女性研究者を支援するという学内外の意識を高めることにつながる。(博士男)
- 男性が圧倒的に多い現状では、そのような組織・活動がないと効果的な支援は困難だと考えるから。(修士男)
- 専門の組織を作らなければ、合理的な意見集約や施策提示が不可能。(博士男)
- 大学という制度が男性を中心に「進化」してきた面があるから、それを修正する意味で。(博士女)
- 女性の大学院進学率は、博士になると極端に低く、優秀な女性が研究者にならないのは損失。(修士男)
- 男女間の環境による格差はない方が公平であり、しかも、現状において女性の声は少数であり反映されにくいから、男女間の不公平をなくすことを目的とした組織があった方が改善がなされやすい。(修士男)
- いま大学にいる女性研究者にとって、役に立つと思われる支援が多いと思うから。(博士男)
- 現在の日本の慣習的な社会システムでは、育児や介護の負担は女性に大きくかかる。また、出産などでは、周囲のサポートと理解がなければ、生むかやめるか、という従来環境はかわらない。女性研究者あるいは、奥さんが女性研究者の先輩・先生で、子供のいない夫婦をかなり知っている。出産、育児、介護などに関する研究環境の全体的なサポートは、女性が研究活動をおこなうためには必要だと強く感じている。(修士女)
- 研究者間の、ジェンダーの力の不均衡を是正するため。(修士女)
- 研究志望の女性の障壁を極力減らすことができるならば行うべき。(修士男)
- 実際、女性研究者は大変だと思うからです。そして、女性研究者には女性ということを理由にいろんなことをあきらめて欲しくないし、言い訳にしないで欲しいからです。(博士男)
- 今後、少子化社会が進捗とが予測される中、男女に関係なく優秀な人材を積極的に集めることが私立大学が生き残って行くための手立てのひとつだと考えるから。(修士女)

- 大学こそが率先して行うべき活動である。また、早稲田大学が女性の社会進出のためのイニシアティブを握る契機となりうる。(博士女)
- 早稲田大学の規模や社会的な位置から考えて、必要がないことはないと思う。大学がこれから、さまざまな人たちに開かれていく現状を鑑みるに、そうした人たちのニーズを汲み取るためにも、必要だと思う。(修士男)
- 優秀な女性研究者を集めれば研究レベルが上がるから。(博士男)
- そのようなニーズが潜在的・顕在的にあると思うから。ただし女性、男性と区別するのではなく、必要を感じた人への子育て・介護支援としてやってほしい。(博士女)

### 「わからない」の回答理由 (N=150)

a) 「内容や効果がわからないため判断が付かない」が 66 件で最も多く、b) 「女性に限定する理由がわからない」が 30 件、c) 「女性が不利な状況にあるとは思えない」、d) 「女性に限定する理由がわからない」がともに 26 件で、その他に「もっと他に着手すべき問題があるのではないか」という意見もみられた(図 4-8)。

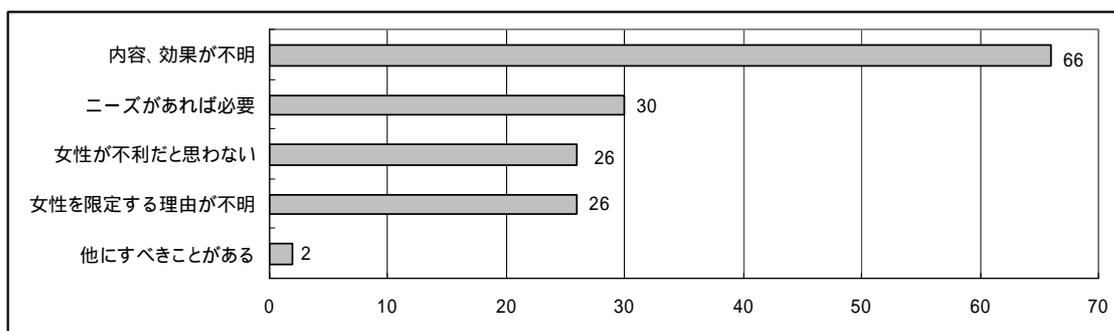


図 4-8 「わからない」の回答理由 (N=150)

- 「男女共同参画室」のような組織が必要であることは同意できるが、上に挙げられているような既存の当該組織の活動が、実際に有効であったのかは分からないため。また、積極的採用制度については、研究の質の低下などの弊害も耳にするため、採用基準が明らかでない以上、どれだけ必要なものなのか、現時点では一概に同意できない。(博士男)
- 運営する人がいるのか疑問。大学教員、職員が兼務するのは大変。(博士女)
- 女性研究者に対する支援は必要だが、新しい組織を作ることによって具体的にどのように環境が変わるのかがよくわからない。(博士女)

### 「必要ではない」の回答理由 (N=45)

a) 「ニーズやメリットがあるのかわからない」が 17 件で最も多く、b) 「逆差別になる・男女両方への支援が必要だから」、c) 「性別よりも能力や業績を重視すればよい」がともに 11 件、d) 「現状に問題がない・関心がない」が 6 件であった(図 4-9)。

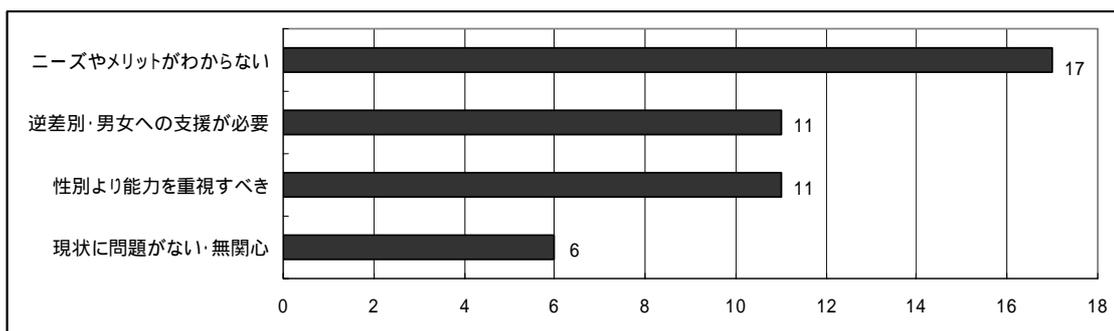


図 4-9 「反対」の回答理由 (N=45)

- 行きすぎた女性支援は、逆に男性差別に繋がり結局不利益が生じる、という面では何も変化がないので。(修士男)
- ウーマンリブな自治会というレトロな組織を編み出すだけでは？(修士女)
- 性別が問題なのではなく、大学や研究科全体で学生を支えるシステムを構築することの方が重要だから(修士男)
- 性によって限定せずに、研究者全体に対する支援が必要である。公正な競争のもと、男女差が是正されるような支援のあり方が重要だと考える。(博士男)
- まず女性研究者が現在被っている不利益とその原因を明確にし是正すべき。男性差別の可能性を排除した上での活動を望む。(博士男)
- 支援することは重要だと思いますが、育児・介護という要素は女性だけが困っている訳ではないので、男女とも支援してもらえるほうがより良いと思います。(博士男)
- 女性だからという理由で不当な差別があるのだとしたら必要であるが、無理に採用枠を設けたりそのほか優遇されるのは、大反対。(修士女)
- 女性を支援するなら、男性も支援したほうがいい。「男女」共同参画なのだから。(修士女)
- 女性研究者の支援 = 育児と介護の支援という図式がステレオタイプのすぎる。それよりも、本当に研究そのものを支援する枠組みが必要。(博士女)

ここでもジェンダー規範(性別役割分業・3歳児神話・男性の稼得責任)意識との関連をみたところ、ジェンダー規範に肯定的な方がやや「必要ではない」と回答する傾向がみられた(表 4-28)。

表 4-28 性別×性別役割分業 と 男女共同参画推進室の設置

	N	必要	必要ではない	わからない
全体	741	56.8	10.4	32.8
男・肯定	108	30.6	21.3	48.1
男・否定	286	53.1	13.6	33.2
女・肯定	52	55.8	5.8	38.5
女・否定	295	70.2	4.1	25.8

## (2)女性向け支援相談窓口の設置の必要性

最後に、男女共同参画推進および育児・介護支援のために女子学生・女性研究者を中心とした支援相談窓口を大学内に設置することについてたずねたところ、全体では約 6 割が「賛成」と回答した。男女別に見ると男性よりも女性のほうが「賛成」と回答する割合が大きく、修士では 16 ポイント、博士 1-3 年で 12 ポイントであったが、博士 4-6 年では逆に男性のほうが 5 ポイント高かった（表 4-29）。

表 4-29 女性向け支援相談窓口の設置 (%)

	N	賛成	反対	わからない
全体	741	59.1	12.7	28.2
修士	446	61.7	11.0	27.4
博士 1 - 3 年	205	56.6	16.6	26.8
博士 4 - 6 年	90	52.2	12.2	35.6
修士男	249	54.6	13.7	31.7
修士女	197	70.6	7.6	21.8
博士 1-3 年男	106	50.9	17.9	31.1
博士 1-3 年女	99	62.6	15.2	22.2
博士 4-6 年男	42	54.8	11.9	33.3
博士 4-6 年女	48	50.0	12.5	37.5

ここでも回答理由をたずねたところ、以下のような結果であった。

### 「賛成」とした回答理由（N=286 件）

a) 「女性の特有の悩みやニーズがある」が 141 件で最も多く、b) 「ニーズがあり、それによって救われる人がいる」が 110 件、c) 「大学の発展やよりよい制度づくりのためになる」が 26 件であった。その他、女性に限定しないことを条件として賛成とする者もいた（図 4-10）。

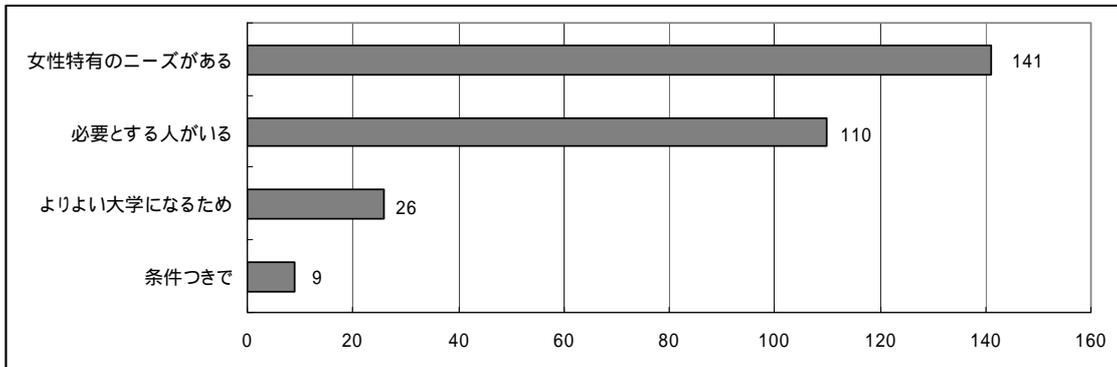


図 4-10 「賛成」の回答理由（N=286）

- 女性研究者には目に見えない差別がまだ残っていると思うため。（博士男）
- 男性に囲まれているが故に、周囲に相談相手を確認できない女性は多いはずだから。（修士男）
- 女性研究者（院生）は領域に関わらず少ないようなので、そのような組織を作ることによって、女性研究者同士の情報交換などが活性化すると思われるから。（博士男）
- 女性には、女性にしか話にくいこと、またわかってもらえると思うことが多々あるから。（博士女）
- 育児・介護は経験した事がある人にしか分からないことがたくさんあるから。そういう人からアドバイスを受けられるのは本当に心強いと思う。（修士女）

- 育児、介護支援は男女両方の研究者にとり有益であると思うが、しかし、特に育児ということの場合、女性により大きな負担がかかる傾向があると思うため。(修士男)
- 女性だけだとアクセスしやすく、女性の環境に理解を示す場があるというだけでも安心する。(修士女)
- 女性研究者が結婚や出産の際にどのように乗り越えるかのスキルを知ることが重要で、今はそのような情報を与えてくれる場がないから。(博士女)
- 研究者養成などの大学の制度が男性を前提に作られているから、問題がある場合の個別の対応とそれを制度改革へ生かすことができるから。(修士男)
- 家事・育児および介護を要するライフステージは、多くの女性研究者にとって実績を積み重ねなければならないときです。たとえば博士論文の執筆を断念するなど、優秀な女性が研究に打ち込めないなどのケースが実際に起きています。(博士女)
- 女子学生・女性研究者がどういった不安を感じているのか実態が把握できるから(修士男)
- 特に理系は側に相談できる同性がいない場合もあるので、そういう場所があって欲しい。(修士女)
- 才能ある女子学生が研究を続けるにはそれを支援する環境が必要だから。(修士男)
- 女性研究者は20代から30代にかけて、経済的問題に加え、介護、結婚出産育児とあらゆるハードルが立ちふさがる。男女平等を目指す社会とは言え、まだ現実的に日本ではなっており、いやおうなく、そのしわ寄せが女性に来るのが現実である。現実を直視した上での支援が必要と思う。(博士女)
- 育児・介護について男性の視点からも意見・アドバイスが言えるようスタッフの中にも数人は男性を入れてもよいと思う。(修士男)

#### 「わからない」の回答理由 (N=124)

a) 「女性だけではなく男性にもニーズがあるから」が 45 件で最も多く、b) 「ニーズや効果がよく分からないから判断しかねる」が 34 件、c) 「具体的なことがよく分からないから判断しかねる」が 33 件、d) 「現状に問題がない・関心がない」が 12 件であった(図 4-11)。

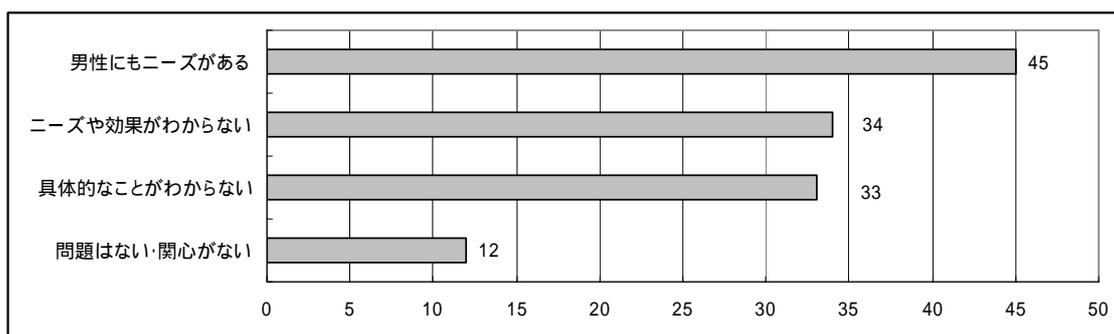


図 4-11 「わからない」の回答理由 (N=124)

- 女性研究者の応援があるのはありがたい。しかし、これを作って何ができるのか具体化されていなければ、効果がないのではないかと形骸化してしまう気もするので、わからない。(博士女)
- 支援することは重要だと思いますが、育児・介護という要素は女性だけが困っている訳ではないので、男女とも利用できる相談窓口の方がよりよいと思います。(修士男)
- 果たしてどの程度有効であるか不明であるから。(修士女)

- それが必要とされていて、十分に意味のある対応ができるのであれば、あって良いと思うが、実際のところは分からない。(修士男)
- 女性を支援するなら男性も支援したほうが良いから。男性がいつも得ばかりしているわけではなく、男性特有の悩みもあるだろう。(修士女)
- 現状では育児・介護は女性の仕事であるとする風潮が強いと思うので、女性中心に相談窓口を作り、対応するのは効果があるかもしれない。しかし、理想的には、育児・介護は男女で協力し合っていることではないかと思う。男も女も育児・介護に携わるという視点から考えれば、女性中心ではなく男女ともに参加して相談窓口を作る方が良いのではないだろうか。(修士女)

### 「反対」の回答理由 (N=84)

a) 「女性だけではなく男女を対象に支援すべき」が 54 件で最も多く、b) 「逆差別になる」が 14 件、c) 「他にもやるべきことがある」が 11 件、d) 「現状に問題はない・関心がない」という記述もあった(図 4-12)。

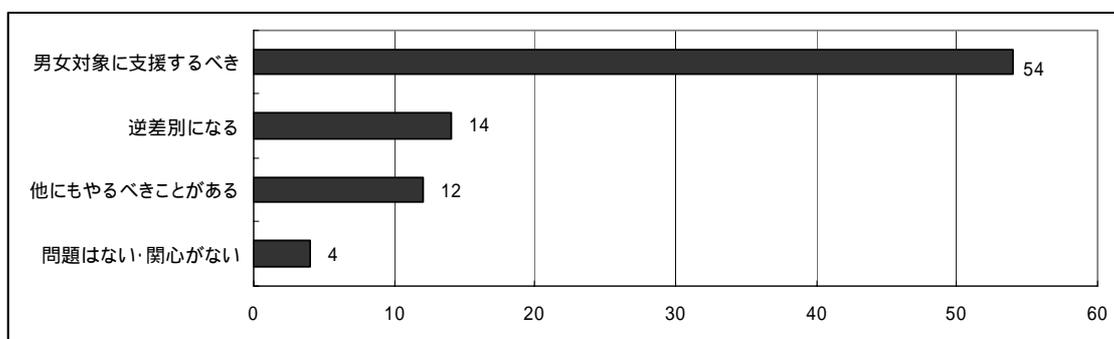


図 4-12 「反対」の回答理由 (N=84)

- 「女子学生・女性研究者を中心とした」は男女共同参画という観点から不自然。男女双方の支援相談窓口ならばよいと思う。(博士男)
- 男女同じように支援・啓蒙する必要があると考える。男性にも力を入れることで、女性の負担が軽減する。(博士女)
- 男女平等を掲げるなら男性にも同様のサービスを提供するべきだと思う。それが配偶者である女性のサポートにもなる。(博士女)
- 育児・介護が女性の責務であるという風潮を助長しかねない。単なる育児、介護支援窓口にし、両性に利用しやすい環境を作ることがより建設的と思う。(修士男)
- それでは育児・介護は女性がやれと言わんばかりである。「男女共同参画」ならば性別に関係のない支援窓口が合っているべきではないのか?(博士女)
- 支援組織自体の設置には賛成だが、育児と介護は女性のみが従事することではないため、窓口を男性にも広げて欲しい。(博士男)
- 女性ばかり特別待遇されることに差別を感じる。(博士男)
- 男性も育児参加すべき、配偶者が働いている男子学生・男性研究者も多いはず。(博士女)

以上の結果から、早稲田大学内に「男女共同参画室」のような組織や活動は、優秀な女性研究者の活躍の場を増やし、ロールモデルを提示することで後進の研究意欲を高めたり、将来へのビジョンを描きやすくするといった研究者養成上のメリットや、授業を受ける学生にとっても多様なニーズに対応することが可能になるといった教育上のメリットがあると受け止められていることがわかった。しかし女性のみを支援することには諸手をあげて賛成しているわけではなく、男女共同参画を理念として掲げ、それを推進していこうとするのであれば、女性の研究継続を阻害する環境を整備していくとともに、男女双方への適切な支援が必要であろう。今回の調査では、育児・介護支援については男女双方にとって重要な問題であるとの認識を持つ院生が非常に多いことがわかった。また現状をふくめ女性の研究者支援のニーズや具体的な施策に関する知識が全体的に不足しており、適切な判断材料の提供次第でさらに多くの支持が得られるだろう。

## 研究者養成のための男女平等プランに関する調査 ～ 大学院生の現状と支援ニーズ～

早稲田大学 女性研究者支援総合研究所

2006 年 12 月

早稲田大学では、平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに採択され、これに基づき 10 月より女性研究者支援総合研究所が発足いたしました。ここでは「研究者養成のための男女平等プラン」をテーマに、大学院生の方々にとって研究職がより魅力あるものにするための支援を考えています。

この調査は、あなたの大学院での生活や、研究を継続する上での必要な支援についてお尋ねするものです。正しい答とか間違った答というものはありません。あなたが最も近いと思う回答を選択、または記入してください。なお、回答して頂いた内容は統計的に処理されますので、個人が特定されることは決してありません。プライバシーは守られますので、ご協力のほどお願いいたします。

ここから記入を始めてください

**・まず、下記にお答え下さい**

FS1 あなたの性別は？	FS1	1. 男性    2. 女性
--------------	-----	----------------

FS2 あなたの所属課程と学年は？	FS2	1. 修士課程 (            ) 年    2. 博士課程 (            ) 年
-------------------	-----	--

**・大学院での生活と必要な支援**

Q1 (修士課程の方のみお答え下さい) あなたが修士課程進学を選んだ理由として、以下のものはどのくらいあてはまりますか？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究者になりたいから	1	2	3	4	5
2 専門領域(テーマ)をより深めたいから	1	2	3	4	5
3 就職に有利だから	1	2	3	4	5
4 在学中に資格試験等をめざしたいから	1	2	3	4	5
5 学部卒業時に希望する就職先がなかった, 入れなかったから	1	2	3	4	5
6 学部卒業時にまだ働きたくなかったから	1	2	3	4	5
7 大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから	1	2	3	4	5
8 専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから	1	2	3	4	5

Q1 - 2 (博士課程の方のみお答え下さい)あなたが博士課程進学を選んだ理由として、以下のものはどのくらいあてはまりますか？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究者になりたいから	1	2	3	4	5
2 専門領域(テーマ)をより深めたいから	1	2	3	4	5
3 就職に有利だから	1	2	3	4	5
4 修士修了時に希望する就職先がなかった,入れなかったから	1	2	3	4	5
5 修士修了時にまだ働きたくなかったから	1	2	3	4	5
6 大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから	1	2	3	4	5

Q2 あなたは現在、研究生活において以下のことで困ったり悩んだりしていますか。また、他にもあれば自由に挙げてください。

	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
1 経済的なこと	1	2	3	4	5
2 健康面のこと	1	2	3	4	5
3 希望進路(就職先)につけるかわからないこと	1	2	3	4	5
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	1	2	3	4	5
5 指導教員との関係	1	2	3	4	5
6 家族の理解が少ないこと	1	2	3	4	5
7 希望進路(就職先)が明確にならないこと	1	2	3	4	5
8 研究室内の人間関係	1	2	3	4	5
9 研究(論文)の進め方のこと	1	2	3	4	5
10 指導教員・研究室以外の人間関係	1	2	3	4	5
11 研究における自分の適性	1	2	3	4	5
12 その他(いくつでもご記入下さい):					

Q3 現在、あなたの研究生活は以下のものにどのくらいあてはまりますか？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究に意欲をもって取り組んでいる	1	2	3	4	5
2 研究・指導体制に満足している	1	2	3	4	5
3 研究において能力が発揮できている	1	2	3	4	5
4 自分の将来について目標が明確になっている	1	2	3	4	5
5 研究生活全般において満足している	1	2	3	4	5

Q4 あなたは、研究生活で困ったり悩んだとき、以下の人たちを相談相手として頼りにしていますか？

	非常に頼りにしている	やや頼りにしている	どちらともいえない	あまり頼りにしていない	全く頼りにしていない	該当する者はいない
1 家族(親・きょうだい)	1	2	3	4	5	6
2 家族(配偶者)	1	2	3	4	5	6
3 指導教員	1	2	3	4	5	6
4 研究室(該当しない場合は研究科)の仲間・先輩	1	2	3	4	5	6
5 研究室以外で同領域を研究する仲間・先輩・教員	1	2	3	4	5	6
6 同領域研究以外の友人	1	2	3	4	5	6
7 その他( )	1	2	3	4	5	

Q5 あなたは、以下のことで困ったり悩んだとき、学内の相談室を利用したことがありますか？

利用した場合、その結果に満足でしたか？また、利用したことがない方も含め、今後悩みが生じた場合に  
(現在の相談室の体制に関わらず、もし相談を受け付けるのならば)利用したいと思いますか？

	相談室を利用したことが			今後相談室を	
	ない	ある、そして満足した	ある、しかし不満だった	相談できるなら利用したい	利用したくない
1 経済面のこと	0	1	2	3	4
2 健康面のこと	0	1	2	3	4
3 進路(就職)のこと	0	1	2	3	4
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	0	1	2	3	4
5 人間関係のこと	0	1	2	3	4
6 研究に関する悩み	0	1	2	3	4
7 その他( )	0	1	2	3	4

Q5 2 上記各項目で「相談室を利用したことがある、しかし不満だった」、「今後相談室を利用したくない」にした方はその理由を教えてください

Q6 研究生活において大学が以下の支援をすることは、あなたにとって有効だと思いますか？また、その他にあれば、自由に挙げてください。

	とても有効である	やや有効である	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
1 経済面(奨学金の充実等)の支援	1	2	3	4	5
2 健康面(健康診断・相談窓口等)の支援	1	2	3	4	5
3 進路・就職相談窓口	1	2	3	4	5
4 進学・就職支援のための講座(諸分野で活躍するOB/OGの体験談等)	1	2	3	4	5
5 将来への不安等悩みに関するカウンセリング窓口	1	2	3	4	5
6 先輩から研究についての具体的な助言をもらえる相談制度	1	2	3	4	5
7 研究支援のためのスキルアップ講座(英語・パソコン等)	1	2	3	4	5
8 その他有効と思われる支援(いくつでもご記入下さい)					

### ・性別による扱いの違い、必要な支援

Q7 あなたが大学において、感じたことをお答え下さい

(1) 指導教員の意識・態度が男子学生と女子学生とで(性別によって)異なると感じた時はありますか？

ある方は、どのような時か、具体的に教えて下さい

1. ある ( )
2. ない

(2) Q7(1)(指導教員の意識・態度)以外の大学院生活において、性別によって、周囲の異性と違う扱いや不利益をうけたと感じた時はありますか？ある方は、どのような時か、具体的に教えて下さい

1. ある ( )
2. ない

(3) 学内の環境(設備等)で女性にとって使いにくい(だろう)と感じることはありますか？ある方は、具体的に教え

て下さい

1. ある ( )
2. ない

Q8 (女性の方のみお答えください) あなたは、研究する上で、以下の点で困ったり悩んだりしていますか？

	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
1 研究や実験などの拘束時間が長い	1	2	3	4	5
2 体力的にきつい時がある	1	2	3	4	5
3 研究室の雰囲気や男性中心でなじめないことがある	1	2	3	4	5
4 女性の方が就職において不利に感じることがある	1	2	3	4	5
5 困ったときに気軽に相談できる同性が身近にいない	1	2	3	4	5
6 研究生生活について家族や周囲の理解が少ない	1	2	3	4	5
7 その他( )	1	2	3	4	5

### 今後の進路

Q9 (以下Q12まで現在修士課程在学中の方のみお答えください)

現在あなたが修士課程修了後に一番希望している進路を教えてください

- Q9
1. 研究職(公務員・企業を含む)
  2. 非研究職(公務員・企業を含む)
  3. 小・中・高・専門学校教員
  4. 博士課程への進学
  5. その他( )

Q10 Q9での回答は、修士課程入学時と異なりますか？異なる方は進路希望を変更した理由を教えてください

Q10	1. 修士入学時から変更なし 2. 変更あり(理由: )
-----	---------------------------------

Q11(Q9で「4.博士課程への進学」と回答した方のみ) 博士課程への進学を希望する理由は？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 将来大学教員になりたいから	1	2	3	4	5
2 将来研究職(公務員・企業等)につきたいから	1	2	3	4	5
3 自分の専門性を高めたいから	1	2	3	4	5
4 大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから	1	2	3	4	5
5 研究を続けたいから	1	2	3	4	5
6 大学院の生活が自分に向いていると思うから	1	2	3	4	5
7 修士卒では希望する職がないから	1	2	3	4	5

Q12(Q9で「4.博士課程への進学」以外を回答した方のみ) 博士課程への進学を希望しない理由は？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 経済的理由	1	2	3	4	5
2 進学しても職の保障がないから	1	2	3	4	5
3 研究に向いていないから	1	2	3	4	5
4 大学院では性別に関係ない能力発揮ができそうにないから	1	2	3	4	5
5 長く大学院にいるとライフプランに支障がでるから	1	2	3	4	5
6 他に魅力的な就職先があるから	1	2	3	4	5
7 他に魅力的な進路(就職・進学以外)があるから	1	2	3	4	5

Q13 (以下Q16まで現在博士課程在学中の方のみお答えください)

現在あなたが博士課程修了後に一番希望している進路を教えてください

Q13	1. 大学教員	2. 研究職（大学以外の公務員・企業等）
	3. 非研究職（公務員・企業を含む）	4. 小・中・高・専門学校教員
	5. その他（	）

Q14 Q13での回答は、博士課程入学時と異なりますか？異なる方は進路希望を変更した理由を教えてください

Q14	1. 博士入学時から変更なし
	2. 変更あり（理由：
	）

Q15-1 (Q13で「1.大学教員」と回答した方のみ) 大学教員を希望する理由は？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究環境が整っているから	1	2	3	4	5
2 研究テーマ選択の自由度が高いから	1	2	3	4	5
3 性別に関係なく能力が発揮できそうだから	1	2	3	4	5
4 社会的地位が高いから	1	2	3	4	5
5 経済的待遇がよいから	1	2	3	4	5
6 時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから	1	2	3	4	5
7 後進の育成に関心があるから	1	2	3	4	5
8 その他(ご記入下さい):					)

Q15-2 (Q13で「2.研究職」を回答した方のみ) 研究職(大学以外)を希望する理由は？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究環境が整っているから	1	2	3	4	5
2 研究テーマ選択の自由度が高いから	1	2	3	4	5
3 性別に関係なく能力が発揮できそうだから	1	2	3	4	5
4 社会的地位が高いから	1	2	3	4	5
5 経済的待遇がよいから	1	2	3	4	5
6 時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから	1	2	3	4	5
7 後進の育成に関心があるから	1	2	3	4	5
8 その他(ご記入下さい):					)

Q16 (Q13で「1.大学教員」以外を回答した方のみ) 大学教員を希望しない理由は？

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 経済的理由	1	2	3	4	5
2 大学のポストが少ないから	1	2	3	4	5
3 他に魅力的な進路があるから	1	2	3	4	5
4 教員に向いていないから	1	2	3	4	5
5 家事育児との両立が期待できそうにないから	1	2	3	4	5
6 後進の育成に関心がないから	1	2	3	4	5
7 性別に関係なく能力を発揮できそうにないから	1	2	3	4	5
8 その他(ご記入下さい):					)

## 男女共同参画に関する現状と必要な支援

Q17 現在、早稲田大学の女性教員(専任教員・助手)の比率は13.8%、理工系においては7.8%と低い割合となっています。

(1)その現状についてあなたはどのように思いますか？またその理由を教えてください

Q17	1. かなり問題だ 2. やや問題だ 3. どちらともいえない 4. それほど問題ではない 5. 全く問題ではない
上記の回答をした理由	

(2)早稲田大学および女性研究者支援総合研究所では、目標値(全体で25%、理工系で15%)を設定して、女性研究者の比率を増やすための支援を行うことにしています。このことについてあなたはどのように思いますか？またその理由を教えてください

1. 賛成 (理由: \_\_\_\_\_)
2. 反対 (理由: \_\_\_\_\_)
3. わからない (理由: \_\_\_\_\_)

Q18 大学で研究を継続したり、大学での研究職が、より魅力的なものになるために、以下の支援は有効と思いますか？

	とても有効	やや有効	どちらとも いえない	あまり有効 でない	全く有効で ない
1 育児・介護と両立するための相談窓口	1	2	3	4	5
2 学内保育所	1	2	3	4	5
3 (保育所に通えない時の)病時・病後保育	1	2	3	4	5
4 育児・介護費用の補助制度	1	2	3	4	5
5 育児・介護休暇(休学)制度の充実	1	2	3	4	5
6 育児・介護休暇(休学)後の復帰支援制度	1	2	3	4	5
7 セクシュアル(アカデミック)・ハラスメントのない環境づくり	1	2	3	4	5
8 女性教員の積極的採用制度	1	2	3	4	5

Q19 あなたが大学で研究を継続する上で、以下の支援を今必要としていますか？また利用したいと思いますか？

	今必要がある		今は必要ない。 今後必要になった時	
	ぜひ利用し たい	しかし利用し たくない	ぜひ利用し たい	利用したく ない
1 育児・介護と両立するための相談窓口	1	2	3	4
2 学内保育所	1	2	3	4
3 (保育所に通えない時の)病時・病後保育	1	2	3	4
4 育児・介護費用の補助制度	1	2	3	4
5 育児・介護休暇(休学)制度	1	2	3	4
6 育児・介護休暇(休学)後の復帰支援制度	1	2	3	4
7 セクシュアル(アカデミック)・ハラスメントに対する相談窓口	1	2	3	4
8 女性教員の積極的採用制度(のもとでの応募)	1	2	3	4

Q19 2 上記の各項目で「今必要がある。しかし利用したくない」、「今後必要になった時、利用したくはない」にした方はその理由を教えてください

Q20 現在、北海道大学、名古屋大学等全国の大学および民間研究機関において「男女共同参画室」が設置され、上記Q18, 19のような女性研究者を支援する活動が行われています。あなたは、「男女共同参画室」のような組織および活動が 早稲田大学でも必要だと思いますか？また、その理由を教えてください

- 1. 必要と思う (理由: )
- 2. 必要とは思わない (理由: )
- 3. わからない (理由: )

Q21 男女共同参画推進および育児・介護支援のために、女子学生・女性研究者を中心とした支援相談窓口を大学内に作ることをどう思いますか？また、その理由を教えてください

- 1. 賛成 (理由: )
- 2. 反対 (理由: )
- 3. わからない (理由: )

**.あなたの考えおよび現在の状態について**

Q22 次のような意見について、あなたはどのように思いますか？あなたの気持ちに最も近いものを一つずつ選んでください

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
1 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである	1	2	3	4
2 子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ	1	2	3	4
3 家族を(経済的に)養うのは男性の役割だ	1	2	3	4

Q23 **最近1ヶ月間**のあなたの状態についてうかがいます。最もあてはまるものを一つずつ選んでください

	ほとんどい つもあった	しばしば あった	ときどき あった	ほとんどな かった
1 活気がわいてくる	1	2	3	4
2 元気がいっぱいだ	1	2	3	4
3 生き生きする	1	2	3	4
4 怒りを感じる	1	2	3	4
5 内心腹立たしい	1	2	3	4
6 イライラしている	1	2	3	4
7 ひどく疲れた	1	2	3	4
8 へとへとだ	1	2	3	4
9 だるい	1	2	3	4
10 気が張りつめている	1	2	3	4
11 不安だ	1	2	3	4
12 落ち着かない	1	2	3	4
13 ゆうつだ	1	2	3	4
14 何をするのも面倒だ	1	2	3	4
15 物事に集中できない	1	2	3	4
16 気分が晴れない	1	2	3	4
17 仕事が手につかない	1	2	3	4
18 悲しいと感じる	1	2	3	4

**．最後に、あなた自身についてうかがいます**

FS3 あなたの年齢は？	FS3	1. 25歳未満 2. 25～29歳 3. 30～34歳 4. 35歳以上
FS4 あなたの所属研究科は？	FS4	1. 政治 2. 経済 3. 法 4. 文 5. 商 6. 理工 7. 教育 8. 社会科学 9. 人間科学 10. スポーツ科学
FS5 あなたの専門をあえて区分すると？	FS5	1. 文系 2. 理系
FS6 あなたの身分・資格として <u>あてはまるものすべてに</u> をつけてください	FS6	1. 助手 2. 学術振興会特別研究員 3. 非常勤講師 4. COEプログラム研究員 5. 留学生 6. いずれも該当しない
FS7 あなたは現在結婚していますか？	FS7	1. 未婚 2. 有配偶（事実婚含む） 3. 離死別
FS8 お子さんはいますか？	FS8	1. いない 2. いる
FS9 <お子さんがいる方のみお答え下さい> <u>お子さんの年齢であてはまるところの人数をすべてご記入ください</u>	FS9	1. 1歳未満( )人 2. 1～3歳未満( )人 3. 3～6歳(未就学)( )人 4. 小学生( )人 5. 中学生以上( )人
FS10 あなたは学部卒業後（博士課程の方は修士修了後も含む）に社会人経験（勤務経験）がありますか？	FS10	1. ない 2. ある
FS11 あなたの現在の経済状況は？	FS11	1. 学費・生活費の大半は家族の支援を受けている 2. 生活費はほぼ家族、学費はほぼ自分（奨学金含）でまかなっている 3. 学費・生活費の大半を自分（奨学金含）でまかなっている

以上で調査は終わりです。ご協力まことにありがとうございました

## お願い

女性研究者支援総合研究所では今後、大学内の男女共同参画および育児・介護支援についての聞き取り調査を計画しております。今回の調査に回答して下さった方の中から、聞き取り調査にも参加して下さる方を募集しております。ご協力下さる方は、下記から当研究所のホームページにお進み頂き、所定のフォームにて氏名およびメールアドレスをお知らせください。なお、頂いた情報は調査の目的のみに利用します。

ご協力よろしく願いいたします。

早稲田大学女性研究者支援総合研究所のホームページへ

## まとめ

### ～男女共同参画実現にむけた研究者支援について～

本調査の目的は、大学院生が抱えている困難を明らかにすること、より充実した研究生生活を送るためにどのようなニーズがあり、どのような支援が必要であるかを探ることにある。

調査結果から浮かび上がった大学院生像は、非常に高い研究意欲をもっているが、研究生生活において十分に能力発揮ができていないというものであった。研究の進め方、自分に適性に自信をもてず、将来の進路についても迷いや不安をかかえている。高い研究意欲がそのまま研究職希望と直結しているわけではなく、とりわけ理系の場合は修士・博士ともに就職を意識して大学院に進学するケースが多くみられる。研究職を志望する場合、大学に残るのか大学以外の場で研究活動が続けるのかは、それぞれの専門領域によって判断基準が異なる。大学教員を志望する場合には、限られたポストをめぐる熾烈な競争への焦りや不安が強いようだ。さらに、一人前の研究者になるための養成期間中には、就職、結婚、出産・育児といった様々なライフイベントを経験することが多い。個人のライフコース上のライフイベントと研究活動との両立が、近い将来の課題として認識されている。困ったり、悩んだときの相談相手が多いのは、指導教員や研究室の仲間・先輩である。しかしながら、女性の場合には、周囲にロールモデルとなる女性教員がいないことから、その悩みを誰にも相談できない場合も十分に想定され、とても深刻な問題であるといえよう。

悩みをかかえていてもこれまでに学内の相談室を利用した大学院生は少ない。とはいえ、進路・就職相談、経済面での支援（奨学金の充実等）、健康面について大学による支援を有効視し、そうした利用相談窓口があれば利用したいと考えている大学院生は多い。修士課程の院生では、「進学就職支援講座」や「先輩による助言」、「研究支援のためのスキルアップ（英語・パソコン）」のニーズが大きく、博士課程の院生では、奨学金等の経済的支援のみならず研究資金の支援やオーバードクターの就職問題、ティーチング・スキルの養成や若手研究者の研究機会の提供、研究環境の整備（院生用の研究スペースの確保等）など、研究者養成のための支援への要望が強かった。

なによりも大学は、高い研究意欲をもつ大学院生を優れた研究者として養成し、社会へ輩出していくことに重点を置かねばならない。そのためには、研究体制の充実、研究環境の整備、バランスのとれた研究活動と個人（家庭）生活の実現にむけた支援が求められる。今回の調査では、博士課程在籍者で大学教員を希望する理由として「時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できる」ことをあげた者は学年・性別を問わず5割弱にのぼった。他の研究職を希望する者よりもその割合が極めて高く、大学教員の魅力が「研究環境」とあわせて「家事育児との両立への期待」にあることが改めて確認できる。このことは、大学での研究継続や研究職をより魅力的なものにするための支援策において、育児・介護と

研究の両立に関する項目のいずれもが、ほとんどの者にとって有効であり、かつ現在および将来利用したい支援策であることを示している。さらに、具体的な支援策について、女性のみならず男性大学院生の 8 割が利用を希望するなど、これらの支援へのニーズは男女を問わず、若手研究者全体において非常に高いことがわかった。しかし現状は、男女双方が認めていることではあるが、家事育児については女性の負担が多く、そのために研究に支障をきたしている事態も発生している。また繰り返しになるが、現状では研究と結婚や出産・育児との両立についての不安や悩みを相談できる機関やマンパワーも不足している状態である。大学院生同士の交流の機会をもちたいとの声も、こうした状況を反映しているのだろう。

とくにロールモデル不在の問題は、女性大学院生にとって将来への希望や研究意欲に大きな影響を与えている。このことは、早稲田大学の女性教員比率に対する評価や男女共同参画にむけての組織作りや支援活動への賛否に関する自由記述内容からも十分に読みとれた。現状評価、女性教員比率を上げる支援については賛否が分かれたが、回答理由を読むかぎり、積極的に反対あるいは現状に問題がないとする者は少ないようだ。今後、現状に関する情報、数値目標の算出根拠、ならびに支援策の具体的内容を周知し、理解を高めることが、きわめて重要かつ喫緊の課題である。また、早稲田大学の構成員である大学院生、助手、教員、職員が、対話・交流の場を増やし、大学全体として研究生活や教育生活が豊かになるべく、男女共同参画を推進していくことが切に望まれる。

付録2.単純集計表

全体集計(N%表) N=762

Q1

	あなたの性別は？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	男性	413	54.2%
2	女性	349	45.8%
	全体	762	100.0%

Q2

	あなたの所属課程と学年は？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	修士課程 1年	211	27.7%
2	修士課程 2年	205	26.9%
3	修士課程 3年	29	3.8%
4	修士課程 4年	7	0.9%
5	修士課程 休学中	6	0.8%
6	博士課程 1年	83	10.9%
7	博士課程 2年	59	7.7%
8	博士課程 3年	71	9.3%
9	博士課程 4年	34	4.5%
10	博士課程 5年	23	3.0%
11	博士課程 6年	18	2.4%
12	博士課程 休学中	16	2.1%
	全体	762	100.0%

Q3

	あなたが修士課程進学を選んだ理由として、以下のものはどの位あてはまりますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	研究者になりたいから	458	100.0%	124	27.1%	131	28.6%	68	14.8%	76	16.6%	56	12.2%	3	0.7%
2	専門領域(テーマ)をより深めたいから	458	100.0%	273	59.6%	149	32.5%	18	3.9%	12	2.6%	3	0.7%	3	0.7%
3	就職に有利だから	458	100.0%	56	12.2%	109	23.8%	70	15.3%	78	17.0%	138	30.1%	7	1.5%
4	在学中に資格試験等をめざしたいから	458	100.0%	14	3.1%	31	6.8%	35	7.6%	86	18.8%	285	62.2%	7	1.5%
5	学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったから	458	100.0%	12	2.6%	37	8.1%	32	7.0%	51	11.1%	317	69.2%	9	2.0%
6	学部卒業時にまだ働きたくなかったから	458	100.0%	40	8.7%	103	22.5%	42	9.2%	72	15.7%	191	41.7%	10	2.2%
7	大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから	458	100.0%	14	3.1%	49	10.7%	105	22.9%	91	19.9%	190	41.5%	9	2.0%
8	専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから	458	100.0%	158	34.5%	184	40.2%	44	9.6%	39	8.5%	29	6.3%	4	0.9%

Q4

	あなたが博士課程進学を選んだ理由として、以下のものはどのくらいあてはまりますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	研究者になりたいから	304	100.0%	187	61.5%	83	27.3%	24	7.9%	5	1.6%	3	1.0%	2	0.7%
2	専門領域(テーマ)をより深めたいから	304	100.0%	235	77.3%	58	19.1%	5	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	6	2.0%
3	就職に有利だから	304	100.0%	11	3.6%	22	7.2%	49	16.1%	80	26.3%	132	43.4%	10	3.3%
4	修士修了時に希望する就職先がなかった、入れなかったから	304	100.0%	7	2.3%	14	4.6%	15	4.9%	38	12.5%	221	72.7%	9	3.0%
5	修士修了時にまだ働きたくなかったから	304	100.0%	7	2.3%	21	6.9%	32	10.5%	41	13.5%	196	64.5%	7	2.3%
6	大学院では性別に関係なく能力発揮ができそうだから	304	100.0%	15	4.9%	40	13.2%	91	29.9%	63	20.7%	89	29.3%	6	2.0%

Q5

	あなたは現在、研究生活において以下のことで困ったり悩んだりしていますか。また、他にもあれば自由に挙げてください。 (マトリクス・単一回答)	全体		とても悩んでいる		やや悩んでいる		どちらともいえない		あまり悩んでいない		全く悩んでいない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1 経済的なこと	762	100.0%	187	24.5%	302	39.6%	91	11.9%	126	16.5%	55	7.2%	1
2 健康面のこと	762	100.0%	49	6.4%	234	30.7%	114	15.0%	241	31.6%	117	15.4%	7	0.9%	
3 希望進路(就職先)につけるかわからないこと	762	100.0%	263	34.5%	226	29.7%	78	10.2%	91	11.9%	98	12.9%	6	0.8%	
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	762	100.0%	229	30.1%	249	32.7%	87	11.4%	98	12.9%	91	11.9%	8	1.0%	
5 指導教員との関係	762	100.0%	51	6.7%	114	15.0%	97	12.7%	207	27.2%	284	37.3%	9	1.2%	
6 家族の理解が少ないこと	762	100.0%	18	2.4%	64	8.4%	63	8.3%	211	27.7%	395	51.8%	11	1.4%	
7 希望進路(就職先)が明確にならないこと	762	100.0%	156	20.5%	222	29.1%	100	13.1%	121	15.9%	153	20.1%	10	1.3%	
8 研究室内の人間関係	762	100.0%	56	7.3%	120	15.7%	97	12.7%	218	28.6%	261	34.3%	10	1.3%	
9 研究(論文)の進め方のこと	762	100.0%	209	27.4%	295	38.7%	102	13.4%	101	13.3%	46	6.0%	9	1.2%	
10 指導教員・研究室以外の人間関係	762	100.0%	35	4.6%	77	10.1%	131	17.2%	271	35.6%	239	31.4%	9	1.2%	
11 研究における自分の適性	762	100.0%	129	16.9%	241	31.6%	163	21.4%	138	18.1%	78	10.2%	13	1.7%	

Q6

	現在、あなたの研究生活は以下のものにどのくらいあてはまりますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1 研究に意欲をもって取り組んでいる	762	100.0%	215	28.2%	350	45.9%	91	11.9%	76	10.0%	20	2.6%	10
2 研究・指導体制に満足している	762	100.0%	112	14.7%	247	32.4%	171	22.4%	152	19.9%	69	9.1%	11	1.4%	
3 研究において能力が発揮できている	762	100.0%	56	7.3%	207	27.2%	308	40.4%	146	19.2%	34	4.5%	11	1.4%	
4 自分の将来について目標が明確になっている	762	100.0%	115	15.1%	239	31.4%	188	24.7%	156	20.5%	51	6.7%	13	1.7%	
5 研究生活全般において満足している	762	100.0%	69	9.1%	274	36.0%	225	29.5%	137	18.0%	44	5.8%	13	1.7%	

Q7

	あなたは、研究生活で困ったり悩んだとき、以下の人たちを相談相手として頼りにしていますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		非常に頼りにしている		やや頼りにしている		どちらともいえない		あまり頼りにしていない		全く頼りにしていない		該当する者はいない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1 家族(親・きょうだい)	762	100.0%	117	15.4%	178	23.4%	103	13.5%	184	24.1%	151	19.8%	22	2.9%	7
2 家族(配偶者)	762	100.0%	64	8.4%	54	7.1%	56	7.3%	49	6.4%	48	6.3%	473	62.1%	18	2.4%	
3 指導教員	762	100.0%	210	27.6%	273	35.8%	97	12.7%	111	14.6%	44	5.8%	6	0.8%	21	2.8%	
4 研究室(該当しない場合は研究科)の仲間・先輩	762	100.0%	219	28.7%	319	41.9%	82	10.8%	71	9.3%	43	5.6%	19	2.5%	9	1.2%	
5 研究室以外で同領域を研究する仲間・先輩・教員	762	100.0%	169	22.2%	269	35.3%	108	14.2%	85	11.2%	54	7.1%	63	8.3%	14	1.8%	
6 同領域研究以外の友人	762	100.0%	129	16.9%	257	33.7%	151	19.8%	122	16.0%	65	8.5%	28	3.7%	10	1.3%	
7 その他	38	100.0%	19	50.0%	14	36.8%	1	2.6%	0	0.0%	1	2.6%	0	0.0%	3	7.9%	

Q8

	あなたは、以下のことで困ったり悩んだとき、学内の相談室を利用したことがありますか？利用した場合、その結果に満足でしたか？ (マトリクス・単一回答)	全体		相談室を利用したことがない		相談室を利用したことがある。そして満足した		相談室を利用したことがある。しかし不満だった		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1 経済面のこと	762	100.0%	740	97.1%	4	0.5%	9	1.2%	9
2 健康面のこと	762	100.0%	671	88.1%	61	8.0%	19	2.5%	11	1.4%	
3 進路(就職)のこと	762	100.0%	678	89.0%	34	4.5%	30	3.9%	20	2.6%	
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	762	100.0%	737	96.7%	3	0.4%	11	1.4%	11	1.4%	
5 人間関係のこと	762	100.0%	713	93.6%	16	2.1%	18	2.4%	15	2.0%	
6 研究に関する悩み	762	100.0%	734	96.3%	5	0.7%	12	1.6%	11	1.4%	
7 その他	16	100.0%	0	0.0%	3	18.8%	8	50.0%	5	31.3%	

Q9

	学内の相談室を利用したことがない方も含め、今後悩みが生じた場合に(現在の相談室の体制に関わらず、もし相談を受け付けるのなら)相談室を利用したいと思いますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		相談できるなら利用したい		利用したくはない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%
		1 経済面のこと	762	100.0%	458	60.1%	287	37.7%	17
2 健康面のこと	762	100.0%	478	62.7%	263	34.5%	21	2.8%	
3 進路(就職)のこと	762	100.0%	532	69.8%	213	28.0%	17	2.2%	
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	762	100.0%	433	56.8%	309	40.6%	20	2.6%	
5 人間関係のこと	762	100.0%	351	46.1%	388	50.9%	23	3.0%	
6 研究に関する悩み	762	100.0%	382	50.1%	350	45.9%	30	3.9%	

Q11

	研究生活において大学が以下の支援をすることは、あなたにとって有効だと思いますか？また、その他にあれば、自由に挙げてください。 (マトリクス・単一回答)	全体		とても有効である		やや有効である		どちらともいえない		あまり有効でない		全く有効でない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1 経済面(奨学金の充実等)の支援	762	100.0%	609	79.9%	107	14.0%	24	3.1%	10	1.3%	9	1.2%	3
2 健康面(健康診断・相談窓口等)の支援	762	100.0%	378	49.6%	250	32.8%	92	12.1%	26	3.4%	9	1.2%	7	0.9%	
3 進路・就職相談窓口	762	100.0%	404	53.0%	191	25.1%	108	14.2%	32	4.2%	19	2.5%	8	1.0%	
4 進学・就職支援のための講座(諸分野で活躍するOB/OGの体験談等)	762	100.0%	294	38.6%	212	27.8%	143	18.8%	66	8.7%	38	5.0%	9	1.2%	
5 将来への不安等悩みに関するカウンセリング窓口	762	100.0%	215	28.2%	234	30.7%	186	24.4%	85	11.2%	34	4.5%	8	1.0%	
6 先輩から研究についての具体的な助言をもらえる相談制度	762	100.0%	278	36.5%	232	30.4%	145	19.0%	69	9.1%	32	4.2%	6	0.8%	
7 研究支援のためのスキルアップ講座(英語・パソコン等)	762	100.0%	321	42.1%	247	32.4%	104	13.6%	58	7.6%	26	3.4%	6	0.8%	

Q12

	指導教員の意識・態度が男子学生と女子学生とで(性別によって)異なると感じた時はありますか？ある方は、どのような時か、具体的に教えて (単一回答)	全体	
		N	%
1 ある		204	26.8%
2 ない		553	72.6%
0 無回答		5	0.7%
全体		762	100.0%

Q13

	Q12(指導教員の意識・態度)以外の面で、大学院生活において、性別によって、周囲の異性と違う扱いや不利益をうけたと感じた時はありますか？ある方は、どのような時か、具体的に教えて下さ (単一回答)	全体	
		N	%
1 ある		104	13.6%
2 ない		654	85.8%
0 無回答		4	0.5%
全体		762	100.0%

Q14

	学内の環境(設備等)で女性にとって使いにくい(だろう)と感じることはありますか？ある方は、具体的に教えて下さい。(単一回答)	全体	
		N	%
1	ある	200	26.2%
2	ない	554	72.7%
0	無回答	8	1.0%
	全体	762	100.0%

Q15

	あなたは、研究をする上で、以下の点で困ったり悩んだりしていますか？(マトリクス・単一回答)	全体		とても悩んでいる		やや悩んでいる		どちらともいえない		あまり悩んでいない		全く悩んでいない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	研究や実験などの拘束時間が長い	349	100.0%	20	5.7%	54	15.5%	54	15.5%	129	37.0%	88	25.2%	4	1.1%
2	体力的にきつい時がある	349	100.0%	31	8.9%	131	37.5%	54	15.5%	92	26.4%	39	11.2%	2	0.6%
3	研究室の雰囲気が男性中心でなじめないことがある	349	100.0%	15	4.3%	34	9.7%	44	12.6%	87	24.9%	166	47.6%	3	0.9%
4	女性の方が就職において不利に感じることがある	349	100.0%	40	11.5%	96	27.5%	93	26.6%	74	21.2%	44	12.6%	2	0.6%
5	困ったときに気軽に相談できる同性が身近にいない	349	100.0%	34	9.7%	73	20.9%	48	13.8%	94	26.9%	96	27.5%	4	1.1%
6	研究生活について家族や周囲の理解が少ない	349	100.0%	9	2.6%	34	9.7%	38	10.9%	108	30.9%	155	44.4%	5	1.4%
7	その他	21	100.0%	11	52.4%	5	23.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	23.8%

Q16

	現在あなたが修士課程修了後に一番希望している進路を教えてください。(単一回答)	全体	
		N	%
1	研究職(公務員・企業を含む)	93	20.3%
2	非研究職(公務員・企業を含む)	169	36.9%
3	小・中・高・専門学校教員	19	4.1%
4	博士課程への進学	142	31.0%
5	その他	32	7.0%
0	無回答	3	0.7%
	全体	458	100.0%

Q17

	Q16での回答は、修士課程入学時と異なりますか？異なる方は進路希望を変更した理由を教え(単一回答)	全体	
		N	%
1	修士入学時から変更なし	352	76.9%
2	変更あり	102	22.3%
0	無回答	4	0.9%
	全体	458	100.0%

Q18

	博士課程への進学を希望する理由は？ (マトリクス・単一回答)		全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	将来大学教員になりたいから	142	100.0%	73	51.4%	40	28.2%	13	9.2%	9	6.3%	6	4.2%	1	0.7%	
2	将来研究職(公務員・企業等)につきたいから	142	100.0%	39	27.5%	43	30.3%	30	21.1%	16	11.3%	13	9.2%	1	0.7%	
3	自分の専門性を高めたいから	142	100.0%	100	70.4%	39	27.5%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.4%	
4	大学院では性別に関係なく能力が発揮できそうだから	142	100.0%	11	7.7%	28	19.7%	45	31.7%	16	11.3%	41	28.9%	1	0.7%	
5	研究を続けたいから	142	100.0%	102	71.8%	33	23.2%	5	3.5%	1	0.7%	0	0.0%	1	0.7%	
6	大学院の生活が自分に向いていると思うから	142	100.0%	47	33.1%	46	32.4%	29	20.4%	14	9.9%	3	2.1%	3	2.1%	
7	修士卒では希望する職がないから	142	100.0%	20	14.1%	16	11.3%	26	18.3%	27	19.0%	53	37.3%	0	0.0%	

Q19

	博士課程への進学を希望しない理由は？ (マトリクス・単一回答)		全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	経済的理由	313	100.0%	82	26.2%	105	33.5%	21	6.7%	36	11.5%	63	20.1%	6	1.9%	
2	進学しても職の保障がないから	313	100.0%	142	45.4%	90	28.8%	16	5.1%	26	8.3%	33	10.5%	6	1.9%	
3	研究に向いていないから	313	100.0%	87	27.8%	94	30.0%	70	22.4%	28	8.9%	28	8.9%	6	1.9%	
4	大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうにないから	313	100.0%	6	1.9%	12	3.8%	39	12.5%	88	28.1%	161	51.4%	7	2.2%	
5	長く大学院にいとライフプランに支障がでるから	313	100.0%	87	27.8%	108	34.5%	41	13.1%	34	10.9%	36	11.5%	7	2.2%	
6	他に魅力的な就職先があるから	313	100.0%	91	29.1%	101	32.3%	48	15.3%	30	9.6%	37	11.8%	6	1.9%	
7	他に魅力的な進路(就職・進学以外)があるから	313	100.0%	43	13.7%	65	20.8%	55	17.6%	38	12.1%	105	33.5%	7	2.2%	

Q20

	現在あなたが博士課程修了後に一番希望している進路を教えてください。 (単一回答)		全体	
	N	%	N	%
1	大学教員	200	65.8%	
2	研究職(大学以外の公務員・企業等)	70	23.0%	
3	非研究職(公務員・企業等を含む)	9	3.0%	
4	小・中・高・専門学校教員	6	2.0%	
5	その他	18	5.9%	
0	無回答	1	0.3%	
	全体	304	100.0%	

Q21

	Q20での回答は、博士課程入学時と異なりますか？異なる方は進路希望を変更した理由を教えてください。 (単一回答)		全体	
	N	%	N	%
1	博士入学時から変更なし	280	92.1%	
2	変更あり	22	7.2%	
0	無回答	2	0.7%	
	全体	304	100.0%	

Q22

	大学教員を希望する理由は？ (マトリクス・単一回答)		全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	研究環境が整っているから	200	100.0%	92	46.0%	68	34.0%	26	13.0%	9	4.5%	2	1.0%	3	1.5%	
2	研究テーマ選択の自由度が高いから	200	100.0%	87	43.5%	71	35.5%	26	13.0%	12	6.0%	2	1.0%	2	1.0%	
3	性別に関係なく能力が発揮できそうだから	200	100.0%	25	12.5%	45	22.5%	64	32.0%	30	15.0%	34	17.0%	2	1.0%	
4	社会的地位が高いから	200	100.0%	12	6.0%	55	27.5%	59	29.5%	49	24.5%	23	11.5%	2	1.0%	
5	経済的待遇がよいから	200	100.0%	14	7.0%	61	30.5%	64	32.0%	35	17.5%	23	11.5%	3	1.5%	
6	時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから	200	100.0%	35	17.5%	58	29.0%	45	22.5%	30	15.0%	29	14.5%	3	1.5%	
7	後進の育成に関心があるから	200	100.0%	58	29.0%	72	36.0%	39	19.5%	16	8.0%	11	5.5%	4	2.0%	

Q23

	研究職(大学以外)を希望する理由は? (マトリクス・単一回答)	全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	研究環境が整っているから	70	100.0%	28	40.0%	24	34.3%	12	17.1%	6	8.6%	0	0.0%	0	0.0%
2	研究テーマ選択の自由度が高いから	70	100.0%	16	22.9%	28	40.0%	15	21.4%	6	8.6%	4	5.7%	1	1.4%
3	性別に関係なく能力が発揮できそうだから	70	100.0%	9	12.9%	15	21.4%	25	35.7%	9	12.9%	11	15.7%	1	1.4%
4	社会的地位が高いから	70	100.0%	2	2.9%	3	4.3%	30	42.9%	20	28.6%	15	21.4%	0	0.0%
5	経済的待遇がよいから	70	100.0%	4	5.7%	17	24.3%	23	32.9%	12	17.1%	14	20.0%	0	0.0%
6	時間の自由度が高く家事育児との両立を期待できるから	70	100.0%	4	5.7%	20	28.6%	18	25.7%	20	28.6%	8	11.4%	0	0.0%
7	後進の育成に関心があるから	70	100.0%	8	11.4%	11	15.7%	29	41.4%	10	14.3%	12	17.1%	0	0.0%

Q24

	大学教員を希望しない理由は? (マトリクス・単一回答)	全体		とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	経済的理由	103	100.0%	10	9.7%	19	18.4%	20	19.4%	17	16.5%	32	31.1%	5	4.9%
2	大学のポストが少ないから	103	100.0%	49	47.6%	29	28.2%	8	7.8%	5	4.9%	8	7.8%	4	3.9%
3	他に魅力的な進路があるから	103	100.0%	16	15.5%	28	27.2%	35	34.0%	10	9.7%	12	11.7%	2	1.9%
4	教員に向いていないから	103	100.0%	13	12.6%	21	20.4%	31	30.1%	21	20.4%	14	13.6%	3	2.9%
5	家事育児との両立が期待できそうにないから	103	100.0%	9	8.7%	13	12.6%	32	31.1%	19	18.4%	27	26.2%	3	2.9%
6	後進の育成に関心がないから	103	100.0%	3	2.9%	8	7.8%	21	20.4%	28	27.2%	40	38.8%	3	2.9%
7	性別に関係なく能力を発揮できそうにないから	103	100.0%	0	0.0%	8	7.8%	30	29.1%	28	27.2%	34	33.0%	3	2.9%

Q25

	現在、早稲田大学の女性教員(専任教員・助手)の比率は13.8%、理工系においては7.8%と低い割合となっています。その現状についてあなたはどのように思いますか? (単一回答)	全体	
		N	%
1	かなり問題だ	138	18.1%
2	やや問題だ	195	25.6%
3	どちらともいえない	229	30.1%
4	それほど問題ではない	126	16.5%
5	全く問題ではない	69	9.1%
0	無回答	5	0.7%
	全体	762	100.0%

Q27

	早稲田大学および女性研究者支援総合研究所では、目標値(全体で25%、理工系で15%)を設定して、女性研究者の比率を増やすための支援を行うことにしています。このことについてあなたはどのように思いますか?またその理由を教えてください (単一回答)	全体	
		N	%
1	賛成	334	43.8%
2	反対	148	19.4%
3	わからない	270	35.4%
0	無回答	10	1.3%
	全体	762	100.0%

Q28

	大学で研究を継続したり、大学での研究職が、より魅力的なものになるために、以下の支援は有効と思いますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		とても有効		やや有効		どちらともいえない		あまり有効でない		全く有効でない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	育児・介護と両立するための相談窓口	762	100.0%	390	51.2%	246	32.3%	79	10.4%	25	3.3%	10	1.3%	12	1.6%
2	学内保育所	762	100.0%	442	58.0%	206	27.0%	75	9.8%	17	2.2%	8	1.0%	14	1.8%
3	(保育所に通えない時の)病時・病後保育	762	100.0%	427	56.0%	224	29.4%	79	10.4%	10	1.3%	8	1.0%	14	1.8%
4	育児・介護費用の補助制度	762	100.0%	450	59.1%	194	25.5%	68	8.9%	19	2.5%	9	1.2%	22	2.9%
5	育児・介護休暇(休学)制度の充実	762	100.0%	487	63.9%	188	24.7%	50	6.6%	11	1.4%	5	0.7%	21	2.8%
6	育児・介護休暇(休学)後の復帰支援制度	762	100.0%	522	68.5%	169	22.2%	43	5.6%	9	1.2%	6	0.8%	13	1.7%
7	セクシュアル(アカデミック)・ハラスメントのない環境づくり	762	100.0%	411	53.9%	212	27.8%	100	13.1%	13	1.7%	14	1.8%	12	1.6%
8	女性教員の積極的採用制度	762	100.0%	221	29.0%	161	21.1%	223	29.3%	69	9.1%	73	9.6%	15	2.0%

Q29

	あなたが大学で研究を継続する上で、以下の支援を今必要としていますか？また利用したいと思いますか？ (マトリクス・単一回答)	全体		今必要がある。ぜひ利用したい		今必要がある。しかし利用したくない		今は必要ないが、今後必要になった時ぜひ利用したい		今は必要なく、今後も利用したくない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	育児・介護と両立するための相談窓口	762	100.0%	53	7.0%	8	1.0%	576	75.6%	111	14.6%	14	1.8%
2	学内保育所	762	100.0%	50	6.6%	11	1.4%	581	76.2%	101	13.3%	19	2.5%
3	(保育所に通えない時の)病時・病後保育	762	100.0%	52	6.8%	6	0.8%	596	78.2%	89	11.7%	19	2.5%
4	育児・介護費用の補助制度	762	100.0%	59	7.7%	5	0.7%	619	81.2%	59	7.7%	20	2.6%
5	育児・介護休暇(休学)制度	762	100.0%	52	6.8%	7	0.9%	615	80.7%	66	8.7%	22	2.9%
6	育児・介護休暇(休学)後の復帰支援制度	762	100.0%	51	6.7%	6	0.8%	621	81.5%	63	8.3%	21	2.8%
7	セクシュアル(アカデミック)・ハラスメントに対する相談窓口	762	100.0%	59	7.7%	19	2.5%	540	70.9%	127	16.7%	17	2.2%
8	女性教員の積極的採用制度(のもとでの応募)	762	100.0%	72	9.4%	14	1.8%	365	47.9%	275	36.1%	36	4.7%

Q31

	現在、北海道大学、名古屋大学等全国の大学および民間研究機関において「男女共同参画室」が設置され、上記Q28、29のような女性研究者を支援する活動が行われています。あなたは、「男女共同参画室」のような組織および活動が、早稲田大学でも必要だと思いますか？また、その理由を(単一回答)	全体	
		N	%
1	必要と思う	421	55.2%
2	必要とは思わない	78	10.2%
3	わからない	244	32.0%
0	無回答	19	2.5%
	全体	762	100.0%

Q32

	男女共同参画推進および育児・介護支援のために、女子学生・女性研究者を中心とした支援相談窓口を大学内に作ることをどう思いますか？また、その理由を教えてください。(単一回答)	全体	
		N	%
1	賛成	438	57.5%
2	反対	94	12.3%
3	わからない	209	27.4%
0	無回答	21	2.8%
	全体	762	100.0%

Q33

	次のような意見について、あなたほどのように思いますが？あなたの気持ちに最も近いもの一つずつ選んでください。 (マトリクス・単一回答)	全体		そう思う		どちらかといえばそう思う		どちらかといえばそう思わない		そう思わない		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1	男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである	762	100.0%	18	2.4%	145	19.0%	174	22.8%	416	54.6%
2	子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ	762	100.0%	102	13.4%	230	30.2%	170	22.3%	249	32.7%	11	1.4%
3	家族を(経済的に)養うのは男性の役割だ	762	100.0%	56	7.3%	206	27.0%	161	21.1%	327	42.9%	12	1.6%

Q34

	最近1ヶ月間のあなたの状態についてうかがいます。最もあてはまるもの一つずつ選んでください (マトリクス・単一回答)	全体		ほとんどいつもあった		しばしばあった		ときどきあった		ほとんどなかった		無回答	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
		1	活気がわいてくる	762	100.0%	93	12.2%	336	44.1%	253	33.2%	67	8.8%
2	元気がいっぱいだ	762	100.0%	107	14.0%	281	36.9%	265	34.8%	94	12.3%	15	2.0%
3	生き生きする	762	100.0%	108	14.2%	296	38.8%	258	33.9%	84	11.0%	16	2.1%
4	怒りを感じる	762	100.0%	48	6.3%	194	25.5%	309	40.6%	197	25.9%	14	1.8%
5	内心腹立たしい	762	100.0%	56	7.3%	175	23.0%	301	39.5%	216	28.3%	14	1.8%
6	イライラしている	762	100.0%	66	8.7%	189	24.8%	315	41.3%	177	23.2%	15	2.0%
7	ひどく疲れた	762	100.0%	129	16.9%	252	33.1%	283	37.1%	86	11.3%	12	1.6%
8	へとへとだ	762	100.0%	94	12.3%	183	24.0%	258	33.9%	213	28.0%	14	1.8%
9	だるい	762	100.0%	90	11.8%	206	27.0%	282	37.0%	172	22.6%	12	1.6%
10	気が張りつめている	762	100.0%	133	17.5%	261	34.3%	240	31.5%	114	15.0%	14	1.8%
11	不安だ	762	100.0%	161	21.1%	218	28.6%	250	32.8%	121	15.9%	12	1.6%
12	落ち着かない	762	100.0%	101	13.3%	160	21.0%	260	34.1%	226	29.7%	15	2.0%
13	ゆううつだ	762	100.0%	98	12.9%	143	18.8%	275	36.1%	232	30.4%	14	1.8%
14	何をやるのも面倒だ	762	100.0%	59	7.7%	130	17.1%	270	35.4%	289	37.9%	14	1.8%
15	物事に集中できない	762	100.0%	66	8.7%	165	21.7%	313	41.1%	205	26.9%	13	1.7%
16	気分が晴れない	762	100.0%	89	11.7%	170	22.3%	285	37.4%	205	26.9%	13	1.7%
17	仕事手がつかない	762	100.0%	58	7.6%	132	17.3%	303	39.8%	254	33.3%	15	2.0%
18	悲しいと感じる	762	100.0%	57	7.5%	104	13.6%	210	27.6%	376	49.3%	15	2.0%

Q35

	あなたの年齢は？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	25歳未満	257	33.7%
2	25～29歳	289	37.9%
3	30～34歳	105	13.8%
4	35歳以上	102	13.4%
0	無回答	9	1.2%
	全体	762	100.0%

Q36

	あなたの所属研究科は？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	政治	32	4.2%
2	経済	17	2.2%
3	法	60	7.9%
4	文	182	23.9%
5	商	46	6.0%
6	理工	228	29.9%
7	教育	61	8.0%
8	社会科学	31	4.1%
9	人間科学	68	8.9%
10	スポーツ科学	21	2.8%
0	無回答	16	2.1%
	全体	762	100.0%

Q37

	あなたの専門をあえて区分すると？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	文系	490	64.3%
2	理系	263	34.5%
0	無回答	9	1.2%
	全体	762	100.0%

Q38

	あなたの身分・資格としてあてはまるものすべてを お答えください。 (複数回答)	全体	
		N	%
1	助手	40	5.2%
2	学術振興会特別研究員	12	1.6%
3	非常勤講師	41	5.4%
4	COEプログラム研究員	19	2.5%
5	留学生	39	5.1%
6	いずれも該当しない	607	79.7%
	全体	762	100.0%

Q39

	あなたは現在結婚していますか？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	未婚	622	81.6%
2	有配偶(事実婚等含む)	125	16.4%
3	離死別	9	1.2%
0	無回答	6	0.8%
	全体	762	100.0%

Q40

	お子さんはいますか？ (単一回答)	全体	
		N	%
1	いない	678	89.0%
2	いる	76	10.0%
0	無回答	8	1.0%
	全体	762	100.0%

Q41

	お子さんの年齢であてはまるところの人数をすべてご記入ください。 (マトリクス・単一回答)		全体		1人		2人		3人		4人		なし	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1 1歳未満	76	100.0%	13	17.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	63	82.9%
2 1～3歳未満	76	100.0%	4	5.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	72	94.7%
3 3～6歳未満(未就学)	76	100.0%	12	15.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	64	84.2%
4 小学生	76	100.0%	10	13.2%	4	5.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	62	81.6%
5 中学生以上	76	100.0%	4	5.3%	12	15.8%	4	5.3%	1	1.3%	55	72.4%		

Q42

	あなたは学部卒業後(博士課程の方は修士修了後も含む)に社会人経験(勤務経験)はありますか (単一回答)	
	N	%
1 ない	525	68.9%
2 ある	225	29.5%
0 無回答	12	1.6%
全体	762	100.0%

Q43

	あなたの現在の経済状況は？ (単一回答)	
	N	%
1 学費・生活費の大半は家族の支援を受けている	290	38.1%
2 生活費はほぼ家族、学費はほぼ自分(奨学金含)でまかなっている	206	27.0%
3 学費・生活費の大半を自分(奨学金含)でまかなっている	252	33.1%
0 無回答	14	1.8%
全体	762	100.0%

付録3. 早稲田大学学生、大学院生、教員数と女性の比率

表1 学生・生徒数 2006年度(2006.5.1)

		学生総数	女性	%	
学部	政治経済学部	4,901	1,126	23.0	
	法学部	4,413	1,328	30.1	
	第一文学部	5,406	2,801	51.8	
	第二文学部	3,109	1,515	48.7	
	教育学部	5,105	1,967	38.5	
	商学部	4,947	1,299	26.3	
	理工学部	7,548	832	11.0	
	社会科学部	3,247	789	24.3	
	人間科学部	2,900	1,224	42.2	
	人間科学部(通信教育課程)	567	312	55.0	
	スポーツ科学部	1,936	550	28.4	
	国際教養学部	1,955	1,174	60.1	
	<b>計</b>		<b>46,034</b>	<b>14,917</b>	<b>32.4</b>
大学院	修士課程	政治学研究科	106	30	28.3
		経済学研究科	74	13	17.6
		法学研究科	131	51	38.9
		文学研究科	411	206	50.1
		商学研究科	212	57	26.9
		理工学研究科	2,256	220	9.8
		教育学研究科	211	104	49.3
		人間科学研究科	220	120	54.5
		社会科学研究科	102	26	25.5
		アジア太平洋研究科(国際関係学専攻)	252	140	55.6
		国際情報通信研究科	271	75	27.7
		日本語教育研究科	109	96	88.1
		情報生産システム研究科	264	38	14.4
	スポーツ科学研究科	123	27	22.0	
	<b>小計</b>		<b>4,742</b>	<b>1,203</b>	<b>25.4</b>
	博士後期課程	政治学研究科	82	19	23.2
		経済学研究科	57	15	26.3
		法学研究科	140	48	34.3
		文学研究科	420	197	46.9
		商学研究科	53	12	22.6
理工学研究科		375	46	12.3	
教育学研究科		145	66	45.5	
人間科学研究科		113	52	46.0	
社会科学研究科		94	29	30.9	
アジア太平洋研究科(国際関係学専攻)		191	64	33.5	
国際情報通信研究科		96	18	18.8	
日本語教育研究科		64	55	85.9	
情報生産システム研究科		123	14	11.4	
スポーツ科学研究科	22	6	27.3		
公共経営研究科	10	3	30.0		
<b>小計</b>		<b>1,985</b>	<b>644</b>	<b>32.4</b>	
専門職学位課程	アジア太平洋研究科(国際経営学専攻)	305	63	20.7	
	公共経営研究科	130	42	32.3	
	ファイナンス研究科	264	31	11.7	
	法務研究科	811	207	25.5	
	会計研究科	222	33	14.9	
<b>小計</b>		<b>1,727</b>	<b>376</b>	<b>21.7</b>	
<b>計</b>		<b>8,459</b>	<b>2,223</b>	<b>26.3</b>	
芸術学校		373	135	36.2	
川口芸術学校		87	25	28.7	
高等学院		1,832	0	0.0	
本庄高等学院		745	0	0.0	
別科日本語専修課程		161	94	58.4	
<b>総計</b>		<b>57,124</b>	<b>17,082</b>	<b>29.9</b>	

出典 『統計で見る早稲田大学』2006年度版 早稲田大学教務部。(女性比率は筆者による算出)

表2 学生数推移

年度	学部			大学院修士課程			大学院博士後期課程			大学院専門職学位課程		
	学生 総数	女性	%	学生総 数	女性	%	学生総 数	女性	%	学生 総数	女性	%
1980	40,721	5,420	13.3	1,765	188	10.7	811	71	8.8			
1990	44,062	8,524	19.3	2,422	334	13.8	728	105	14.4			
1991	43,538	8,757	20.1	2,685	427	15.9	764	125	16.4			
1992	43,544	8,923	20.5	2,713	475	17.5	779	135	17.3			
1993	43,412	9,159	21.1	2,803	552	19.7	832	156	18.8			
1994	42,763	9,333	21.8	3,117	634	20.3	870	177	20.3			
1995	42,524	9,559	22.5	3,337	754	22.6	912	211	23.1			
1996	42,515	10,111	23.8	3,351	734	21.9	996	238	23.9			
1997	42,387	10,503	24.8	3,336	690	20.7	1,056	274	25.9			
1998	42,794	11,042	25.8	3,556	790	22.2	1,114	298	26.8			
1999	43,599	11,376	26.1	3,944	934	23.7	1,177	318	27.0			
2000	44,236	11,730	26.5	4,301	993	23.1	1,296	362	27.9			
2001	44,160	12,150	27.5	4,601	1,093	23.8	1,407	400	28.4			
2002	44,576	12,719	28.5	4,657	1,199	25.7	1,490	433	29.1			
2003	44,688	13,229	29.6	4,745	1,189	25.1	1,676	465	27.7	188	40	21.3
2004	45,451	13,901	30.6	4,774	1,117	23.4	1,810	550	30.4	773	192	24.8
2005	45,549	14,437	31.7	4,764	1,161	24.4	1,877	578	30.8	1,366	346	25.3
2006	46,034	14,917	32.4	4,742	1,203	25.4	1,985	644	32.4	1,732	376	21.7

出典 「数字で見る早稲田」 <http://www.waseda.jp/global/guide/databook/2006/index.html> (女性比率は筆者による算出)

表3 教員数 資格別 2004年度～2006年度

年度		2006年度(2006.4.1)			2005年度(2005.4.1)			2004年度(2004.4.1)		
		教員総数	女性	%	教員総数	女性	%	教員総数	女性	%
専任	教授	977	77	7.9	966	70	7.2	944	65	6.9
	特任教授	28	0	0.0	28	0	0.0	24	0	0.0
	助教授	168	34	20.2	186	39	21.0	187	42	22.5
	専任講師	29	7	24.1	31	6	19.4	35	4	11.4
	教諭	105	5	4.8	107	6	5.6	109	6	5.5
	小計	1,307	123	9.4	1,318	121	9.2	1,299	117	9.0
	助手	359	93	25.9	346	90	26.0	337	71	21.1
	計	1,666	216	13.0	1,664	211	12.7	1,636	188	11.5
専任扱い	客員教授	98	6	6.1	97	5	5.1	91	5	5.5
	客員助教授	50	6	12.0	40	4	10.0	26	1	3.8
	客員講師	104	26	25.0	93	23	24.7	83	16	19.3
	客員講師	6	2	33.3	6	2	33.3	3	1	33.3
	客員研究助手	99	20	20.2	94	23	24.5	64	18	28.1
	小計	357	60	16.8	330	57	17.3	267	41	15.4
非常勤	客員教授	295	10	3.4	249	7	2.8	193	6	3.1
	客員助教授	49	4	8.2	49	5	10.2	30	2	6.7
	客員講師	81	19	23.5	71	17	23.9	51	9	17.6
	講師	3,265	668	20.5	3,132	651	20.8	3,068	624	20.3
	小計	3,690	701	19.0	3,501	680	19.4	3,342	641	19.2
	計	5,713	977	17.1	5,495	948	17.2	5,245	870	16.6

出典 『統計で見る早稲田大学』各年度版 早稲田大学教務部。(女性比率は筆者による算出)

表4 職員数 職種別 2004年度～2006年度

年度		2006年度(2006.4.1)			2005年度(2005.4.1)			2004年度(2004.4.1)		
		全職員数	女性	%	全職員数	女性	%	全職員数	女性	%
専任職員	部長級	53	2	3.8	44	2	4.5	43	3	7.0
	課長・事務長級	101	10	9.9	94	9	9.6	92	9	9.8
	主幹	0	0	0.0	0	0	0.0	2	0	0.0
	特任職	1	0	0.0	1	0	0.0	0	0	0.0
	事務職	447	140	31.3	447	144	32.2	432	142	32.9
	司書職	51	27	52.9	54	28	51.9	57	30	52.6
	技術職	96	6	6.3	100	7	7.0	103	7	6.8
	医療職	10	10	100.0	10	10	100.0	10	10	100.0
	技能職	5	4	80.0	5	4	80.0	5	4	80.0
	用務職	0	0	0.0	0	0	0.0	1	0	0.0
	小計	764	199	26.0	755	204	27.0	745	205	27.5
嘱託・他		136	57	41.9	131	55	42.0	129	54	41.9
<b>計</b>		<b>900</b>	<b>256</b>	<b>28.4</b>	<b>886</b>	<b>259</b>	<b>29.2</b>	<b>874</b>	<b>259</b>	<b>29.6</b>

出典 『統計で見る早稲田大学』各年度版 早稲田大学教務部。(女性比率は筆者による算出)

## 女性研究者支援総合研究所

所長：棚村 政行（法務研究科教授）

研究員：

浅倉 むつ子（法務研究科教授）	石田 眞（法務研究科教授）
円城寺 守（教育・総合科学学術院教授）	片山 博（理工学術院教授）
勝方 恵子（国際教養学術院教授）	加藤 尚志（教育・総合科学学術院教授）
川田 宏之（理工学術院教授）	菊池 馨実（法学学術院教授）
北山 雅昭（教育・総合科学学術院教授）	木村 晶子（教育・総合科学学術院教授）
久保 純子（教育・総合科学学術院教授）	河野 貴美子（文学学術院専任講師）
越川 房子（文学学術院教授）	小林 富久子（教育・総合科学学術院教授）
齋藤 美穂（人間科学学術院教授）	坂内 夏子（教育・総合科学学術院助教授）
嶋崎 尚子（文学学術院教授）	島田 陽一（法務研究科教授）
高木 秀雄（教育・総合科学学術院教授）	高松 敦子（理工学術院助教授）
谷口 真美（商学学術院助教授）	多辺 由佳（理工学術院教授）
中村 采女（理工学術院教授）	長谷部 信行（理工学術院教授）
東中川 徹（教育・総合科学学術院教授）	福井 庸子（教育・総合科学学術院助手）
藤野 京子（文学学術院助教授）	古荘 玲子（教育・総合科学学術院助手）
星井 牧子（法学学術院助教授）	村田 晶子（文学学術院教授）
矢口 徹也（教育・総合科学学術院教授）	弓削 尚子（法学学術院助教授）

客員教員（非常勤）

名取 はにわ（客員教授）

客員教員（専任）

荻野 佳代子（客員講師） 金 亮完（客員講師）

客員研究助手

榎本 裕子 戸邊 恵里

研究補助員

小村 由香（文学研究科博士課程4年） 計良 陽子（理工学研究科博士課程4年）  
笹野 悦子（文学学術院講師）

平成18年度文部科学省科学技術振興調整費

女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」成果2006-1

研究者養成のための男女平等プランに関する調査(1)  
大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書

2007年3月14日発行

発行 早稲田大学 白井克彦

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町 27-7

41-31号館 1F 女性研究者支援総合研究所

電話 03-3203-4610

<http://www.waseda.jp/prj-giwr/>